

甲府城下町遺跡 XV

(丸の内 2-145-2 地点・丸の内 1-12-10 地点)
— 宅地造成・区画整理に伴う発掘調査報告書 —

2 0 1 5

甲 府 市
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

序

戦国の猛虎とも称せられる甲斐国守護武田信虎は、永正 16 年（1519）、その居館を川田から躑躅が崎に遷しました。そしてその地を甲斐府中（甲斐国の中心地）と称したことに「甲府」が始まります。

甲府のまちは、武田信虎・信玄・勝頼の 60 余年におよぶ治世によって戦国時代の城下町として確立され、武田家滅亡後も一条小山に築かれた甲府城を中心に、甲斐国の政治・経済の中心を担ってまいりました。

このたび発掘調査を実施した場所の付近は、甲府城の築城前夜には浄土真宗の長延寺があったと推定されます。また、それ以降も甲府の政治運営に大きくかかわった上級武士の屋敷地として利用されてきた場所にあたります。今後、調査事例を重ねることにより、より詳らかな歴史の変遷が明らかにされるものと期待しております。

結びに、関係された方々のご理解とご協力により、調査を円滑に実施できたことに御礼を申し上げますとともに、本報告書が歴史や文化財理解の一助として広く活用されれば幸いです。

平成 27 年 3 月

甲府市教育委員会
教育長 長谷川義高

例 言

1. 本報告書は、山梨県甲府市丸の内2丁目145-2地点および丸の内1丁目12-10地点に所在する甲府城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 山梨県甲府市丸の内2丁目145-2地点の発掘調査は宅地造成、丸の内1丁目12-10地点の発掘調査は、区画整理に先立って実施された本調査である。甲府市教育委員会の指導・監督・助言のもと昭和測量株式会社が発掘調査および整理作業を行った。
3. 発掘調査および整理・報告書刊行業務は、
甲府城下町遺跡2丁目地点
発掘調査：平成24年6月9日～7月9日 調査員 泉英樹（昭和測量株式会社）
整理・報告書刊行業務：平成26年8月22日～平成27年3月13日
甲府城下町遺跡1丁目地点
発掘調査：平成25年8月26日～10月11日 調査員 小谷亮二（昭和測量株式会社）
整理・報告書刊行業務：平成26年8月22日～平成27年3月13日
4. 発掘調査および本報告書の執筆は、
第1章調査に至る経緯は平塚洋一（甲府市教育委員会）が担当し、第2章からの執筆および全体の編集を小谷亮二が担当した。
遺物の実測およびトレースは、藤原由香、上島光子、齋藤里美が行った。遺物写真は小谷が撮影を行った。
5. 本報告書で使用した地図は、国土地理院発行の「甲府」（1:25000）を使用した。
6. 遺跡における X、Y 座標は世界測地系座標を使用している。
7. 本調査における図面・写真・遺物はすべて甲府市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各挿図中に記載した。
2. 写真図版の縮尺は任意である。
3. 水系レベルの数字は海拔高を示し、単位はメートル (m) である。
4. 土層断面、遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖 1990 年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	4
第3節 甲府城下町の変遷	8
第4節 周辺における発掘調査	11
第5節 土地利用変遷	12
甲府城下町遺跡丸の内2丁目145-2 地点	
第3章 調査の方法と基本層序	
第1節 調査の方法	20
第2節 基本層序	20
第4章 遺構と遺物	
第1節 検出状況	21
第2節 溝状遺構	21
第3節 土坑	21
第4節 石列	22
第5節 出土した遺物	22
甲府城下町遺跡丸の内1丁目12-10 地点	
第3章 調査の方法と基本層序	
第1節 調査の方法	44
第2節 基本層序	44
第4章 遺構と遺物	
第1節 検出状況	44
第2節 溝状遺構	45
第3節 土坑	45
第4節 ピット	45
第5節 出土した遺物	45
甲府城下町遺跡丸の内2丁目145-2 地点・丸の内1丁目12-10 地点	
第5章 まとめ	57
参考文献	59

挿図目次

第1図	遺跡地点図	2
第2図	遺跡周辺の地形(「国土理知院撮影の空中写真」)	3
第3図	周辺の遺跡分布図	6
第4図	周辺の甲府城下町遺跡調査地点	10
第5図	土地利用変遷図(1)	14
第6図	土地利用変遷図(2)	15
第7図	土地利用変遷図(3)	16
第8図	土地利用変遷図(4)	17
第9図	土地利用変遷図(5)	18
第10図	調査区位置図	19
甲府城下町遺跡丸の内2丁目145-2地点		
第11図	土層断面図	24
第12図	遺構全体図	25
第13図	1・2・5号溝状遺構	26
第14図	3・4号溝状遺構	27
第15図	SX1	28
第16図	SX2・3	29
第17図	土坑(1)	30
第18図	土坑(2)	31
第19図	土坑(3)	32
第20図	土坑(4)	33
第21図	土坑(5)	34
第22図	土坑(6)・杭	35
第23図	遺物出土分布図	37
第24図	遺物実測図(1)	38
第25図	遺物実測図(2)	39
第26図	遺物実測図(3)	40
甲府城下町遺跡丸の内1丁目12-10地点		
第27図	土層断面図	46
第28図	遺構全体図	47
第29図	1・2号溝状遺構	48
第30図	3号溝状遺構	48
第31図	1号土坑	49
第32図	3号土坑	49
第33図	2・4・5号土坑	50
第34図	ピット(1)	51
第35図	ピット(2)	52

第36図 遺物出土分布図	53
第37図 遺物実測図(1)	54
第38図 遺物実測図(2)	55
第39図 丸の内2丁目地点時期別遺構図	58

表目次

表1 周辺の遺跡地名表	7
表2 周辺の甲府城下町遺跡調査地点	11
甲府城下町遺跡丸の内2丁目145-2地点	
表3 溝状遺構計測表	28
表4 SX計測表	28
表5 土坑計測表	36
表6 遺物観察表(1)	41
表7 遺物観察表(2)	42
表8 遺物観察表(3)	43
甲府城下町遺跡丸の内1丁目12-10地点	
表9 溝状遺構計測表	48
表10 土坑計測表	49
表11 ピット計測表	52
表12 遺物観察表	56

写真図版目次

丸の内二丁目 145-2 地点

写真図版1

1. 調査前風景
2. 調査区（真上から）

写真図版2

3. 調査区（北から）
4. 調査区（北東から）

写真図版3

5. 調査区周辺（北から）
6. 調査区北壁東側
7. 調査区北壁西側
8. 調査区東壁

写真図版4

9. 調査区西壁北側
10. 調査区西壁南側
11. 調査区南壁
12. SD1・2（北東から）

写真図版5

13. SD1・2土層断面（南から）
14. SD2南側焼土検出1（南から）
15. SD2北側焼土検出2（南から）
16. SD2土層断面（南から）
17. SD2獣骨出土状況（南から）
18. SD3（北から）
19. SD3・SK12土層断面（南から）
20. SD3遺物出土状況（南から）

写真図版6

21. SD4（南から）
22. SD5（南から）

写真図版7

23. SD4土層断面（南から）
24. SD5土層断面（南から）
25. SX1（南西から）

写真図版8

26. SX2（南から）
27. SX2礫除去（南から）

写真図版9

28. SX3（南から）

29. SK1（南から）

30. SK1・SD1土層断面（南から）

31. SK2（南から）

32. SK2土層断面（南から）

写真図版10

33. SK3（南から）

34. SK3土層断面（南から）

35. SK4（南から）

36. SK4土層断面（南から）

37. SK7（南から）

38. SK7土層断面（南から）

39. SK8（南西から）

40. SK8土層断面（南西から）

写真図版11

41. SK10 検出状況（北から）

42. SK10 上面出土状況（北から）

43. SK10 土層断面（南から）

44. SK10 底板（南から）

写真図版12

45. SK10 断割り（南から）

46. SK11（南から）

47. SK11 土層断面（南から）

48. SK12（南から）

49. SK12 根固石（南から）

写真図版13

50. SK13（南から）

51. SK13 土層断面（南から）

52. SK14（西から）

53. SK14 土層断面（西から）

54. SK17（南から）

55. SK17 土層断面（南から）

56. SK18（南から）

57. SK18 土層断面（南西から）

写真図版14

58. SK24（南から）

59. SK25（南から）

60. SK25 土層断面（南から）

61. SK26（北から）

62. SK 27 (北から)
63. SK 27 土層断面 (南から)
64. SK 28 (南から)
65. SK 28 土層断面 (北東から)

写真図版 15

66. SK 32・33 (南から)
67. SK 32・33 断割り (東から)
68. SK 35 (北から)
69. SK 35 土層断面 (西から)
70. SK 35 東西土層断面 (北から)
71. SK 35 遺物出土状況1 (北から)
72. SK 35 遺物出土状況2 (東から)
73. SK 37 (南から)

写真図版 16

74. 杭1断割り (北から)
75. 杭2断割り (西から)
76. SD 4 周辺遺構検出状況 (南から)
77. B 4 グリッド遺物出土状況 (北東から)
78. C 4 グリッド獣骨出土状況 (西から)
79. D 3 グリッド遺物出土状況 (北から)
80. 作業風景 (北西から)
81. 実測風景 (北東から)

写真図版 17 出土遺物 (1)

写真図版 18 出土遺物 (2)

丸の内一丁目 12-10 地点

写真図版 1

1. 調査前風景1 (南から)
2. 調査前風景2 (南から)

写真図版 2

3. 調査区高所撮影写真

写真図版 3

4. 調査区北側地山礫層 (南から)
5. 調査区南側遺構検出状況 (北から)

写真図版 4

6. 調査区北壁土層断面
7. 調査区東壁土層断面1 (南西から)
8. 調査区東壁土層断面2
9. 調査区東壁土層断面3
10. 調査区南壁土層断面

11. 調査区西壁土層断面1 (南東から)
12. 調査区西壁土層断面2 (南東から)
13. 調査区西壁土層断面3 (南東から)

写真図版 5

14. SD 1 (北西から)
15. SD 2 (北西から)
16. SD 1 土層断面 (東から)
17. SD 2 土層断面 (西から)
18. SD 3 (南東から)
19. SD 3 東壁土層断面 (西から)

写真図版 6

20. SK 1 (東から)
21. SK 1 土層断面 (東から)
22. SK 2・4・5 (東から)
23. SK 2・4・5 (北西から)
24. SK 2・4・5 東壁土層断面 (西から)
25. SK 2・4・5 南壁土層断面 (北から)
26. SK 3 (東から)

写真図版 7

27. Pit 1 (東から)
28. Pit 1 土層断面 (東から)
29. Pit 2 (東から)
30. Pit 2 土層断面 (東から)
31. Pit 3 (東から)
32. Pit 3 土層断面 (東から)
33. Pit 4 (東から)
34. Pit 4 土層断面 (北から)

写真図版 8

35. Pit 5 (北西から)
36. Pit 5 土層断面 (西から)
37. Pit 6 (西から)
38. Pit 6 土層断面 (西から)
39. Pit 7 (北西から)
40. Pit 8 (南西から)
41. 作業風景 (北東から)
42. 実測作業風景 (南から)

写真図版 9 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

丸の内2丁目 145-2 地点

甲府市丸の内2丁目 145-2 地点は、甲府城下町遺跡のなかでも武家屋敷地にあたる。武家屋敷といっても新先手小路に面する下級武士の屋敷地にあたるものと思われる。甲府市では甲府城内および武家屋敷においては、基本的に試掘調査を実施しており、本地点の北側及び東側の隣接地においても、試掘調査の結果江戸時代の溝跡等が検出されたことから、平成21年および同22年にかけて本発掘調査を実施してきた。その結果、溝跡や井戸跡など江戸時代の生活の痕跡が検出された。

隣接地の調査結果を受け、本地点においても宅地造成に先立って本発掘調査を実施することとなった。

【調査体制】

調査担当者 平塚洋一（甲府市教育委員会） 泉 英樹・高野高潔・小谷亮二（昭和測量株式会社）

発掘補助員 池谷千代子・塩沢宏紀・竹野 章・田中孝雄・原田隆邦・原田みゆき・伊藤弘将・原田徳臣・遠藤実雄

整理補助員 上島光子・大森透江・齊藤里美・藤原由香

丸の内1丁目 12-10 地点

甲府市丸の内1丁目 12-10 地点は、甲府城下町遺跡のなかでも武家屋敷地にあたる。なかでも古絵図等の比較検討から、甲府城の創建期には甲府城代の屋敷地の一部だったことが想定されている。江戸中期の柳沢氏支配の時代には、筆頭家老を務めた柳沢権大夫保格の屋敷地の一部となる。江戸後期、甲府は山手と大手の勤番支配となるのだが、調査地点の北側の区画には山手御役宅が所在したことが想定される。

平成14年、区画整理に伴い山梨県埋蔵文化財センターが西側隣接地を発掘調査し、江戸時代の遺構に伴い、陶磁器をはじめ多くの遺物が出土している。また、平成24年、南側の道路整備に伴い甲府市教育委員会が発掘調査を実施し、今回の調査地点の南側の部分から江戸時代前半までさかのぼる溝跡が検出されている。以上の調査結果を受け、本地点においても造成に先立って本発掘調査を実施することとなった。

【調査体制】

調査担当者 平塚洋一（甲府市教育委員会） 小谷亮二・高野高潔・泉 英樹（昭和測量株式会社）

発掘補助員 長田秋文・小澤美幸・小林としみ・齋藤里美・田中孝雄・広瀬ありさ・松本榮一

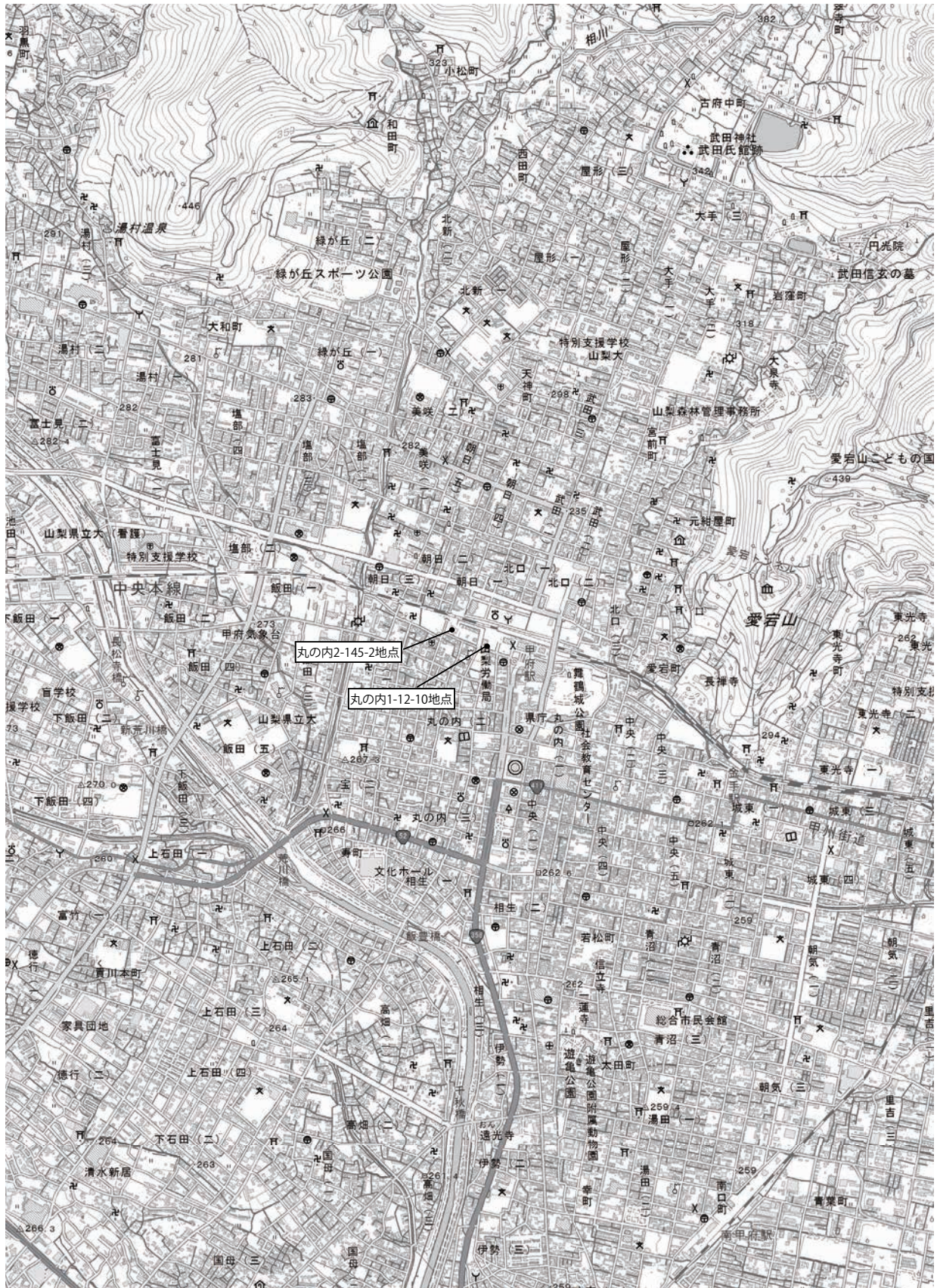
整理補助員 上島光子・大森透江・齊藤里美・藤原由香

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地

この報告書は、丸の内2丁目 145-2 地点（以下、丸の内2丁目地点）および丸の内1丁目 -12-10 地点（以下、丸の内1丁目地点）の報告書である。古絵図による位置は、丸の内2丁目地点は馬場先小路から北に伸びる新先手小路の相川町口付近、丸の内1丁目地点は馬場先小路と御先手小路の交差点付近に位置している。

調査地点の地形が構成されるにいたった扇状地・自然堤防は、調査地点の西側を南に流下する相川によって形成された。相川は甲府盆地の北部山地（奥秩父山塊に続く太良峠）を源とし、現在は寿町で荒川と合流し甲府盆地を南流した後、笛吹川と合流する。北東側を南に流下する藤川は濁川に合流する。



第1図 遺跡地点図



第2図 遺跡周辺の地形（「国土地理院撮影の空中写真（1948年撮影）」）

甲府城の北西から北東側は山地で囲まれ、東側には愛宕山（標高 423 m）、その西南端には甲府城（内城）が築かれた一条小山（標高 304 m）が位置する。

甲府城下町遺跡は標高 260 m～300 mを測る扇状地斜面に位置しており、調査地点の標高は 272 mを測る。

第2節 歴史的環境

甲府盆地および盆地の北から東に位置する丘陵には、縄文時代～近世に至るまで多くの遺跡が分布している。甲府城下町およびその周辺における調査では、縄文時代～平安時代の遺構は検出されないものの遺物は出土している。さらに扇状地上の遺跡では、弥生時代から古墳時代あるいは平安時代までの複合遺跡や、甲府城下町遺跡の南側では多くの古墳時代の遺跡が分布している。このことから、扇状地という立地条件や河川の流路の変動、中・近世における土地利用改革の影響を受けなければさらに多くの遺跡が分布していたのではないと思われる。

以下、第4図で示した周辺の遺跡を紹介する。

縄文時代

甲府城跡や甲府城下町遺跡の調査では明確な遺構は確認されていないが縄文土器や石器などが出土した。周辺の遺跡として、8 八幡東遺跡は弥生時代から古墳時代の遺跡であるが、平成 11 年 3 月の調査により縄文時代中期後半の遺物が出土している。18 緑ヶ丘二丁目遺跡は縄文時代から平安時代に至る遺物が出土している。平成 6 年の調査では、遺構は検出されなかったが縄文時代中期中葉から後葉を中心とした土器が出土し、黒曜石、鉄石英、粘板岩といった石材も出土している。同年第 5 次調査からは、縄文時代中期の曾利式土器が出土したことから縄文時代の集落跡が展開した事も想定される。19 緑ヶ丘一丁目遺跡は平成 4 年の試掘調査の結果、縄文時代の底部片と黒曜石片 1 点が出土した。土器片は縄文中期初頭あるいは前葉のものと推測される。39 武田城下町遺跡・大手遺跡からは、平成 19 年の調査で縄文時代のピットが 13 基が検出された。ピット 9 は縄文土器とともに大量の黒曜石の剥片が出土している。出土した剥片の状況から粗割した黒曜石を持ち込み加工した事によって発生した破片をピット 9 に廃棄したと考えられる。ピット 12 は焼土が検出された。周辺の土が完全に変質していたことから長期間にわたり火を焚いたと思われる。焼土に伴い石皿として使用したと思われる石も出土している。甲府市街では縄文時代の遺構検出は非常に珍しい。59 宝町遺跡からは縄文時代前期後葉の諸磯 a 式土器が出土した。62 上石田遺跡からは縄文時代中期中葉から後葉にかけての 3 軒の住居址と石囲土坑 1 基が検出された。遺物は大量の土器・石器が出土した。

弥生時代

甲府盆地の北および南の何れも自然堤防、扇状地上に分布している。18 緑ヶ丘二丁目遺跡からは平成 6 年 6 次調査で手捏土器が出土しており祭祀的要素が考えられる。7 次調査では弥生時代後期末葉から古墳時代前期前葉を中心とした土器が出土した。弥生時代の土器は朱（ベンガラ）が塗布されている。その祖形は菊川式土器に求められる、4 世紀後葉から 5 世紀前葉頃が考えられる。56 塩部遺跡からは平成 7 年の調査において、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓 11 基、弥生時代後期の住居址 1 棟が、平成 13～16 年の調査では弥生時代後期～古墳時代後期住居址 45 棟、掘立柱建物跡 27 棟の他、古墳時代前期の方形周溝墓 4 基が検出された。57 音羽遺跡の 1 次調査では弥生時代の住居跡 2 軒が検出されている。78 幸町 A 遺跡は昭和 54 年の道路工事の際、弥生中期の土器が採取されている。平成 8 年の調査で溝跡 10 条が確認され、その下層から竪穴建物跡 1 棟、ピット 7 基、土坑 3 基が検出された。溝跡は畑などの畝の可能性がある。竪穴建物跡からはピット 3 基が検出され、壺・甕類が出土している。

10号溝跡からは小型壺や甕などがまとまって出土しており、時期は弥生時代後期と考えられる。

古墳時代

遺跡の分布は、盆地の北および東に位置する丘陵上に集中しているが、扇状地上では、弥生時代から古墳時代、もしくはそれ以降の時代の遺構が検出される複合遺跡が多く、さらに甲府城下町遺跡の影響を受けていない盆地の南側の区域でも古墳時代の遺跡が集中して分布している。本報告書の遺跡地図には掲載されていないが、この区域の古墳を検討するためには加牟那塚古墳からの系譜を見ていかなくてはならない。昭和45年に石室入口部修理に伴い墳丘・石室の測量調査が行われた。その結果、直径40～45m、高さ7m程の円墳で周囲に周溝が巡ると推測される。高さは削平された可能性がある。内部主体は南に開口する右片袖型横穴式石室である。石室の規模は本県第2位の規模を誇る。副葬品は、須恵器、ガラス製丸玉が確認されている。須恵器の蓋坏は6世紀後半の時期のもので、この頃に築造されたと思われる。かつて神獸鏡、盤龍鏡、甕龍鏡などが出土されていたとされている。平成21年には円筒埴輪・形象埴輪が出土している。県指定史跡である。16万寿森古墳は、現存する墳丘の規模は直径約25m、墳丘下端から墳頂までの高さは約7m。主体部は南に開口する両袖型の横穴式石室である。『甲斐国志』に記述が見られ、江戸時代には煙硝蔵として用いられていた。副葬品の出土は知られていない。平成18年の調査において周溝が確認され、出土した遺物から6世紀第2四半期の年代が想定できる。湯村山古墳群東支群（9湯村山6号墳・11湯村山5号墳・12湯村村4号墳・13湯村山3号墳・14湯村山2号墳・15湯村山1号墳）はすべて円墳で1号墳は唯一積石塚である。遺物は6号墳の石室から直刀1振（両関撫角式の平棟平造で全長64.7cm）、金環1個が採集されている。西支群（6大平1号墳・7大平2号墳他）の内大平1号墳は円墳と思われる。1・2号墳共に南に開口する右片袖型の横穴式石室である。遺物は知られていない。22永井遺跡からは平成9年の調査において古墳時代～平安時代の土器が出土している。56塩部遺跡からは古墳時代前期の集落、方形周溝墓が検出された。この事から甲府盆地北部における一勢力圏を形成していたと思われる。57音羽遺跡は平成15年の調査で竪穴式住居跡が13棟確認された。出土遺物から古墳時代中期から後期の住居、9世紀後半、10世紀代に区分できる。遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・土製品が出土している。58富士見遺跡は古墳時代前期の水田跡が検出された。75青沼遺跡からは古墳時代後半から平安時代にいたる住居跡21軒と古墳時代の溝跡1条が検出された。古墳時代の溝跡の中から小型の壺（埴）、手捏土器が出土しており祭祀の様相を示している。80朝気遺跡からは、弥生時代終末期から平安時代終末期の住居跡、古墳時代後期の大溝、平安時代後期の水田跡の他、土坑、溝跡、シガラミ状遺構、旧河川が検出された。遺物は、縄文時代後期から平安時代までの遺物が出土している。5次調査においては、大溝の覆土から古墳時代後期の土師器と、人形や田舟などの木器、動物骨、植物種子が出土している。84家之前遺跡からは平成8年の調査で、坏、土師器小片が出土している。4次調査では溝と溝に囲まれた方形のプランが検出された。このプランから土師器片200点以上が出土している。内訳は、壺・小型壺・S字甕・甕・台付甕・高坏などで古墳時代前期に属すると思われる。方形周溝墓が検出されている。85十丁遺跡は竪穴住居跡や方形周溝墓が検出された。遺物や古墳時代前期の土器や仏具の真鍮製の鍮状金具が出土している。平成15年度の調査では、住居跡10棟、溝30条、土坑および小竪穴（ピット）等が確認されている。遺物は、古墳時代前期を中心にほぼ古墳時代全期に及ぶ。坏・高坏・甕・壺・器台等が出土している。木製品では田下駄あるいは大足が出土した。



第3図 周辺の遺跡分布図

表1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	集落跡
2	甲府城跡	近世	城館跡
3	天神平遺跡	平安時代	散布地
4	羽黒無名墳	古墳時代	古墳
5	塩沢寺裏無名墳	古墳時代	古墳
6	大平1号墳	古墳時代	古墳
7	大平2号墳	古墳時代	古墳
8	八幡東遺跡	弥生・古墳	散布地
9	湯村山6号墳	古墳時代	古墳
10	湯山村城跡	中世	城館跡
11	湯村山5号墳	古墳時代	古墳
12	湯村山4号墳	古墳時代	古墳
13	湯村山3号墳	古墳時代	古墳
14	湯村山2号墳	古墳時代	古墳
15	湯村山1号墳	古墳時代	古墳
16	万寿森古墳	古墳時代	古墳
17	和田無名墳	古墳時代	古墳
18	緑ヶ丘二丁目遺跡	古墳～平安	古墳
19	緑ヶ丘一丁目遺跡	古墳時代	散布地
20	三光寺山遺跡	古墳時代	古墳
21	十二天遺跡	平安時代	散布地
22	永井遺跡	古墳・平安	散布地
23	村之内遺跡	古墳・平安	散布地
24	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地
25	向田B遺跡		散布地
26	西前田B遺跡		散布地
27	御馬屋小路B遺跡		散布地
28	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地
29	不動遺跡	近世～	散布地
30	日影遺跡		散布地
31	土屋敷遺跡	中世	城館跡
32	お塚さん古墳	古墳時代	古墳
33	峰本南A遺跡	近世	寺院跡
34	峰本南B遺跡	近世	散布地
35	長閑遺跡	中世	包蔵地
36	武田氏館跡	中世	城館跡
37	武田城下町遺跡	中世	集落跡
38	躑躅ヶ崎亭跡	中世	城館跡
39	大手下遺跡	縄文時代	散布地
40	永慶寺跡	中世	寺院跡
41	岩窪C遺跡	古墳時代	散布地
42	中道東遺跡	近世	散布地
43	中道西遺跡	古墳時代	散布地
44	岩窪遺跡	奈良・平安・中世	包蔵地
45	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地

番号	遺跡名	時代	種別
46	コッ塚古墳	古墳時代	古墳
47	八幡神社遺跡	縄文時代	散布地
48	新紺屋小学校遺跡	近世	散布地
49	ニッ塚2号墳	古墳時代	古墳
50	ニッ塚1号墳	古墳時代	古墳
51	ニッ塚3号墳	古墳時代	古墳
52	大笠山水の元遺跡	古墳時代～	散布地
53	亥ノ兎遺跡	平安時代～	散布地
54	大六天遺跡	平安時代～	散布地
55	御崎田遺跡	平安時代	散布地
56	塩部遺跡	弥生～平安	包蔵地
57	音羽遺跡	弥生・古墳	散布地
58	富士見遺跡	古墳・平安	散布地
59	宝町遺跡	縄文・平安	包蔵地
60	寿町遺跡	古墳時代～	包蔵地
61	上石田B遺跡	平安時代	散布地
62	上石田遺跡	縄文時代	集落跡
63	上河原遺跡	平安時代～	散布地
64	渋沢遺跡	平安時代～	散布地
65	大北河原遺跡	平安時代	散布地
66	久保北河原遺跡	平安時代	散布地
67	渋沢遺跡	平安時代～	散布地
68	秋山氏館跡	中世	城館跡
69	千松院遺跡	中世～	散布地
70	伊勢町遺跡	古墳時代	包蔵地
71	食糧工場遺跡	縄文・弥生	包蔵地
72	木俣遺跡	近世	散布地
73	般舟院跡	中世	寺院跡
74	太田町遺跡	古墳時代～	散布地
75	青沼遺跡	古墳時代	包蔵地
76	青沼三丁目遺跡	中世～	散布地
77	湯田一丁目遺跡	古墳時代	散布地
78	幸町A遺跡	弥生時代	包蔵地
79	幸町B遺跡	古墳時代	散布地
80	朝気遺跡	縄文～平安	集落跡
81	南口町A遺跡	平安時代	散布地
82	南口町B遺跡	平安時代	散布地
83	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
84	家之前遺跡	平安時代	散布地
85	十丁遺跡	古墳時代	散布地
86	十丁B遺跡	古墳時代	散布地
87	字前A遺跡	古墳時代	散布地
88	北松遺跡	平安時代	散布地
89	青葉町遺跡	平安時代	散布地

奈良・平安時代

甲府盆地北および東の丘陵縁辺部から南の扇状地（低位段丘）に到るまで分布している。56 塩部遺跡からは平成7年の調査において、奈良・平安時代の住居址8棟が検出された。57 音羽遺跡の1次調査では古墳時代後期～奈良時代の住居跡3軒他、2次調査では古墳時代～奈良時代の住居跡2軒、古墳時代～奈良時代もしくはそれ以降と思われる方形竪穴状遺構、土坑、溝状遺構、礎石が検出されている。遺物は、土師器、須恵器、石製の錘や灰釉の長頸壺他が出土している。75 青沼遺跡からは古墳時代後半から平安時代にいたる住居跡21軒と平安時代の溝跡5条が検出された。

中世

18 緑ヶ丘二丁目遺跡からは平成6年の第3次調査で人骨が検出された。人骨は屈葬で中世の土坑墓と想定される。遺跡の北に位置する法泉寺に關係する墓地の一つの可能性がある。34 峰本南B遺跡は武田城下町遺跡の中の一つである。36 武田氏館跡は永正16年（1519）に武田信虎によって築かれた方形居館である。国指定史跡。周囲の堀を含め東西約200m、南北約190m、面積は約4.6万m²と推定される。堀と土塁より構成される東国の中世居館で虎口等に甲斐武田氏の城郭の特徴がよく現れた構造になっている。2006年の発掘調査においては大手にある石塁下部から三日月形の堀跡が確認された。正確な年代は不明である。45 山梨大学遺跡は武田城下町遺跡の中でも南北基軸街路の一つである鍛冶小路に面している。48 新紺屋小学校遺跡は三重の堀により囲まれた甲府城下町遺跡のうち二の堀と三の堀の間に立地する。また、この地は中世に展開した武田城下町の南端付近に立地すると考えられる。平成14年の調査の結果、柱穴28基、溝跡14条等が検出された。遺物は中世から近世にかけての土器や陶磁器である。68 秋山氏館跡からは墓坑23基、茶毘状遺構2基、区画溝、井戸跡、建物跡が検出されている。15世紀には墓域であったが、その後近世の屋敷地へ変化したと思われる。84 家之前遺跡からは、平成15年の調査で15世紀後半の遺物が出土している。

近世

60 寿町遺跡は江戸時代には甲州街道が区域内を東西に貫通しており、街道沿いは飯田新町などの町屋が存在していた。昭和62年の試掘調査では江戸期以降の敷石と遺物が出土している。

第3節 甲府城下町の変遷

前節で記述したように甲府盆地およびその周辺の丘陵には縄文時代から連綿と人々が生活する痕跡が刻まれてきた。そうした流れの中で、武田城下町は永正16（1519）年に武田信虎が甲府市東部の川田館から相川扇状地頂部へ館を移した事から始まる。この館が戦国期の武田氏の本拠となった武田氏館跡（現武田神社）である。半島状に突出した躑躅ヶ崎に接して造営されたことから躑躅ヶ崎館とも呼ばれた。この館を中心に南側の緩やかな扇状地に形成されたのが武田城下町である。武田城下町は守護館を中心に家臣を移住させ、職種ごとに集住し町が形成された。

天正10（1582）年の武田氏滅亡後、甲斐は織田家家臣川（河）尻秀隆が領有した。さらに本能寺の変の後、天正壬午の乱を経た後から天正18（1590）年まで徳川家康が支配した。甲府城の築城を最初に計画したのは家康で天正17（1589）年に重臣であった平岩親吉に対し甲斐・信濃の地侍に命じて一条小山の地固めの普請の実施を通達、石垣積職人を近く派遣すると述べた書状を発給した。家康が小田原の役後、関東へ移封されると甲斐は豊臣領となり羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子など豊臣家重臣による支配地となった。織豊系城郭の特徴である野面積石垣や発掘調査で朱や金箔を施した豊臣家の家紋（五七の桐）の瓦の出土はその証となっている。なお、甲府城築城年代に関する文禄・慶長年間の史料は極端に少ないが、浅野長政・幸長父子の在城期に基本構造が整ったとする説が有力である。

各曲輪から浅野家の家紋（丸に違い鷹の羽）の瓦が出土している。

慶長5（1600）年関ヶ原の戦いの後、甲斐は再び徳川方の領有となり城代に平岩親吉が再任され、浅野父子は和歌山に転封した。城代平岩親吉は浅野父子から引き継ぎ甲府城を完成させた。城下町についても慶長検地などからこの段階に完成していたと推定される。江戸幕府開府後、甲府城は家康の五男徳川義直をはじめとする徳川家直系が城主となる位置付けになったがどの城主も在城せず城代や武田氏の旧臣である武川十二騎等が城番として置かれた。

元和2（1616）年 徳川忠長（2代将軍秀忠の次男）が甲府城主となるが在城しなかった。

寛永9（1632）年 第2次甲府城番制が始まる。

寛文元（1661）年 徳川綱重が城主となる。

延宝6（1678）年 徳川綱豊が城主となる。

宝永元（1704）年 柳沢吉保が甲府藩主となる。この間に甲府城の大規模な改修、城下町の再整備が実施された。

宝永6（1709）年 将軍綱吉の死去に伴い吉保が隠居し、長男吉里が甲府藩主となった。

甲斐在国に伴って移ってきた家臣団とその家族は3230人を超える規模となり、柳沢氏による再整備は武家地の内郭だけに留まらず町人地であった外郭にも拡張された。武家地拡張とともに町人地も三の堀内側に移設されており、甲府城下町の新たな町割りが進められた。その後、柳沢氏の大和郡山移封後から幕末に到るまでの約140年間は幕府直轄領として勤番支配のもとに管理された。享保年間には建物の老朽化に加え、本丸御殿などを焼く大火があり度々の修復の申請があったものの大規模な修復は行われなかった。

享保9（1724）年 柳沢吉里が大和国郡山へ転封され甲府勤番制が新設された。

慶応2（1866）年 勤番を廃して甲府城代が設置された。

明治元（慶応4）（1868）年3月に板垣退助率いる官軍が入城して開城、6月に城代を廃止して「甲斐鎮撫府」が置かれた。「甲斐府」「甲府県」と名称を変更した。甲府勤番士の屋敷が撤去される。明治9年頃までには払下げられ畑地化された。甲府停車場の一部として造成されるまで調査地点は民有地として利用された。

明治4（1871）年 廃藩置県により「山梨県」、甲府城は維新政府によって兵部省、続いて陸軍省の管轄となった。

明治7（1874）年 大政官布告によって甲府城は廃城。前年に山梨県令に着任した藤村紫朗の施策によって内城以外の取り壊しと二の堀・三の堀のほとんどが埋め立て払下げられた。廃城後の内城では、楽屋曲輪の御殿内では養蚕の実施、空き地では製糸工場建設のための煉瓦製造が行われた。

明治9（1876）年 勸業試験場として城内全域で葡萄などを栽培しワインの醸造が実施された。御先手小路・馬場先小路が「水門町」と改称された。

明治29（1896）年 清水曲輪が鉄道院に割譲された。

明治33（1900）年 楽屋曲輪に甲府中学校に新築移転される。

明治36（1903）年 甲府停車場の開業によって清水曲輪と花畑は消失した。調査地点は甲府停車場の一部に組み込まれ、汽車の引き込み線路が設置された。その後調査地周辺では、運輸会社や石炭会社など汽車に関わる商店等が軒を連ねた。

昭和59（1984）年 駅舎改築および駅ビル開業に伴い駐車場として整備された。



第4図 周辺の甲府城下町遺跡調査地点

第4節 周辺における発掘調査

甲府城および甲府城下町の本格的な調査は昭和 42（1967）年に実施した甲府城総合学術調査に始まり、平成 2（1990）年には県土木部が舞鶴城公園整備事業に着手した。それに伴い県教育委員会では甲府城の発掘調査を開始した。表 2 に周辺の調査地点をまとめた。本文中には、甲府市・県教育委員会による主な調査結果を記述した。

2. 甲府城下町遺跡（北口一丁目 1-4）

平成 17 年に調査が行われ、1 号溝跡から瀬戸美濃大窯の灰釉皿や青花皿が出土した。16 世紀後半以降と考えられ、中世城下町の範囲を知る上での手掛りとなった。

3. 甲府城下町遺跡（北口一丁目 50-1 他）

平成 16 年 11 月に調査が行われた。『楽只堂年録』では一帯が「侍屋敷」にあたる。検出された溝跡及び土坑から近世か近代の遺物が出土している。土坑は攪乱の可能性が高い。

5. 甲府城下町（宝一丁目 102）

「相川町御門」の西側に近接する二の堀と土塁が存在していた場所である。現在も二の堀の痕跡をとどめている。調査の結果、二の堀北側斜面の立ち上がり部分の確認が行われ、深さが 3m 以上有る事が確認された。また石垣等の石材も確認されておらず素掘りであったことが確認された。また地山層は礫層であることから、旧河川を利用して二の堀が造られたことが推察される。

表 2 周辺の甲府城下町遺跡調査地点

番号	遺跡名	調査主体
1	甲府城下町遺跡（朝日二丁目 214）	山梨県教育委員会
2	甲府城下町遺跡（北口一丁目 1-4）	甲府市
3	甲府城下町遺跡（北口一丁目 50-1 他）	甲府市
4	甲府城下町遺跡（B区）	甲府市
5	甲府城下町遺跡（宝一丁目 102）	甲府市
6	甲府城下町遺跡（宝一丁目 106-1）	甲府市
7	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 2-1 他）	甲府市
8	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 2-3 他）	山梨県教育委員会
9	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 8-8）	山梨県教育委員会
10	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目（裏先手小路跡））	山梨県教育委員会
11	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 1-3）	山梨県教育委員会
12	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 138）	甲府市
13	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 1）	甲府市
14	甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 12-3）	甲府市
15	甲府城下町遺跡（43 街区労働局）	山梨県教育委員会
16	甲府城下町（丸の内一丁目 12-1）	甲府市
17	甲府城下町（丸の内二丁目 109）	甲府市
18	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 108-2）	甲府市
19	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 31-1 他）	甲府市
20	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 31-9）	甲府市
21	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 3）	山梨県教育委員会
22	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 252-1）	甲府市
23	甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 261）	甲府市

6. 甲府城下町（宝一丁目 106-1）

外郭部に位置し、二の堀に接する。試掘の結果井戸跡が検出されたが近代以降と考えられる。

7. 甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 2-1 他）

二の堀に囲まれた区画で、新先手小路から裏先手小路に位置する。遺構は井戸跡や東西方向の大溝、大溝に直交する溝跡などが検出された。遺物は陶磁器や銭貨が出土している。江戸時代から明治時代頃と思われる。

13. 甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 1）

平成 17 年に調査が行われた。御先手小路に位置する。溝跡 5 条、井戸跡 2 基が検出された。井戸跡の内 1 基は最下部に丸太が井桁に組まれていた。遺物は井戸跡から土器・土製品・陶磁器・金属製品・木製品等が出土している。18 世紀以降と思われる。

15. 甲府城下町遺跡（43 街区地点）

長延寺の存在に留意して進められた。寺院の存在を示すまでに到らなかった、16 世紀代の井戸跡、区画溝、同時代の所産である灰釉皿が出土した土坑、北宋銭を伴う墓壙などが検出された。

16. 甲府城下町遺跡（丸の内一丁目 12-1）

2 条の溝が検出された。いずれも鉄道建設により埋め立てられたもので地境の溝と思われる。遺物は近世から明治期の陶磁器が出土している。

17. 甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 109）

鋳型や鋳物片が廃棄された土坑が検出された。隣接する新青沼町には鋳物師町があったと『裏見寒話』（宝暦 2（1752）年）に記載されている。

18. 甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 108-2）

従来の土地区画を示唆する溝跡及び井戸跡等が確認された。溝状遺構は、2 本の丸太の上に割石を配置したもので、調査区南側の土地区画の延長線に一致するものであるため近代以降の溝跡と思われる。井戸跡は方形のプランで廃棄された状況である。井戸覆土中から陶磁器、煙管・鉄丸釘が出土している。

20. 甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 31-9）

柳門の西側約 60m に位置する。『楽只堂年録』に描かれた絵図によると「土蔵」付近にあたり、『懷宝甲府絵図』では武家屋敷となっており「高木」と記される。調査の結果、礎石の根固め石に並行して雨落ち溝らしき溝跡が検出された。拡張した結果、溝跡 8 条、性格不明な方形の土坑 1 基、礎石の根固め石 4 基が検出された。溝の縁に用いられている石と石の間に白色の粘土を充填しながら形成する技法は、甲府城屋形曲輪で検出されたものと共通している。

21. 甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 3）

16 世紀代の遺構が検出された。中世段階の武田城下町が極めて広範囲に及んでいた証となっている。その他、17 世紀代の早い段階に設置された馬場の痕跡、明治期の監獄署に係る施設の一部として甲府上水に関する遺構が検出された。

23. 甲府城下町遺跡（丸の内二丁目 261）

柳御門の西側に位置し、18 世紀前半の柳沢期には「御作事小屋」、勤番支配の時代には「御米蔵」が古絵図からわかる。遺構は検出されなかったが焼塩壺など近世の遺物が出土した。

第 5 節 土地利用変遷

調査地点は中世においては武田城下町の南縁部、近世においては甲府城下町にあたる。武田城下町時代は、絵図等が残されていないためどのように利用されていたかは断定できない。甲府城下町に至って

ある程度の土地利用の変遷が絵図・古文書等によって確認する事ができる。

甲府城の構造は、一の堀に囲まれた内城を中心に、その北・西・南側に取り巻くように諸役所・倉庫・武家屋敷地などが置かれた内郭、武家屋敷・町人地などからなる外郭が形成され三の堀外側の町人地・寺社地にあたる郭外へと同心円的な広がりをみせていた。内城には、南側に追手御門、西側に柳御門、北側に山手御門が設置されて内郭に通じていた。

第5図から第9図で示した土地利用図は、調査地点を中心に該当する絵図（区画・人名）のトレースを行った。丸の内2丁目・1丁目地点共に内郭（二の堀内側）の武家屋敷地と推定される地域に立地している。

丸の内2丁目-145-2 地点

新先手小路と馬場先小路の交差する地点で武家屋敷地として利用されていたと思われる。調査地点のあったブロックは、第6図④『甲州吉里領地時』では4区画、第6図⑤『元文三年(1738) 甲府城下町絵図』では、不明瞭なため断定は出来ないが2区画に、第7図⑥『甲府郭内曲輪外邸第図』（文政元(1818)～天保元(1830)）では3区画として利用されている。絵図からは人名を読み取る事ができない。第7図⑦『懷宝甲府絵図』（嘉永二年(1849)）1では3区画内、「ヒキタ・山下」の西側の区画が該当すると思われる。第8図⑧『懷宝甲府絵図』（嘉永二年(1849)）3版では「シマタ・ヒキタ・ヨシサト」の人名があり「シマタ」が調査地か。第8図⑨『嘉永二年頃』（1849-）では「マツナミ・ヒキタ・山下」の人名があり「マツナミ」が調査地か。

丸の内1丁目地点

調査地点は柳門の西側、先手小路と馬場先小路の交差する東側の区画に該当する。

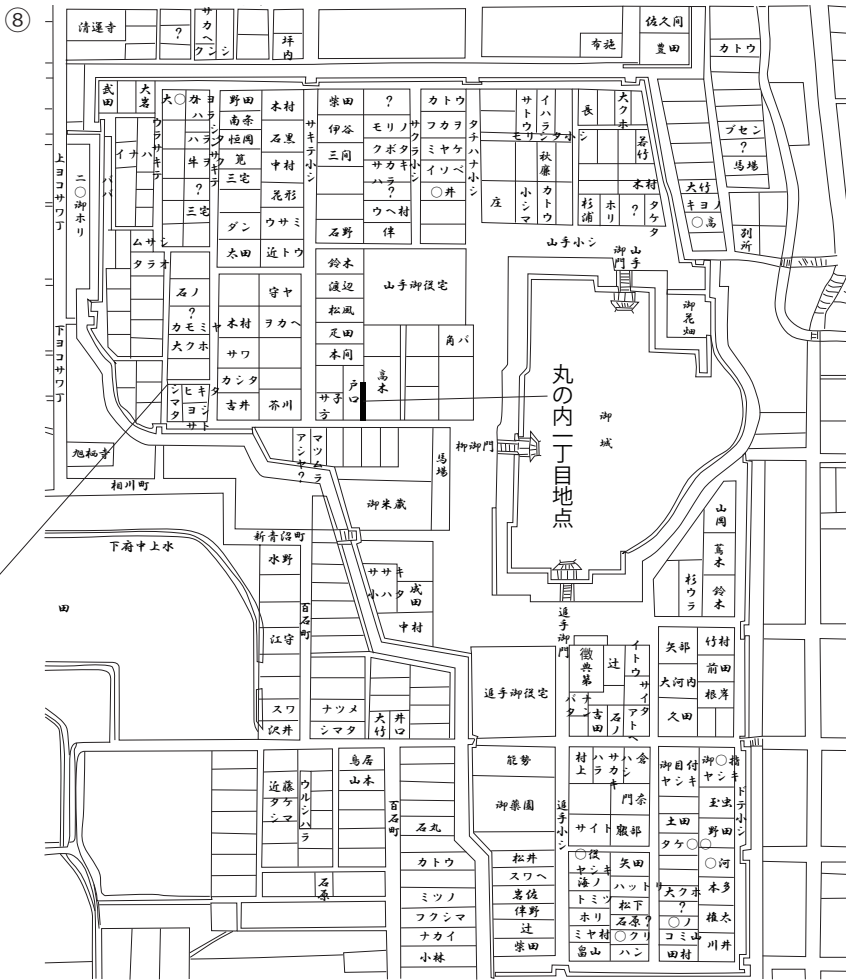
第5図②『楽只堂年録 173 巻』（宝永元(1704)～宝永6(1709)年）（以下『楽只堂年録』）によると調査地点付近で「柳澤権太夫」の名前が確認できるが、『裏見寒話』「長遠寺 柳澤権太夫の舊邸の邊也」と云。『甲斐国志』「…今ノ郭内柳沢権太夫居地ノ辺ニ在リシトモ云」（註「長遠寺」の「遠」は原文ママ）等の記事からすると、それ以前、調査地点には蛇伏山長延寺があった事が分かる。

第5図①『甲府城内屋敷図』（元禄2(1689)～宝永元(1704)年）では城代屋敷（＝御城代 岡野伊豆守御屋敷）の記載が見える。調査地点はその屋敷内の西側にあたと推測される。したがってここまでの変遷としては、長延寺→御城代屋敷→柳澤権太夫という変遷が推測される。

第5図③『柳澤時代ノ甲府ノ郭内郭外図』（宝永7(1710)～享保9(1724)年）の「藪田阿波」は『柳澤家秘蔵実記』寶永六年の「…一御棺、同十五日夜、上野御本坊へ…、夜八ツ時過…、此時重立候御供、藪田阿波、…」に登場する。第6図④『甲州吉里領地時』（宝永7(1710)～享保9(1724)年）に見える「柳澤市正」は正徳2(1712)年に「藪田五郎右衛門」が柳澤姓を受けて改名しており絵図はそれ以降か。しかし宝永6年には江戸へ戻っている。絵図の描かれた時期は③→④か。第5図③第6図④の時期には「柳澤権太夫」の敷地および周辺は区画割りの変動はあるものの柳澤家石高200～300石級家臣の屋敷地2筆として区画され調査地点東側は家老柳澤権太夫の広大な屋敷地となっていた。

享保9(1724)年、甲府勤番支配制の開始によって江戸から家族らを伴い甲府へ赴任した甲府勤番士の屋敷地としての土地利用が始まった。調査地点を見てみると、第7図⑥『甲府郭内外邸第図』（文政元(1818)～天保元(1830)）では「四千五百二十五坪 四十一番」とあり具体的な人名は見当たらず、その状態は嘉永二(1849)年の絵図まで続く。

調査地点付近にあったと思われる屋敷の住人柳澤権太夫保格は、慶安元(1648)年に生まれ享保5(1720)年に没している。菩提寺は甲府市下積翠寺町にある「興因寺」である。保格の業績は、柳澤吉保が城主を務めていた時の筆頭家老として、特に甲府城の大改修の時の奉行としての活躍が知られる。



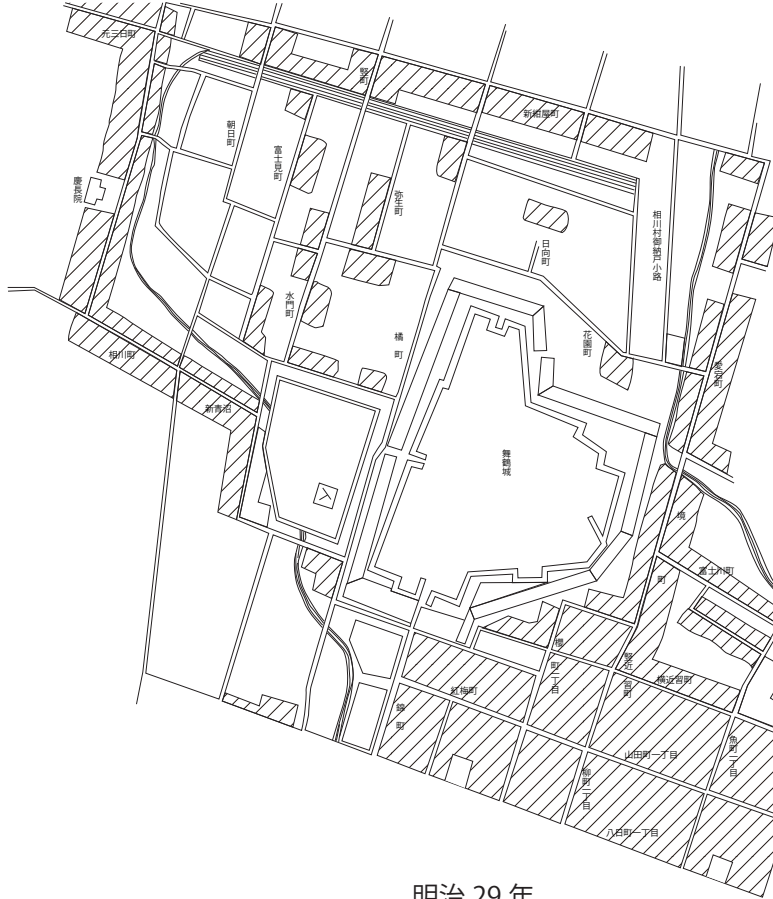
丸の内二丁目地点
 懷宝甲府絵図 (嘉永二年 (1849))- 3 版



嘉永二年頃 (1849)-

第8図 土地利用変遷図 (4)

⑩



明治 29 年

⑪



明治 42 年

第 9 図 土地利用変遷図 (5)



第 10 図 調査区位置図

保格の屋敷地やその周辺地に関しては、『裏見寒話』の記事を紹介する。

『裏見寒話』（『甲斐史料集成2』所収）

・「甲州の長臣柳澤權太夫・同市正・酒井志摩・川口石見・鈴木主水・松平多治見・柳澤帶刀・同矢柄・平岡將監等の屋敷櫛比せり。

就中權太夫の舊邸は外圍堀裏楓樹の植込、萬石以上の大名屋敷とも見ゆ。翌乙巳の夏より郭内外の屋敷、大小共に御取崩となる。役所は古の評定所にて造構成しが、未冬の火災にて悉く灰燼となる。」

・右御本丸屋形清水共に享保十二（1727）丁未十二月九日消失、火元郭内裏先手小路有馬出羽守支配大久保内蔵之介但裏先手小路は東〇也。

先手小路・櫻小路町内半分橋小路、有馬出羽守御城中山手御門前・馬場先小路・中の小路・土手際小路・見付四ヶ所

八日町見付・山田町見付・三日町見付・連雀町見付勤番六拾四人類焼翌申春引越、間もなく火災に付拜借金五百石より三百石迄三十兩、貳百石へ二十兩

八日町・工町・近習町・柳町・緑町・魚町・鍛冶町・桶屋町・東青沼・長遠寺町・深町組屋敷同心・横蔵田・蔵田村・浅間明神社・瑞泉寺・尊徳寺・教安寺・心月院・教學院・其外小寺四五ヶ寺類焼、府下未曾有の回祿と云。

・化龍山光澤寺長遠寺住僧の時は寺領貳千石。蓋信玄より傳來の領歟。舊地は今の郭内柳門前にあり。蛇福山長遠寺と云。

甲府城下町遺跡丸の内2丁目 145-2 地点

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

調査区は JR 甲府駅から西へ約 380m の朝日町ガードの南東に位置する宅地およびレンタカー駐車場の跡地である。

調査は重機によって表土を除去し、引き続いて遺構確認面直上から人力による掘り下げを行って遺構を確認した後、遺構掘削を行った。

グリッドは、調査区全体を覆うように、世界測地系に基づいて南北方向を X 軸、東西方向を Y 軸とする 4m メッシュを設定した。X 軸（北から南）方向に A・B・C・・・のアルファベットを、Y 軸（西から東）方向に 1・2・3・・・の算用数字を付した。グリッドの名称は両軸の交点を基準とし、各グリッドの北西隅をもって呼称した。

遺物の記録・取上げは、グリッドとトータルステーションによる測量を適宜選択して行った。遺構図はトータルステーションによって測量して作図し、遺構微細図はトータルステーションで測量したポイントを基準に手実測で行った。

記録写真は小型一眼レフカメラによる 35mm カラーネガとデジタルカメラを使用し、ラジコンヘリによる空中写真撮影には中判カメラ (6 × 4.5 カラーリバーサル) とデジタルカメラを使用した。

第2節 基本層序 (第 11 図)

遺構検出面の標高は 271.4 m～ 271.7m を測り、南に向かってゆるやかに傾斜する地形である。

I 層：宅地盛土

II 層（整地層）：オリーブ褐色粘土質シルト（礫混じる）

III 層（中世～近代遺物包含層）：暗オリーブ褐色砂質シルト

IV 層（中世～近代遺物包含層）：黒褐色粘土質シルト

V 層（地山）：黄褐色粘土質シルト（黒色粘土と礫混じる）とし、V 層上面で遺構を検出した。

第4章 遺構と遺物

第1節 検出状況（第12図）

検出した遺構は、溝（SD）5条、小土坑・土坑（SK）38基、石列（SX）3である。出土遺物には北宋銭とみられる銅銭や中世の陶磁器も散見されるが、量は多くない。近世後半以降の武家屋敷地の時期を主体としていると考えられる。中には馬の骨や鳥の餌入れなど、当時の人々と動物の関わりを考える上で、興味深い遺物も出土している。

第2節 溝状遺構（SD）（第13・14図）

①1号溝状遺構（第13図）

調査区内で残存している長さは14.3m、幅0.6～0.8m、深さは0.16mを測る。主軸の方位はN-19°-Eを指している。SD2に切られている。覆土中から銭（北宋銭）が出土している。南北方向に延びていると思われる。

②2号溝状遺構（第13図）

SD1の東側に位置しておりSD2を切っている。残存している長さは14.3m、幅0.8～1.0m、深さは0.26mを測る。主軸の方位はN-20°-Eを指している。南北方向に延びていると思われる。

③3号溝状遺構（第14図）

調査区のほぼ中央付近で検出された。中央付近で北西方向に向きを変える。残存している長さは14.7m、幅0.3～0.8m、深さは0.20mを測る。主軸の方位は南からN-20°-E方向に進み、調査区中央付近でN-2.5°-Eに向きを変える。南北方向に延びていると思われる。

④4号溝状遺構（第14図）

SD3の東側で検出された。溝の北側はSK10に切られている。関連する遺構と考えられる。残存している長さは3.6m、幅0.5～0.7m、深さは0.16mを測る。主軸の方位は南からN-21°-E方向に進み、調査区南端から1.6m付近でN-33°-Eに向きを変えSK10に合流する。

⑤5号溝状遺構（第13図）

調査区のほぼ中央の南側で検出された。南側から3m地点で北西に向きを変える。溝の西側はSD1に切られている。残存している長さは4.4m、幅0.9～1.5m、深さは0.16mを測る。主軸の方位は南からN-14°-E方向に進み、調査区南端から3m付近でN-66°-Wに向きを変えSD2にぶつかる。SX1が溝にそって検出されており付帯施設の可能性がある。

第3節 土坑（SK）（第17～22図）

37基検出された。溝やSX（石列）に関連するような土坑もあり、また建物を構成する柱穴の可能性もあるため、土坑間の主軸の方位や距離等によりさらに検討を加えた。なお個別の法量は計測表にまとめた。

①SK10（第18図）

SD4の北端で検出された。SD4はSK10と合流しておりSD4の関連施設の可能性がある。桶の底板と側板の痕跡の一部を確認した埋桶である。遺物は銅銭や焼継ぎして把手を補修した急須も出土している。

②SK35（第22図）

SK35は調査区東端部分で検出した大形土坑である。掘形が深く、板材を検出したことなどから調査区を一部拡張して調査した。断面形は逆台形に成形されており、さらに東へ延びていることから溝の可能性もある。

③ SK12 (第 14 図)

SK12 は底から根固め石が検出された事から柱穴の可能性が考えられるが、建物の構成は不明である。

④ SK24・25・26・27 (第 20 図)

SD2 の南側で溝に沿う形で検出されている。

第4節 石列 (SX) (第 15・16 図)

3基検出された。直角に巡ることから建物の基礎や雨落ち溝などの用途が考えられるが、SD2 で切られて終わることから暗渠などの可能性も考えられる。

① SX1 (第 15 図)

SD5 に沿うように検出された。検出された長さは 3.76m、幅は 0.4 ～ 0.7m を測る。主軸の方位は N-19° -E で南端から 2m の地点で N-54° -W 方向に変わる。溝の底より上に位置している。SD2 に切られている。

② SX2 (第 16 図)

検出された長さは 3.65m、幅は 0.2 ～ 0.5m を測る。主軸の方位は N-20° -E で南端から 4.7m の地点で N-68° -W 方向に変わる。掘り方はなく地山にめり込ませるような状況である。礫中には瓦、石臼片が含まれている。SD2 に切られている。

③ SX3 (第 16 図)

SD2 北端の埋土中から検出された。検出された長さは 3.65m、幅は 0.1 ～ 0.7m を測る。主軸の方位は N-20.5° -E で南端から 2.2m の地点で N-38° -W 方向に変わる。北西方向は調査区外になるため延びているかは確認できない。径 20 ～ 30cm 程の石で構成されている。

第5節 出土した遺物 (第 24 ～ 26 図)

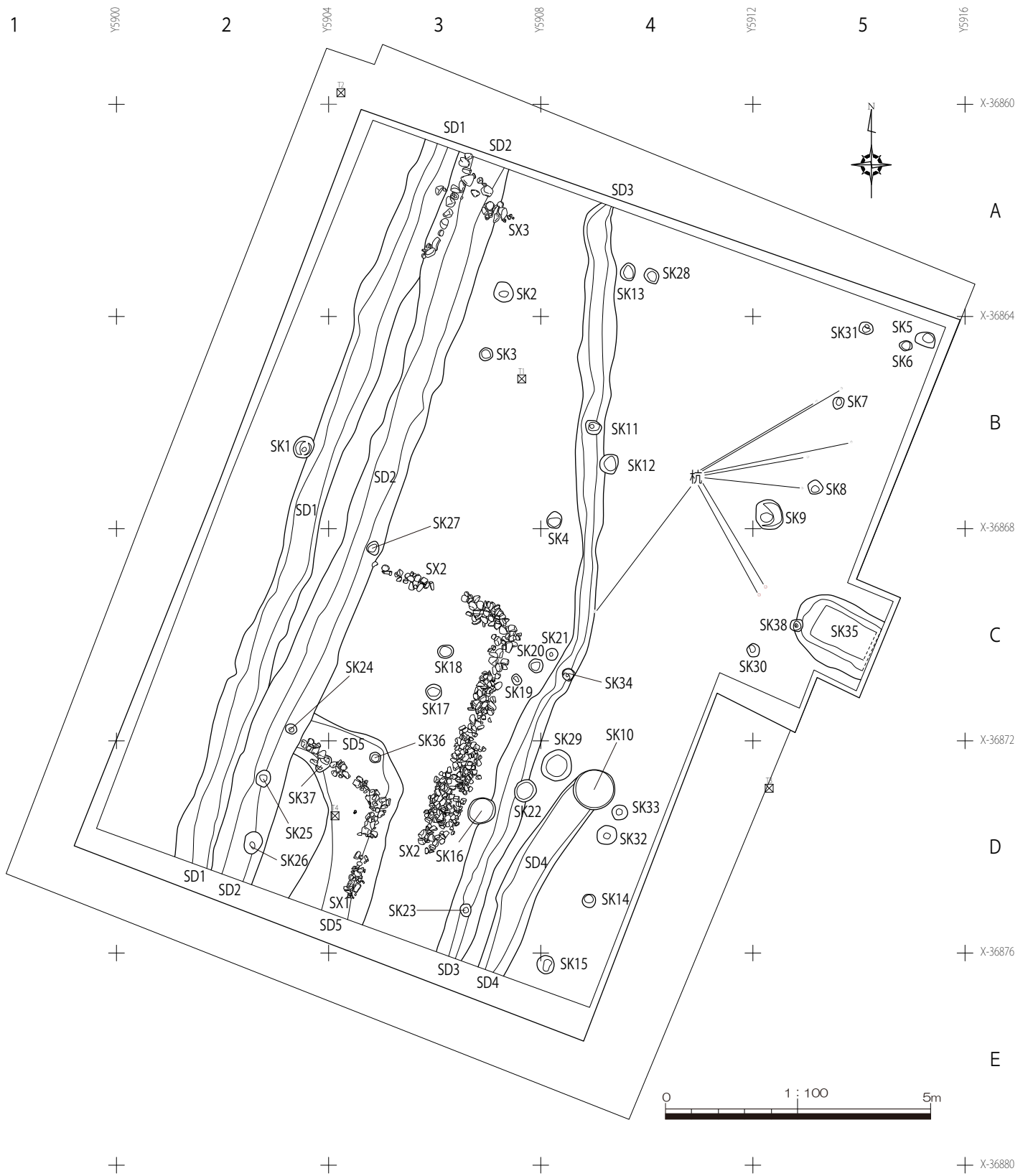
1・2はSD1の覆土から出土した。1はかわらけの口縁部～底部である。外面はロクロ、底部は回転糸切り痕。内面は被熱の痕跡が認められる。2は染付の碗の底部である。外面は透明釉の凹凸。内面見込みは草花。3・4はSD3の覆土から出土した。3は土器の甕の体部である。外面にケズリ調整が施される。内面は摩耗している。胎土に粒径の大きい長石・石英・金雲母を含む。4は磁器碗の底部である。外面は高台脇まで施釉。高台は外周を削って稜を作る。底部の中央に粗いケズリが施されやや盛り上がる。5はSD5から出土した、かわらけの底部～体部である。底部は回転糸切り後底部外周をケズリ。底部接合部をケズリ、体部は横位のナデ。内面はケズリ。6～12はSK10から出土した。6は陶器鉢の口縁部～体部である。外面は緑釉。内面は口縁部付近まで施釉。体部は無釉。7は土器植木鉢の口縁～底部である。外面はナデ、底部連結部、底部ケズリ。底部に穴が有り。内面は体部の口縁部周辺はヘラナデ、下部はケズリ。口縁部から上半の一部が黒色化している。8は染付急須の口縁部～体部下、把手、注口である。把手、注口先端及び内面にも焼継が施されている。9は染付小碗の口縁部～底部 1/3 である。外面の高台脇は一部無釉。底部中央部はケズリ跡をそのまま残す。草木文。見込みは渦巻き状のケズリをそのまま残す。10は磁器碗の口縁部～体部である。11・12は平瓦である。

13・14はSK35から出土した。13は染付碗の体部～底部である。外面は草花・鳥、底部に「大明年製」内面は無文。14は磁器碗の口縁部～体部である。15はかわらけの体部～底部である。底部は回転糸切り後、底部外周に粗いケズリ。体部下はケズリ。内面は粗いケズリ、ナデ。胎土は密で長石、金雲母を含む。16は陶器碗の体部～底部である。外面はロクロ、体部上半は鉄釉、底部はケズリ、内面は全面施釉されている。17～19はSX2から出土した。17・18は丸瓦、19は石臼の破片である。磨面はかな

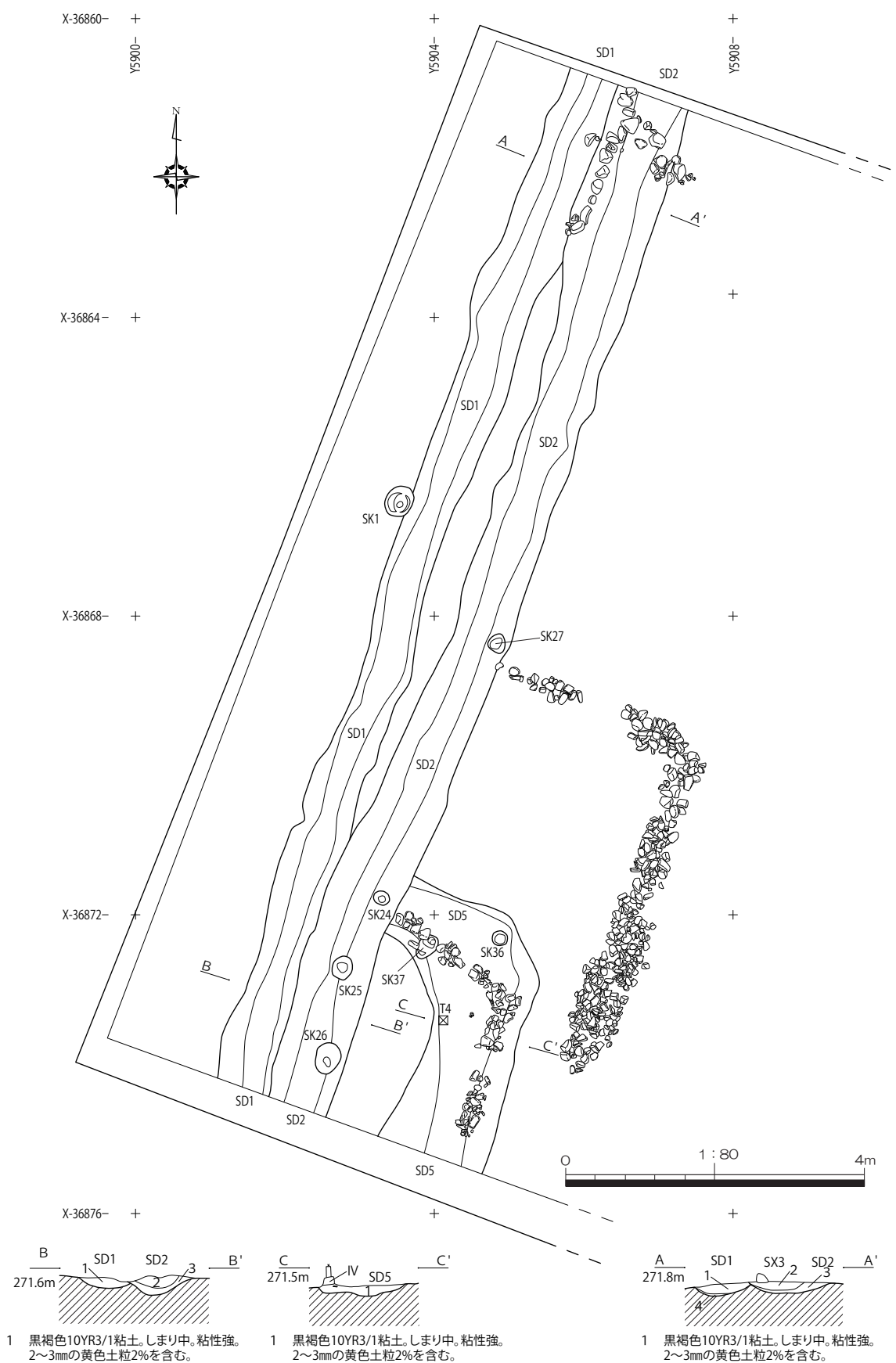
り使いこまれている。20はSX3から出土した。ひで鉢の破片である。

以下の遺物は遺構外から出土している。

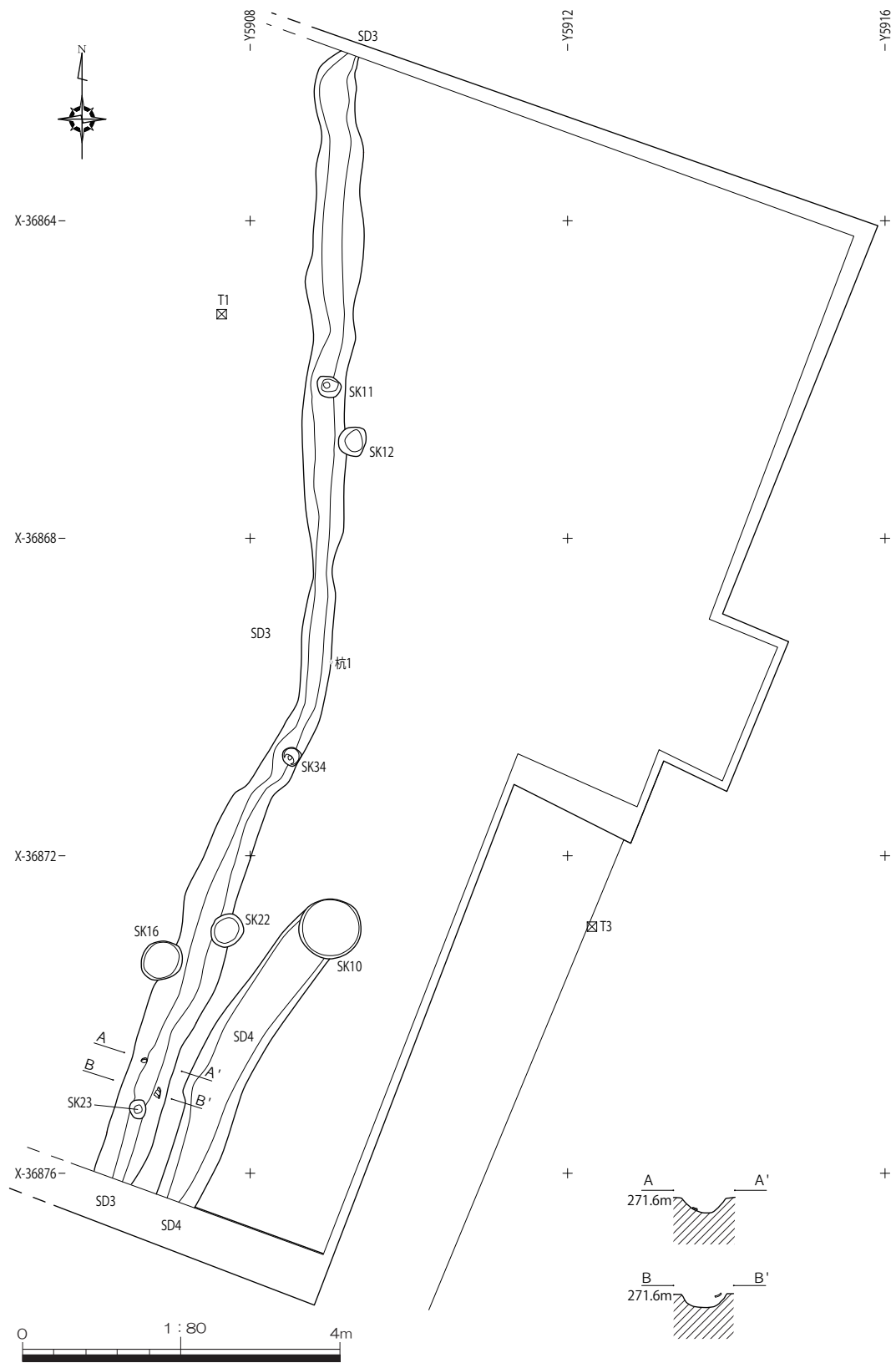
21はかわらけの体部～底部である。胎土は密である。22はかわらけの口縁部～底部である。外面はロクロ、ケズリ、口縁部はナデ。内面はヨコナデ。胎土はやや密で長石・金雲母を含む。23はかわらけの口縁部～体部である。外面はヨコナデ。口縁部と体部の境界は削って段を作る。内面はヨコナデ。胎土は密で金雲母を含む。24は土器甕の口縁部である。外面はヨコナデ。ヘラナデは工具1単位おきに調整が行われているため段が付いている。内面はヨコナデ。25は青磁皿の口縁部～体部である。外形は輪花。内面は施釉。26は磁器小皿の口縁部～底部1/4である。外面はロクロ。緑釉。底部にトチン痕。内面は施釉。27は磁器猪口の体部～底部である。28は染付蓋である。外面は草花文。29は染付鉢の体部下～底部である。外面は蛸唐草文。30は染付碗の口縁部～体部である。器高が低い。渦巻き文と幾何学文の組み合わせ。31は染付碗の口縁部～体部である。外面は矢筈文、内面は透明釉。32は染付碗の口縁部～体部である。外面は草花、内面は口縁部に三重の圏線。33は染付碗の体部である。外面は鳥、内面は網文。34は染付碗の口縁部～体部である。外面は草花、内面は雷文。35は陶器碗の体部～底部、36は陶器壺の口縁～体部である。外・内面共に鉄釉。37は染付碗の体部～底部である。外面の底部に「大明年製」、内面の見込みは建物、トチン跡が残る。38は陶器体部下～底部である。外面はロクロ。体部は外に広がった後ほぼ垂直に立ち上がり施釉される。無釉箇所にはヘラケズリ、ナデ。切り高台。内面は円形の重ね焼き痕。39は陶器壺の口縁部～肩である。外面は肩に把手が付く。ロクロ。口縁端部は無釉。内面はケズリ、ナデ。口縁部に施釉。体部は地。40は陶器餌猪口のほぼ完形である。外面はヘラケズリ、緑の釉薬。41は陶器碗の体部～底部である。外面はロクロ、高台・高台脇は無釉、内面は施釉。肥前系京焼。42は平瓦である。内面には布目痕。43はSK10の木製品の底板である。残存長は左から56cm×15.5cm、67.2cm×13.0cm、66.8cm×14.5cm、41.0×10.5cmである。44から49は銭である。43は「開元通宝」、45は「至元通宝」（元朝1335-1340年）、46は「紹聖元宝」（1094年）、47は「□□通宝」、48は「元祐通宝」（1086年）と読む事が出来る。44は判読不能である。



第 12 図 遺構全体図



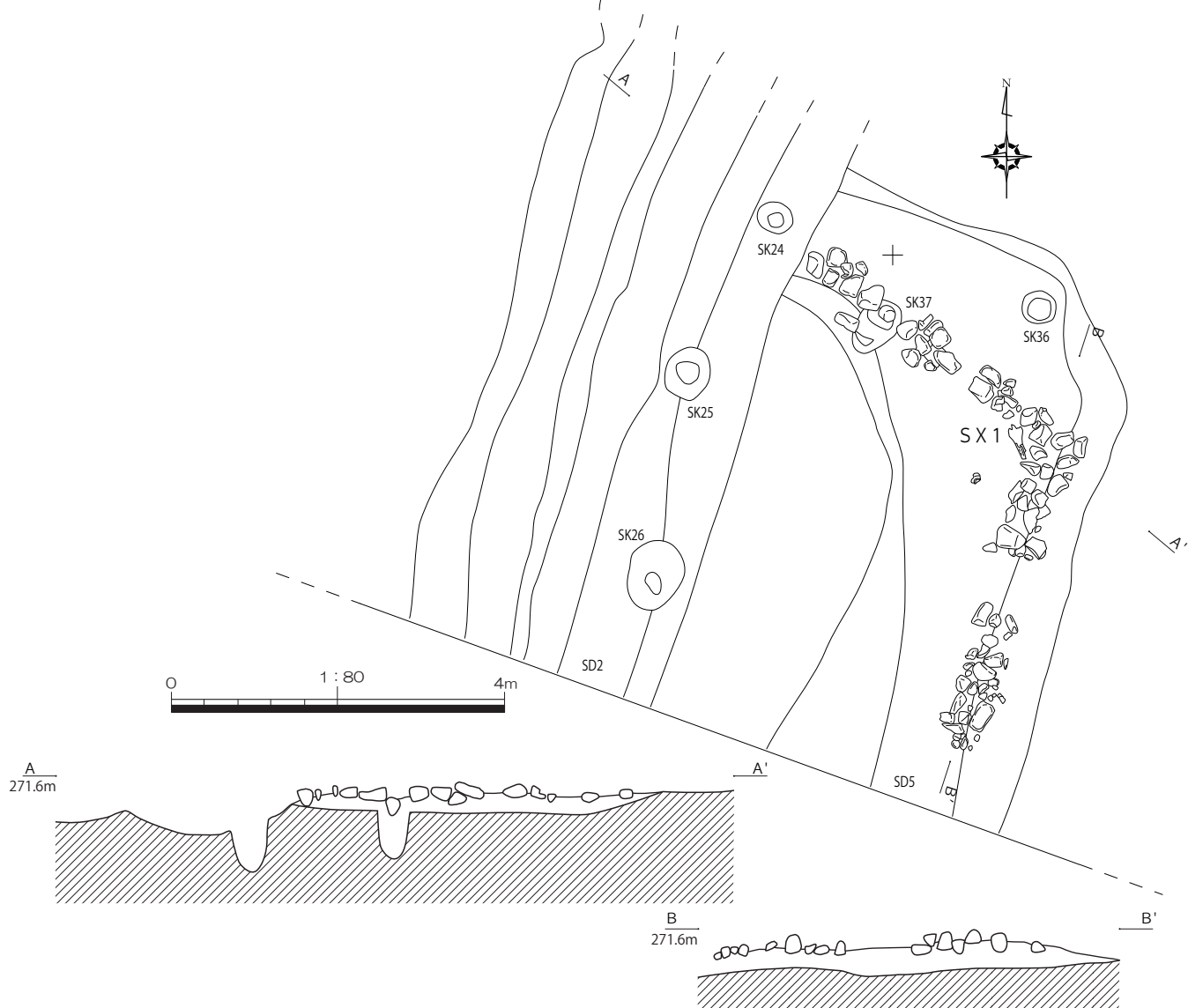
第13図 1・2・5号溝状遺構



第14図 3・4号溝状遺構

表3 溝状遺構計測表

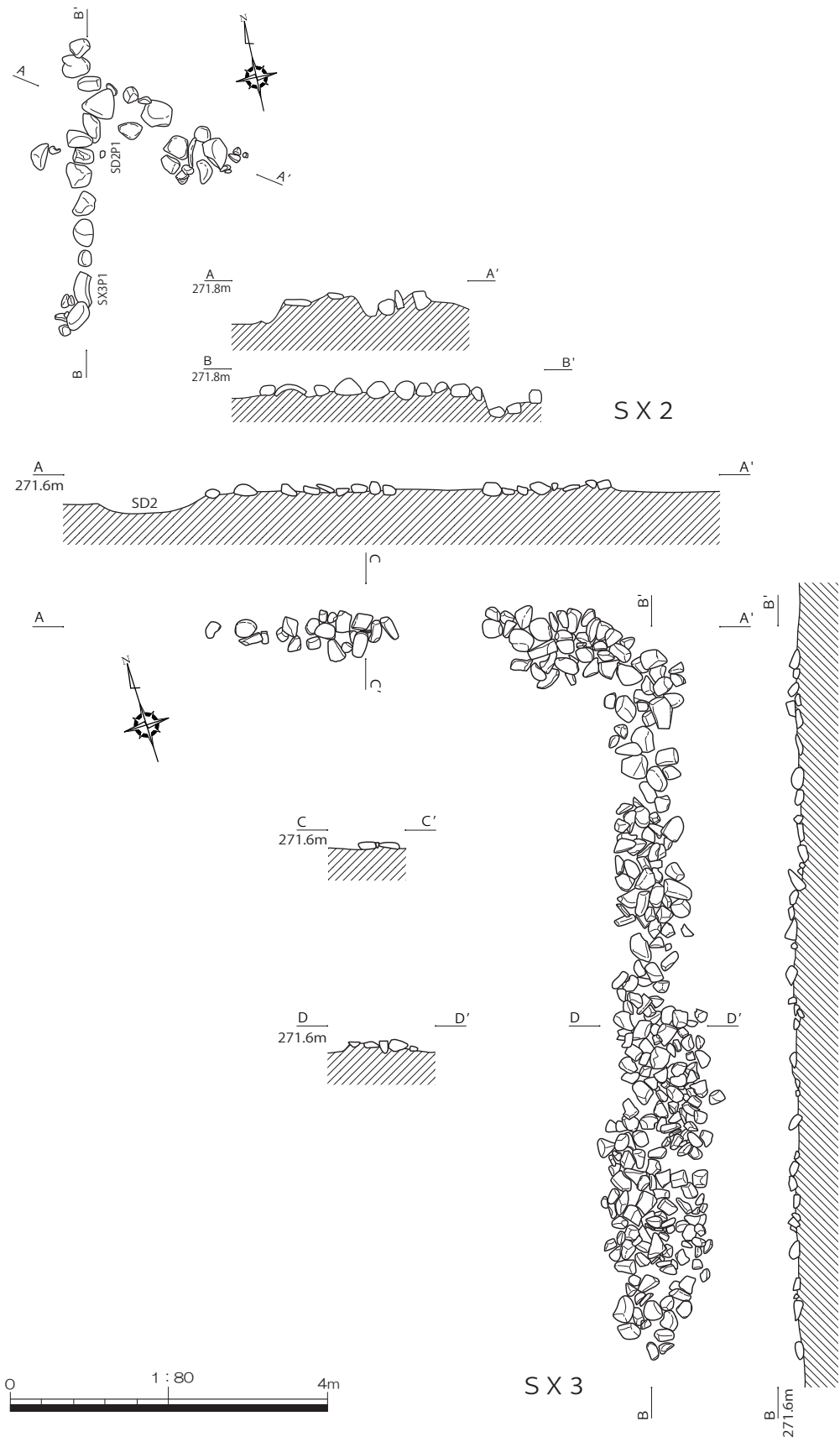
遺構名	規模 m ※ (現存値)			主軸方向	切り合い	備考
	長さ	幅	深さ			
SD1	(14.3)	0.6 ~ 0.8	0.16	N-19° -E	SD2>SD1	
SD2	(14.3)	0.8 ~ 1.0	0.26	N-20° -E	SD2>SD1	
SD3	(14.7)	0.3 ~ 0.8	0.2	N-2.5° -E、N-20° -E		
SD4	(3.6)	0.5 ~ 0.7	0.16	N-21° -E、N-33° -E	SK10>SD4	
SD5	(4.4)	0.9 ~ 1.5	0.16	N-14° -E、N-66° -W	SD1>SD5	



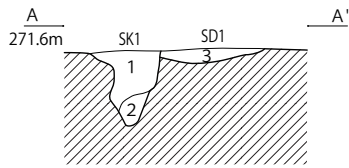
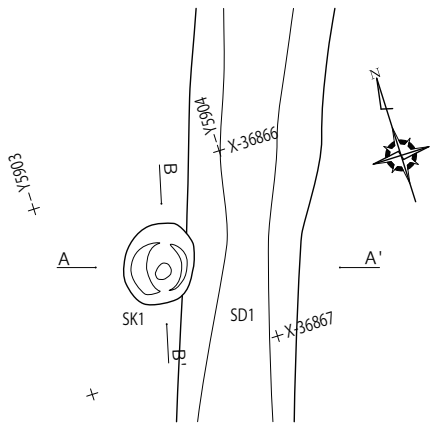
第15図 SX1

表4 SX計測表

遺構名	規模 m ※ (現存値)			主軸方向	切り合い	備考
	長さ	幅	深さ			
SX1	(3.76)	0.4 ~ 0.7	-	N-19° -E、N-54° -W	SX1>SD5	SD5はSX1の付帯遺構の可能性有り
SX2	(7.50)	0.2 ~ 0.7	-	N-20° -E、N-68° -W	SX2>SD2	SD2はSX2の付帯遺構の可能性有り
SX3	(3.65)	0.1 ~ 0.7	-	N-20.5° -E、N-38° -W	SX3>SD2	

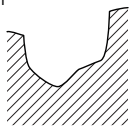


第16图 SX 2 · 3

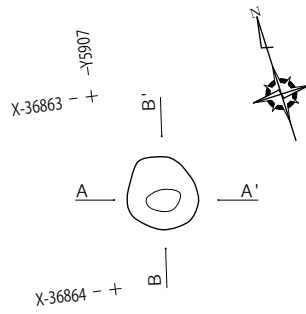


- 1 (SK1)10YR3/2黒褐色砂質シルト。
- 2 (SK1)10YR3/2黒褐色砂質シルトに地山(V層)30%混。
- 3 (SD1)10YR3/1黒褐色粘土質シルト。
- 4 (SD2)

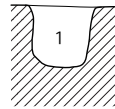
B 271.6m B'



SK1

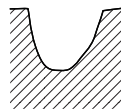


A 271.8m A'

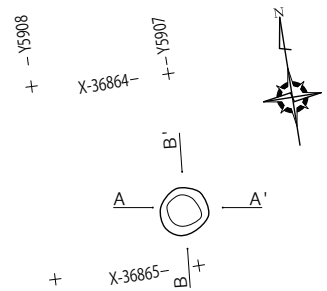


- 1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 271.8m B'



SK2



A 271.8m A'

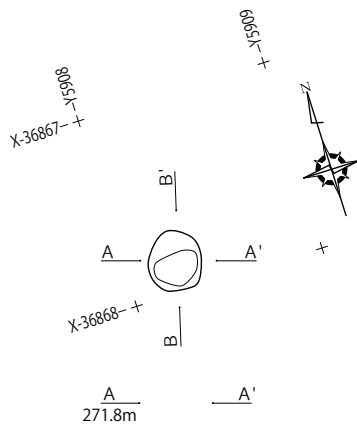


- 1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

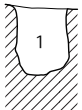
B 271.8m B'



SK3

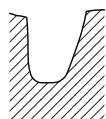


A 271.8m A'

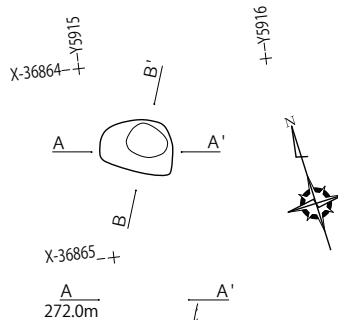


- 1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

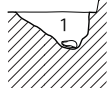
B 271.8m B'



SK4

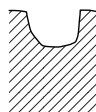


A 272.0m A'

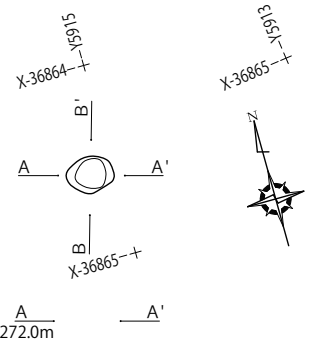


- 1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 272.0m B'



SK5



A 272.0m A'



- 1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

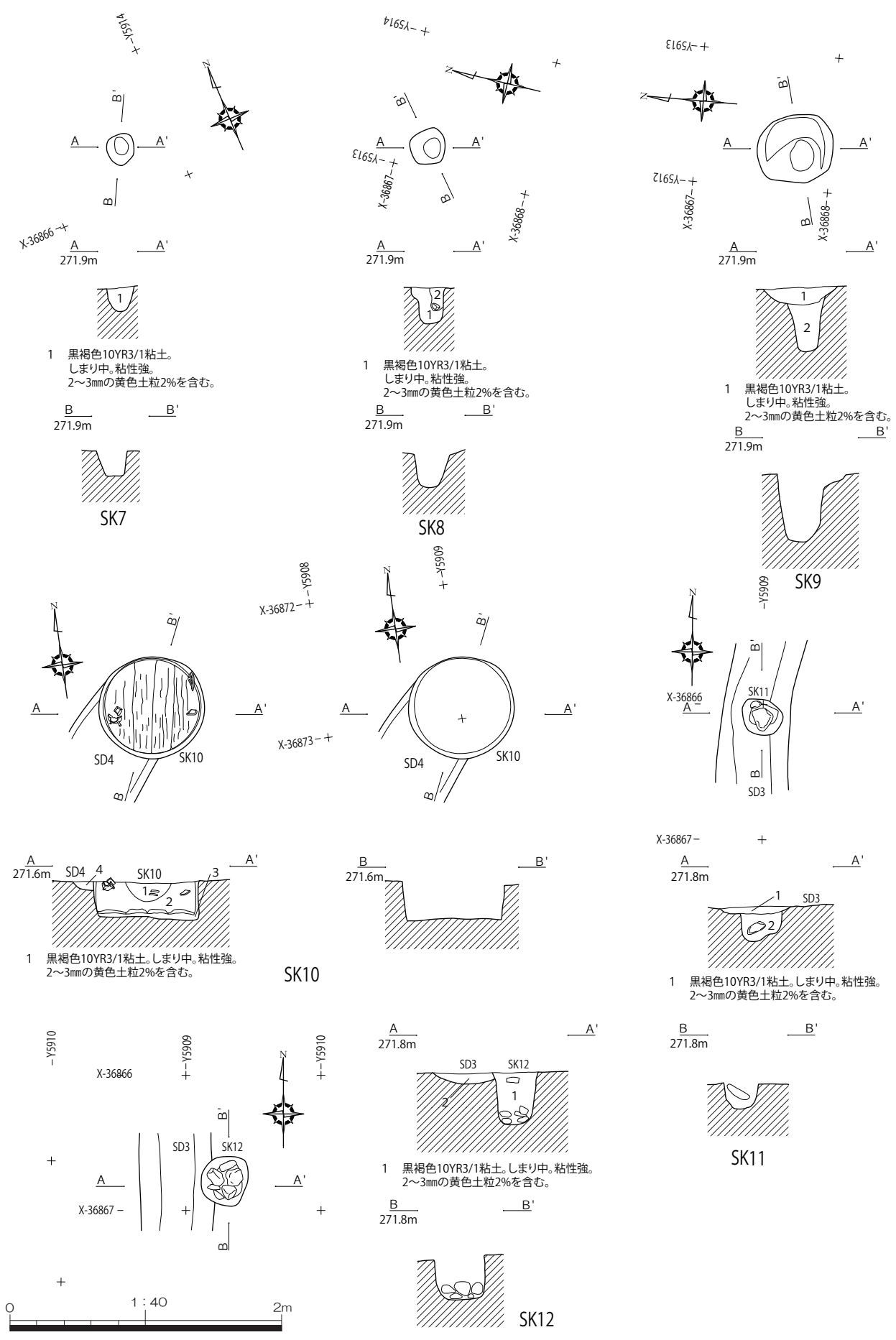
B 272.0m B'



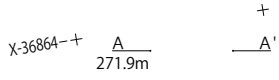
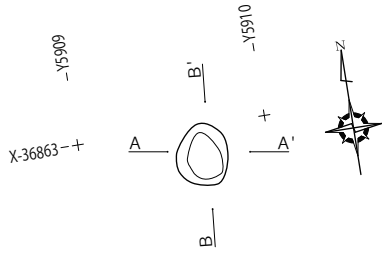
SK6



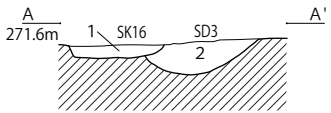
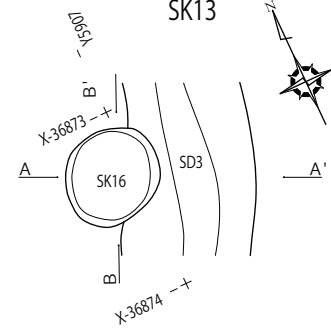
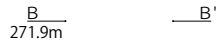
第 17 図 土坑 (1)



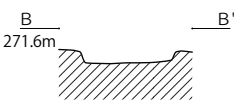
第18図 土坑(2)



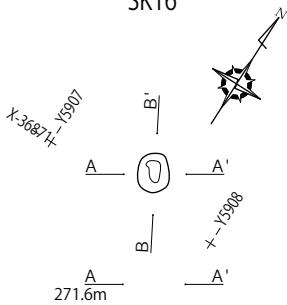
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



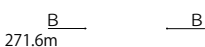
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



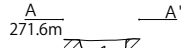
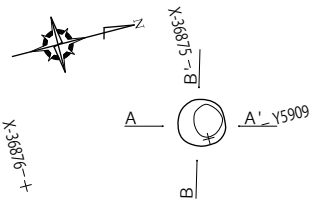
SK16



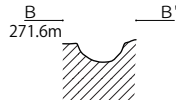
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



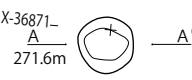
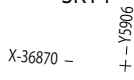
SK19



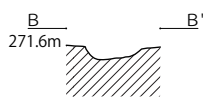
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



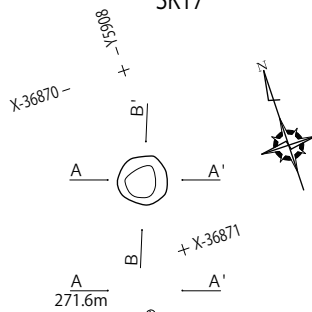
SK14



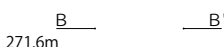
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



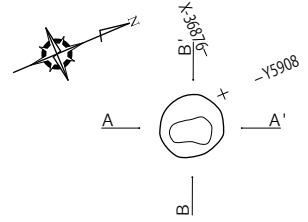
SK17



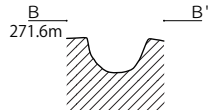
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



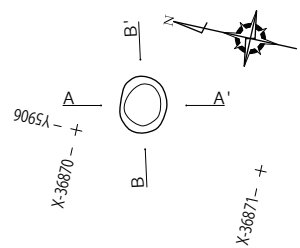
SK20



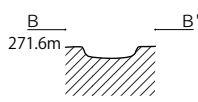
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



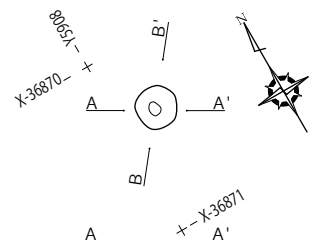
SK15



1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



SK18

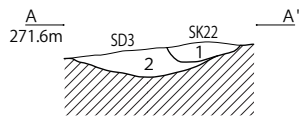
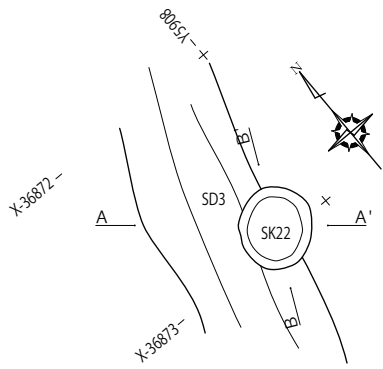


1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。

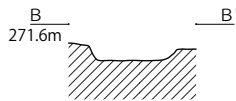


SK21

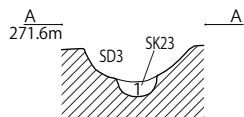
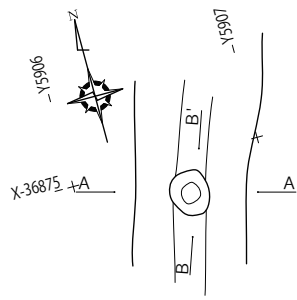
第19図 土坑(3)



1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。



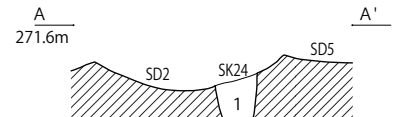
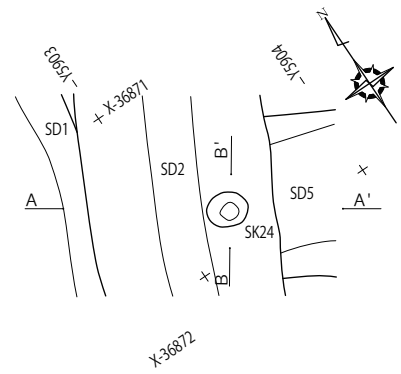
SK22



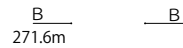
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。



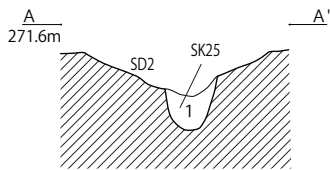
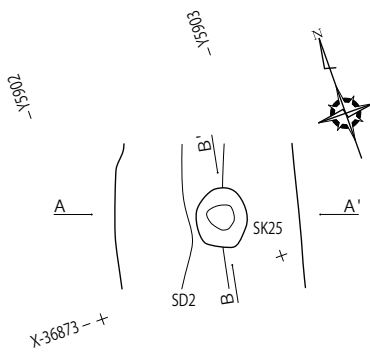
SK23



1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。



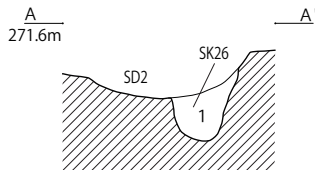
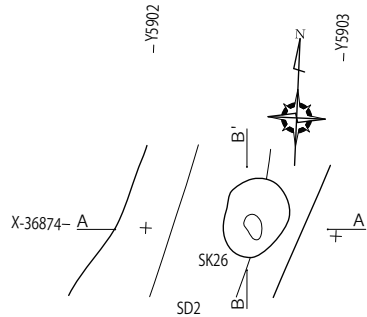
SK24



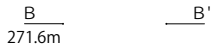
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。



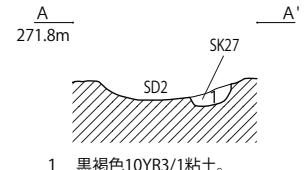
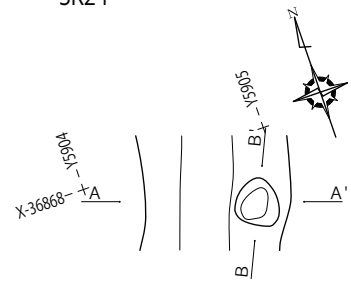
SK25



1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。



SK26



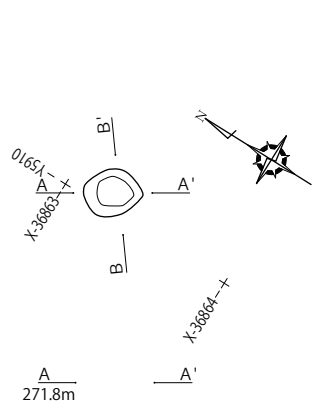
1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。



SK27



第20図 土坑(4)



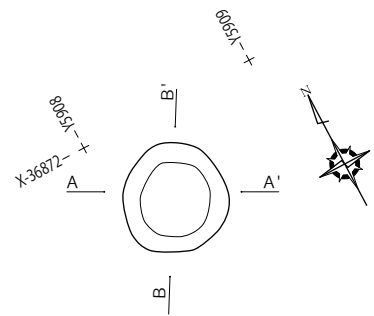
A 271.8m A'

1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 271.8m B'



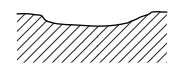
SK28



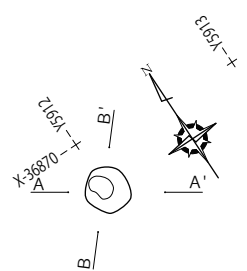
A 271.8m A'

1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 271.8m B'



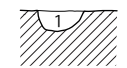
SK29



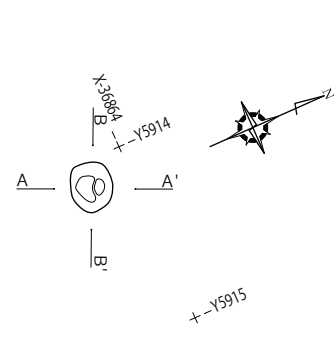
A 271.8m A'

1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 271.8m B'



SK30



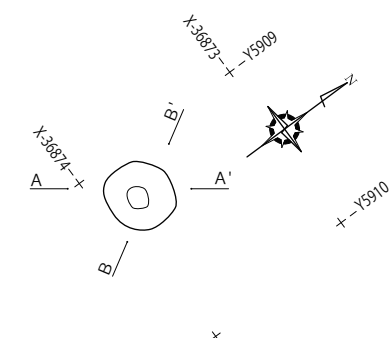
A 272.0m A'

1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 272.0m B'



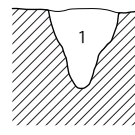
SK31



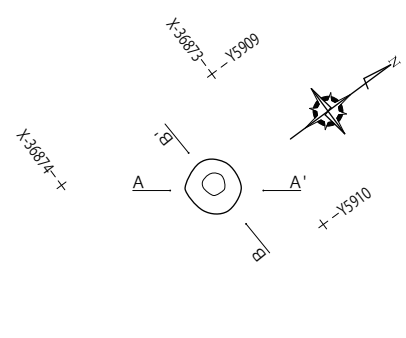
A 271.7m A'

1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

B 271.7m B'



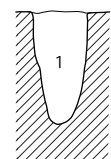
SK32



A 271.7m A'

1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。2~3mmの黄色土粒2%を含む。

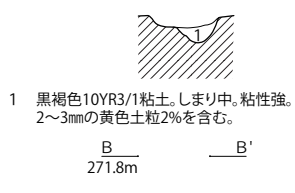
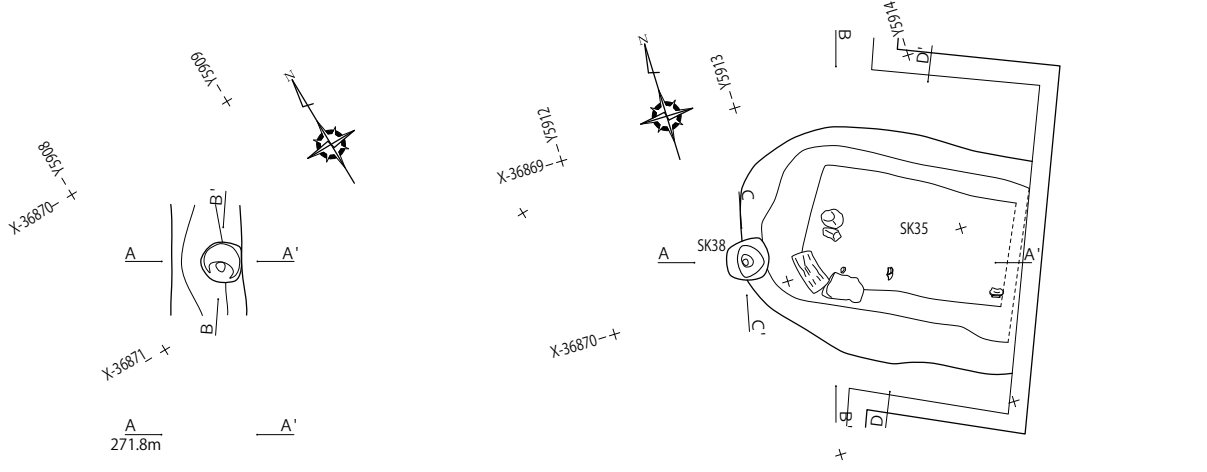
B 271.7m B'



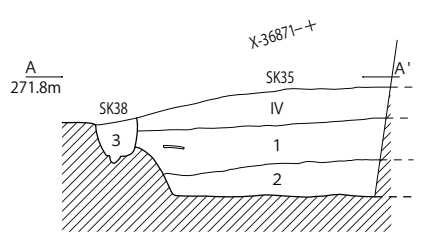
SK33



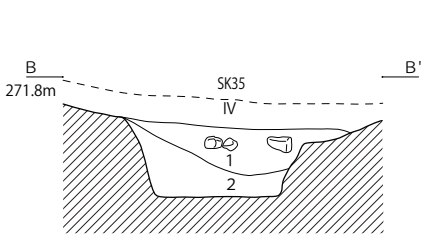
第21図 土坑(5)



1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



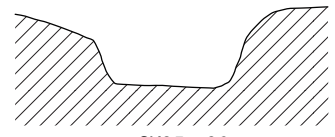
3 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



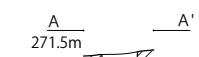
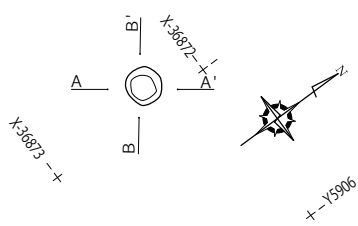
SK34



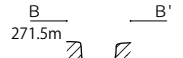
SK38



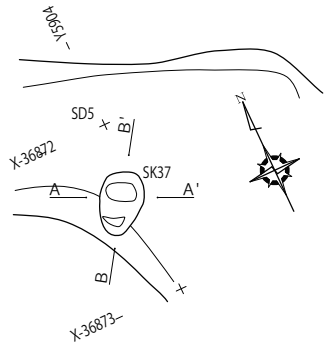
SK35・38



1 黒褐色10YR3/1粘土。しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



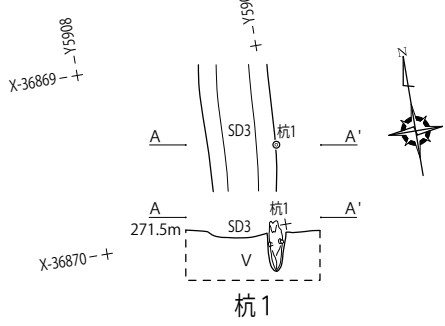
SK36



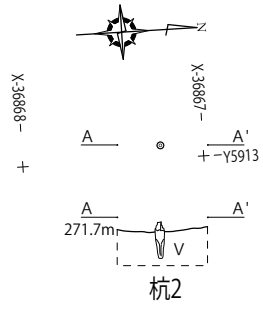
1 黒褐色10YR3/1粘土。
しまり中。粘性強。
2~3mmの黄色土粒2%を含む。



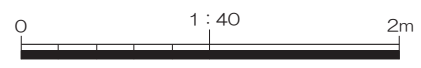
SK37



杭1



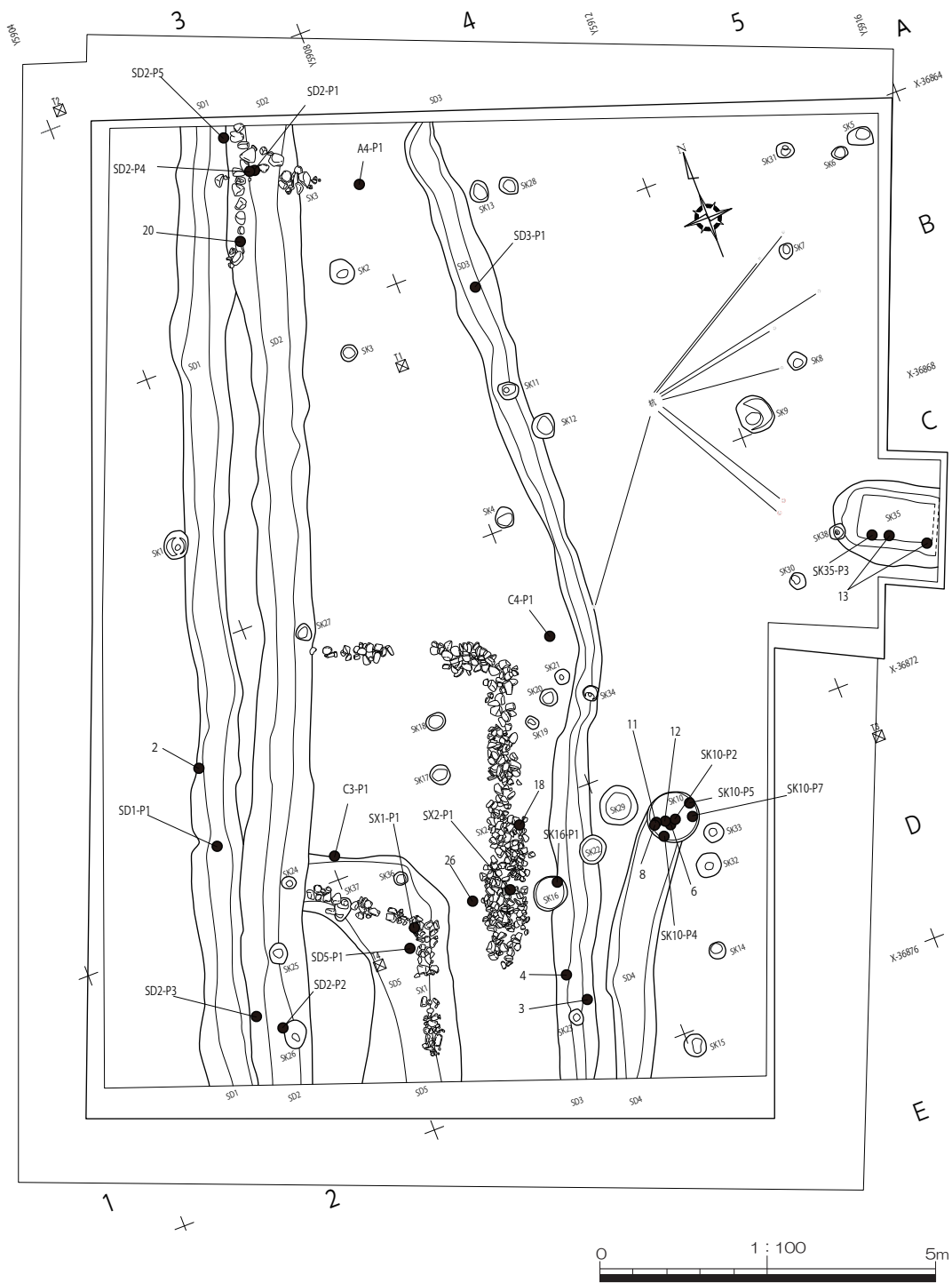
杭2



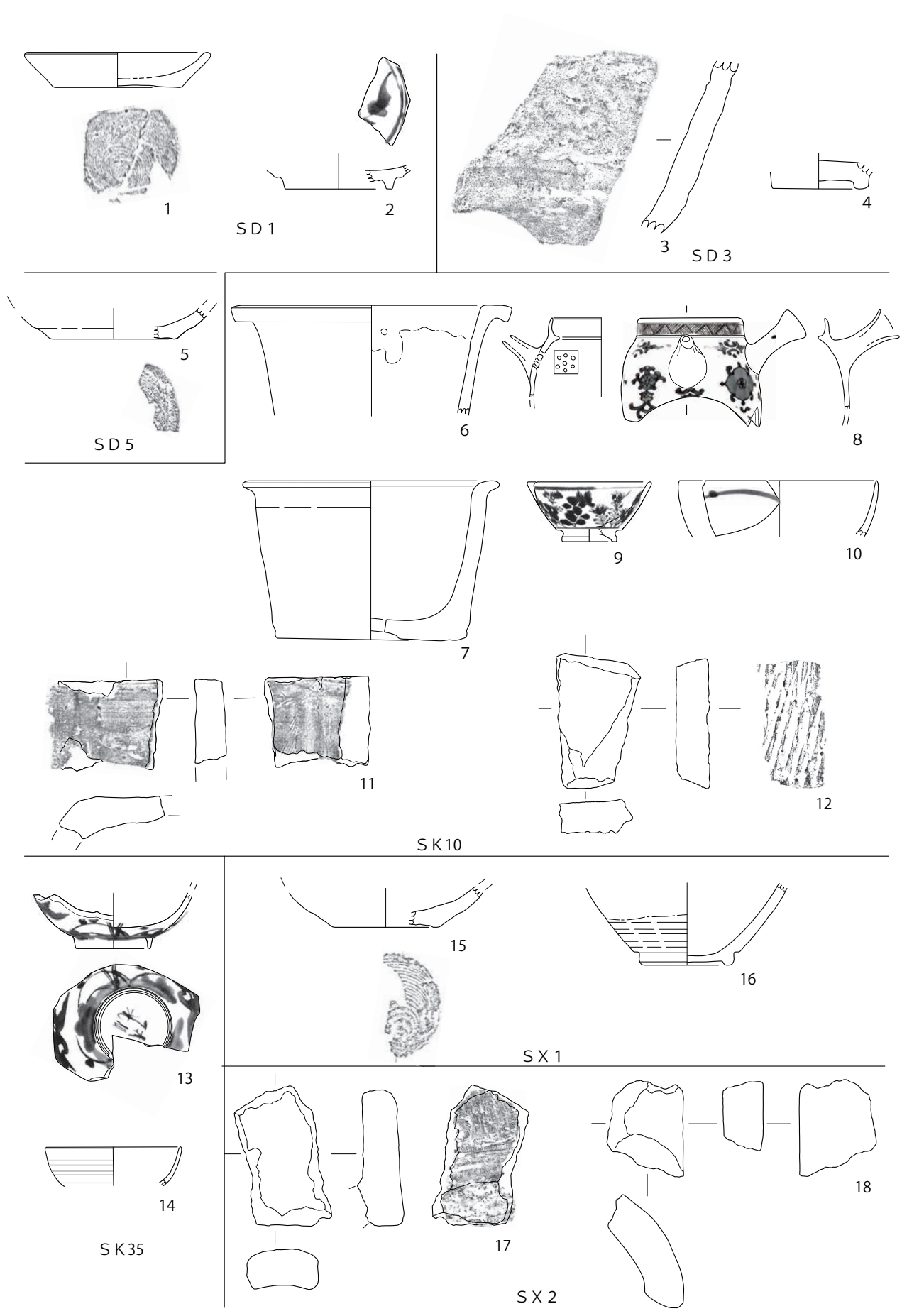
第22図 土坑(6)・杭

表5 土坑計測表

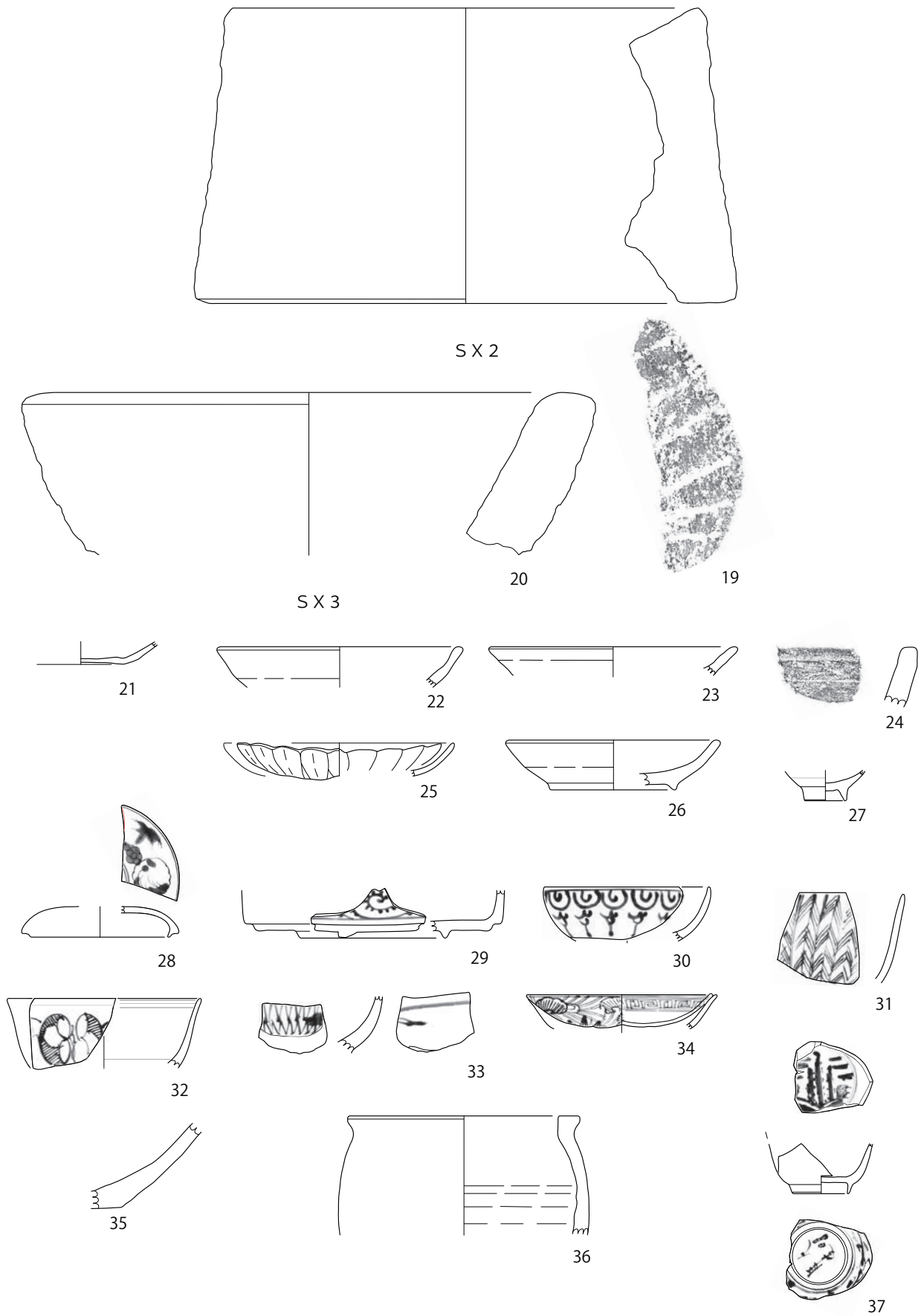
遺構名	平面形	規模 cm ※ (現存値)			切りあい	備考
		長軸	短軸	深さ		
SK01	楕円形	44	38	31		
SK02	不整形	40	30	34		
SK03	円形	27	26	11		
SK04	不整形	32	30	37		
SK05	不整形	40	29	19		
SK06	不整形	26	21	14		
SK07	不整形	22	20	17		
SK08	不整形	28	26	25		
SK09	不整形	56	50	47		
SK10	円形	79	75	28		木製品
SK11	不整形	29	27	26		礎
SK12	不整形	36	34	39		礎
SK13	不整形	32	28	10		
SK14	円形	25	25	12		
SK15	不整形	34	33	20		
SK16	楕円形	57	50	17		
SK17	不整形	30	28	8		
SK18	不整形	29	24	5		
SK19	不整形	21	16	20		
SK20	不整形	26	25	15		
SK21	不整形	22	22	11		
SK22	楕円形	44	40	8		
SK23	不整形	24	21	8		
SK24	不整形	22	18	28		
SK25	不整形	31	28	18		
SK26	不整形	42	33	27		
SK27	不整形	24	22	8		
SK28	不整形	32	25	8		
SK29	円形	58	56	8		
SK30	不整形	25	24	11		
SK31	不整形	26	23	13		
SK32	不整形	38	35	43		
SK33	不整形	30	28	60		
SK34	不整形	22	22	9		
SK35	不整形	(159)	127	38		N-65° -W
SK36	円形	21	21	15		
SK37	不整形	37	25	31	SK37>SD5	



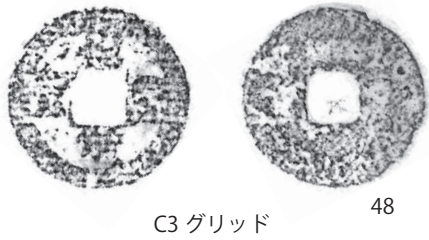
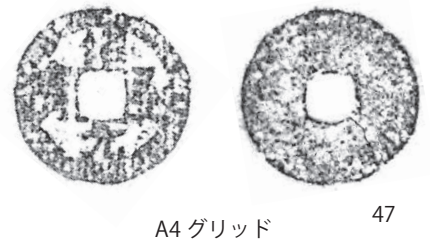
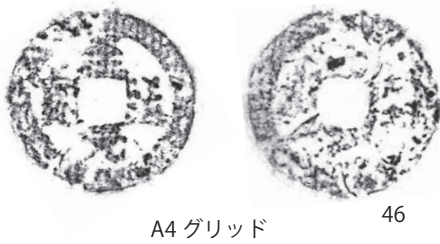
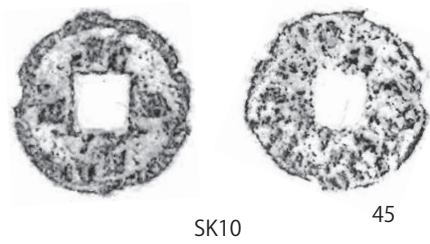
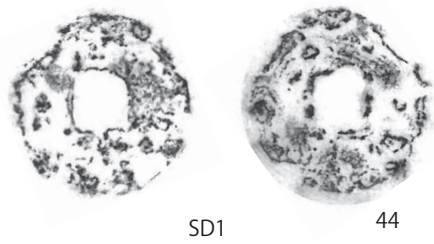
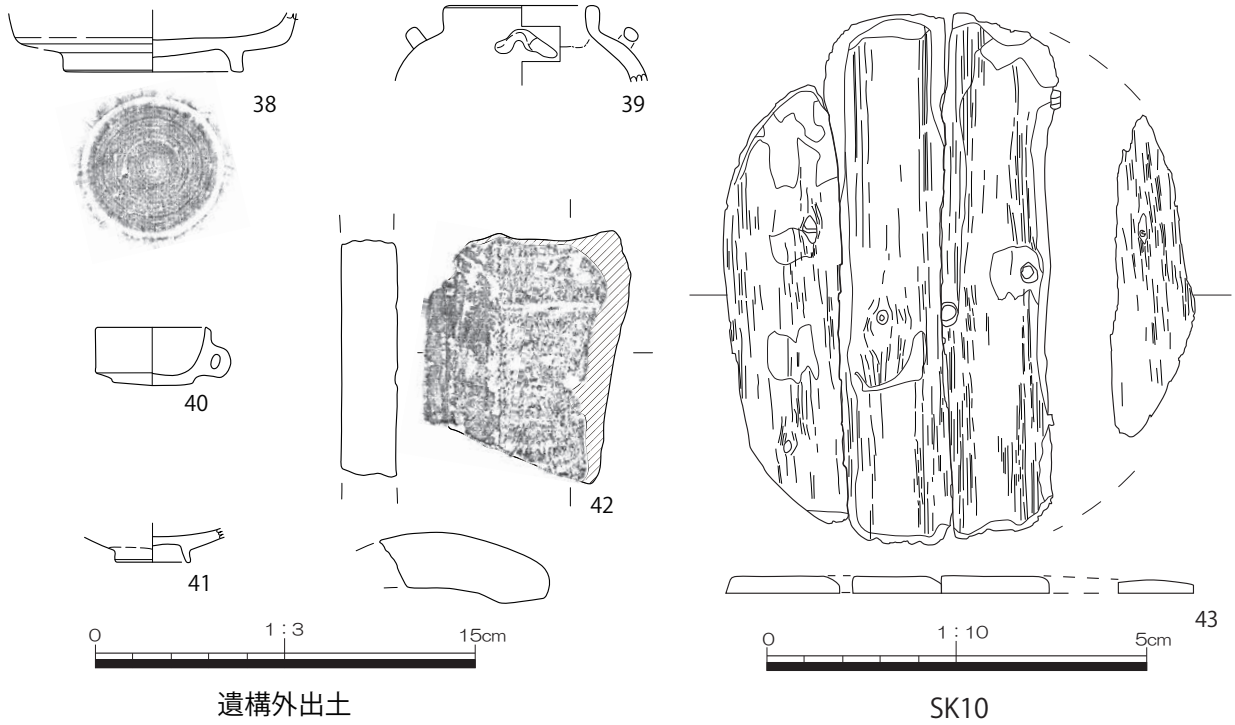
第 23 図 遺物出土分布図



第 24 図 遺物実測図 (1)



第 25 图 遺物実測図 (2)



S = 1 / 1

第 26 図 遺物実測図 (3)

表6 遺物観察表(1)

挿図 番号	出土地点 位置	出土地点 層位	取り上げ NO.	種別	器種	法量 (cm)		部位	器形・調整の特徴		色調		胎土	焼成	備考
						口径	底径		外側	内側	外側	内側			
1	SD1	覆土 上面	一括	土器	かわ らけ	(10.4)	(7.0)	口縁部～底部	外側 口クロ、底部は回転系切り痕。	内側 被熱の痕跡。	5YR6/4 に ぶい橙	密	良好		
2	SD1	覆土 上面	P2	染付 碗	碗	—	(6.0)	底部	透明釉の凹凸。	見込み—草花		密	良好		
3	SD3	覆土	3	土器	甕	—	—	体部	ケズリ	摩耗	7.5YR6/4 にぶい橙	やや粗 石・石英・ 金雲母	やや 良好	中世	
4	SD3		2	磁器	碗?	—	5.4	底部	高台脇まで施釉。高台は外周 を削って稜を作る。底部中央 粗いケズリ。やや盛り上がる。	施釉	N 81 灰白 (胎土)	密	良好		
5	SD5	覆土	一括	土器	かわ らけ	—	(7.0)	体部～底部	底部は回転系切り後底部外周 をケズリ。体部は底部接合部 をケズリ、体部は横位のナデ。	ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 金雲母	良好		
6	SK10	覆土 上面	P1	陶器	鉢	(15.6)	—	口縁部～体部	緑釉。	口縁部付近まで施釉。体部 は無釉。	5YR8/1 灰 白 (胎土)	密	良好		
7	SK10	覆土	一括	土器	植木 鉢	(13.9)	(10.6)	口縁～底部	ナデ、底部連結部、底部ケズリ。 底部に六有り。	体部の口縁部周辺はへラナ デ、下部はケズリ。口縁部 から上半の一部が黒色化。	10YR6/3 にぶい黄橙	やや粗 石・金雲母	良好		
8	SK10	II層	P8	染付	急須	5.6	—	口縁部～体部 下、把手、注口	把手は金継。注口先端も補修 (金?)	内面にも補修跡(金継)有。		密	良好	瀬戸・美濃系	
9	SK10	覆土 上部	一括	染付	小碗	(6.8)	(3.0)	口縁部～底部 1/3	高台脇一部無釉。底部中央部 ケズリ跡をそのまま残す。草 木文。	見込み部渦巻き状のケズリ をそのまま残す。	—	密	良好	瀬戸・美濃系	
10	SK10	覆土	一括	磁器	碗	—	(11.0)	口縁部～体部			5Y9/1 灰白	密	良好		
11	SK10	II層	P6	瓦		(5.0)	(1.4~ 1.8)				7.5YR6/3 にぶい褐	密	良好	法量は残存長、 残存幅、厚さ	
12	SK10	覆土 上面	P3	瓦		(7.6)	(4.2)				N 61 灰白			法量は残存長、 残存幅、厚さ	
13	SK35	上層 下層	P1, P2	染付	碗	—	4.1	体部～底部	草花・鳥 底部「大明年製?」	無文		密	良好	肥前	
14	SK35	IV層	一括	磁器	碗	(7.6)	—	口縁部～体部				密	良好		
15	SX1	石列 上	一括	土器	かわ らけ	—	(6.0)	体部～底部	底部は回転系切り後、底部外 周に粗いケズリ。体部下ケズ リ。	粗いケズリ、ナデ。	7.5YR6/4 にぶい橙	密 長石、金 雲母	良好		
16	SX1 石列 上	一括	一括	陶器	天目	—	4.8	体部～底部	口クロ、体部上半鉄釉区、底 部ケズリ	全面施釉	5Y8/1 灰白 (胎土)	密	良好		

表7 遺物観察表(2)

挿図 番号	出土地点		取り上げ NO.	種別	器種	法量 (cm)		部位		器形・調整の特徴		色調		胎土	焼成	備考
	位置	層位				口径	元値、 <底径	>は現存値 器高	外面	内面	外面	内面				
17	SX2	覆土	P1	瓦	丸瓦	(7.6)	(5.4)	2.0				N51 灰				法量は残存長、 残存幅、厚さ
18	SX2	覆土	P2	瓦	丸瓦	(5.4)	(4.3)	2.2				7.5Y5/1 灰	密	良好		法量は残存長、 残存幅、厚さ
19	SX2	石列	一括	石製品	石臼	(24.2)	(28.0)	15.4								法量は上面、 底面
20	SX3		P1	石製品	火出鉢	(28.0)	-	<8.4>								
21	調査区	一括	一括	土器	かわらけ	-	(4.6)	<	体部～底部			7.5YR6/4 にふい橙	密	良好		
22	D2	IV層	一括	土師	かわらけ	(12.6)	-	<2.1>	口縁部～底部	ヨコナデ		7.5YR7/4 にふい橙	やや密 石・金雲母	良好		
23	D2	IV層	一括	土師	かわらけ	(12.8)	-	<1.5>	口縁部～体部	ヨコナデ ヨコナデ。口縁部と体部の境界は削って段を作る。		7.5YR7/4 にふい橙	密 金雲母	良好		
24	A4	IV層	一括	土師器	甕	-	-	-	口縁部	ヨコナデ。ヘラナデは工具1 単位おきに調整が行われているため段が付いている。		5YR6/6 橙	やや密 石・金雲母	良好		
25	A4	IV層	一括	磁器	皿	(12.0)	-	<1.7>	口縁部～体部	輪花 青磁?			密	良好		
26	D3	IV層	1	磁器	小皿	(11.0)	(6.5)	2.6	口縁部～底部 1/4	ロクロ。縁釉。底部にトチン痕。施釉		5Y8/1 灰白 (胎土)	密	良好		
27	調査区	一括	一括	磁器	猪口	-	(1.2)	<	体部～底部				密	良好		
28	A4	III層	一括	染付	蓋	(7.2)	-	<1.6>	蓋 1/4	草花			密	良好		
29	A5	I層攪乱	一括	染付		-	(7.6)	<2.5>	体部下～底部	硝唐草文			密	良好		
30	B4	III層	一括	染付	碗	(8.6)	-	<2.8>	口縁部～体部	器高低い。渦巻き文と幾何学 文の組み合わせ。			密	良好		
31	C3	IV層	一括	染付	碗	-	-	-	口縁部～体部	矢筈文	透明釉		密	良好		
32	C5	IV層	一括	染付	碗	(10.0)	-	<3.6>	口縁部～体部	草花	口縁部に三重の圈線		密	良好		瀬戸・美濃系
33	C5	IV層	一括	染付	碗	-	-	-	体部	鳥	網文		密	良好		肥前系
34	C5	IV層	一括	染付	碗	(9.9)	-	<1.8>	口縁部～体部	草花	雷文		密	良好		瀬戸・美濃系
35	SK10	覆土	一括	陶器	甕	-	(4.0)	<	体部～底部			7.5YR8/2 灰白	密	良好		

表8 遺物観察表(3)

挿図番号	出土地点		取り上げNO.	種別	器種	法量(cm)、()は復元値、< >は現存値		部位	器形・調整の特徴		色調		胎土	焼成	備考
	位置	層位				口径	底径		器高	外面	内面	外面			
36	A3	IV層	一括	陶器	壺	(12.0)	—	<6.2>	鉄釉	鉄釉	7.5YR7/3にぶい橙	密	良好		
37	調査区	I層攪乱	一括	染付	碗	—	1.8	<2.7>	底部「大明年製」	見込み-建物、トチン跡		密	良好		
38	B5	III層	一括	陶器		—	7.1	<2.3>	ロククロ。体部は外に広がった後ほぼ垂直に立ち上がり施釉される。無袖箇所にはヘラケズリ、ナデ。切り高台。	円形の重ね焼き痕。	5Y8/1灰白(胎土)	5Y8/2灰白	良好		
39	C4	IV層	一括	陶器	壺	(5.9)	—	<3.0>	肩に把手が付く。ロククロ。口縁部は無袖。	ケズリ、ナデ。口縁部に施釉。体部は地。	5 Y 8/1灰白(胎土)	5Y5/4オリーブ	良好		
40	C5	IV層	一括	陶器	御猪口	4.3	3.2	2.3	ヘラケズリ、緑の釉薬		7.5YR7/6橙(胎土)	密	良好		
41	排土	一括	一括	陶器	碗	—	2.9	<1.4>	ロククロ、高台・高台脇-無袖	施釉	5Y8/1灰白(胎土)	5Y8/3淡黄(釉薬)	良好	肥前系京焼	
42	D3	IV層	一括	瓦	平瓦	9.3	7.2	2.2		布目	N41灰	やや粗長石	良好	法量は残存長、残存幅、厚さ	
43	SK10	底	—	木製品	桶	(61.5)	(70.3)	(2.2)	底板					法量は短径、長径、厚さ	

挿図番号	出土地点		取り上げNO.	種別	器種	法量(cm)、()は復元値、< >は現存値			部位	備考
	位置	層位				長さ	幅	厚さ		
44	SD1	覆土	P1	銅	銭	23	23	0.15	完形	「開元通宝」
45	SK10	覆土	一括	銅	銭	24	24	0.2	完形	摩耗
46	A4	IV層	P1	銅	銭	25	25	0.2	完形	「至元通宝」
47	A4	IV層	一括	銅	銭	23	23	0.15	完形	「紹聖元宝」
48	C3	IV層	一括	銅	銭	24	24	0.15	完形	「□□通宝」
49	D3	IV層	P2	銅	銭	24	23	0.15	完形	「元祐通宝」

府城下町遺跡丸の内1丁目 12-10 地点

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

調査区は甲府駅南側、甲府駅より西に約 150m の山梨県労働局の東側に位置している。現場調査に先立って重機搬入出・発生土搬出用ダンプの進入路の確保のために道路占用許可及び道路使用許可の申請を行い9月6日から表土の重機掘削を開始した。重機掘削期間中は、歩道を重機・ダンプが横断するため、路面保護のためにゴムマット、その上にプラシキ(鉄板相当品)を敷き詰めた。プラシキは鉄板と異なり人力で移動出来るため、重機掘削作業終了時に撤去し、夜間は歩道を解放した。また、歩行者の安全誘導、車両誘導のため交通誘導員2名、歩行者注意喚起のための看板、工事告知看板を設置して安全を図った。重機掘削終了後、調査区入口に安全柵を設置した。

当初表土のみ重機による掘削を行う予定だったが地山面直上まで攪乱が及び、区域によっては天地返しにより地山の粘土が上層で確認され、さらに、コンクリート片が地山にめり込んでいる状況も確認されたため攪乱層まで重機で掘削を行い発生土は搬出した。

遺構の平面測量(写真測量含む)及び遺物の記録・取り上げはトータルステーションシステムにより行い、遺構の断面は手実測により行った。記録写真は小型一眼レフカメラによる 35mm カラーネガとデジタルカメラを使用した。全体写真は、労働局の屋上からの撮影許可を頂き、屋上から調査区全体の写真撮影を行った。

計測したデータおよび補正した写真測量用写真は adobe 社製「illustratorCS6」により全体図、個別図、土層断面図を作成した。

第2節 基本層序(第 28 図)

上述したように地山面まで攪乱を受け、調査区の壁面もほぼすべて攪乱層である。地山直上にわずかに攪乱を受けていない層が確認された。東壁および南壁の土層断面図を示す。

1. 表土
2. 礫層
3. 礫層
4. 砂層

ここまで攪乱層

5. 10YR2/2 黒褐 粘性強く、締まりやや弱い。
6. 10YR4/3 にぶい黄褐 粘性やや強く、締まり強い。
7. 10YR4/1 褐灰 地山は調査区北側では砂質粘土で次いで礫が検出され再び砂質粘土層となる。

第4章 遺構と遺物

第1節 検出状況(第 27 図)

今回の調査では、溝状遺構(SD)3条、土坑(SK)5基、ピット(Pit)8基が検出された。遺物は近世、近代の遺物が主であり土器、陶器、磁器、瓦、銭が出土しているが、縄文時代と思われる石製品も出土している。

第2節 溝状遺構（SD）（第29～30図）

3条検出された。いずれも調査区をほぼ東西に横断している。また、上層が攪乱を受けているため溝上部は削平を受けている可能性があり溝の深さも浅い。溝の主軸は武田城下町（N-20°-E）、甲府城下町（N-14°E）とは異なっている。

①1号溝状遺構（第29図）

検出された規模は、長さ2.0m、幅は0.3～0.5m、深さは0.09mを測る。主軸の方位はN-66°-Wを指している。西側のSK3に切られている。

②2号溝状遺構（第29図）

検出された規模は、長さ2.0m、幅は0.2～0.3m、深さは0.04mを測る。主軸の方位はN-80°-Wを指している。

③3号溝状遺構（第30図）

検出された規模は、長さ2.0m、幅は0.8m、深さは0.25mを測る。主軸の方位はN-75°-Wを指している。

第3節 土坑（SK）（第31・32図）

5基検出された。いずれも調査区外に延びており全体が把握できる土坑はない。

①1号土坑（第31図）

検出された規模は、残存している長軸は1.22m、短軸0.93m、深さは0.06mを測る。

②2号土坑（第32図）

検出された規模は、残存している長軸は1.36m、残存している短軸は0.99m、深さは0.45mを測る。SK4とSK5を切っている。覆土中から花崗岩他の礫が検出された。

③3号土坑（第31図）

検出された規模は、残存している長軸は1.36m、残存している短軸0.93m、深さは0.45mを測る。

④4号土坑（第32図）

検出された規模は、残存している長軸は0.91m、残存している短軸0.58mを測る。SK5を切っており、SK2に切られている。

⑤5号土坑（第32図）

検出された規模は、残存している長軸は0.90m、残存している短軸0.41m、深さは0.20mを測る。SK2,SK4に切られている。瓦が出土している。

第4節 ピット（Pit）（第34・35図）

8基検出されたが建物を構成する柱穴かは断定出来ない。法量は計測表で示した。

第5節 出土した遺物

江戸後期～幕末までの陶磁器、瓦が主体である。1はSD2の覆土から出土した磁器の底部である。外面はロクロ、ケズリ、兜金高台。内面は透明釉。2はSK5から出土した丸瓦で布目が残る。3はPit2から出土した土製品の土鈴の中の玉と思われる。4はPit3から出土した磁器碗の体部～底部である。内面の体部は白釉。5はPit7の底面から出土した磨石である。縄文時代と思われるが出土状況を見ると根固石のような用途で使用したようにも見る事が出来る。

ここからは遺構外出土の遺物である。

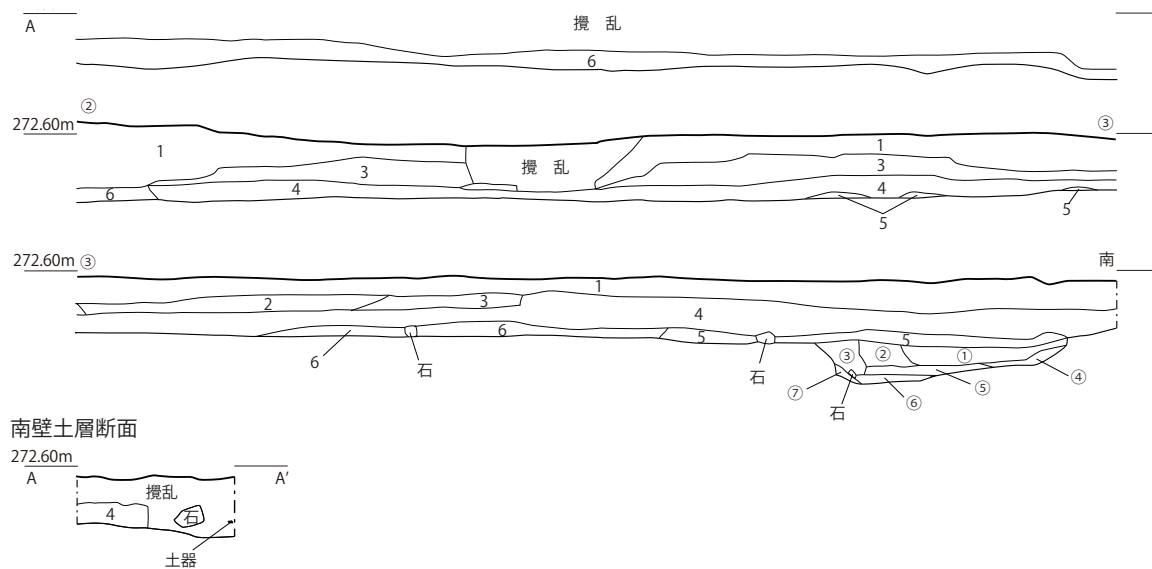
6は染付の猪口の体部～底部である。器形は猪口。金継されている。底部に緑色の文字。内面は草花文。
 7・9は磁器で蛇の目高台。8は磁器碗の底部～体部である。10は染付碗の底部～体部である。外面は底部に二重罫。
 11は陶器碗の体部～底部である。12は陶器の底部～体部である。外面はロクロ、ケズリ、底部は回転糸切り痕、スス附着。内面は鉄釉。

13は磁器徳利の体部～底部である。外面はロクロ、高台はケズリ出し、透明釉。内面は未調整、透明釉。

14は陶質土器の焙烙の体部～底部である。胎土は密で石英・長石・金雲母・赤色粒を含む。

15は平瓦で幕末以降か。16～19は丸瓦で内面は布目痕が残る。

20は銭で「寛永通宝」で背面は「十一背」。

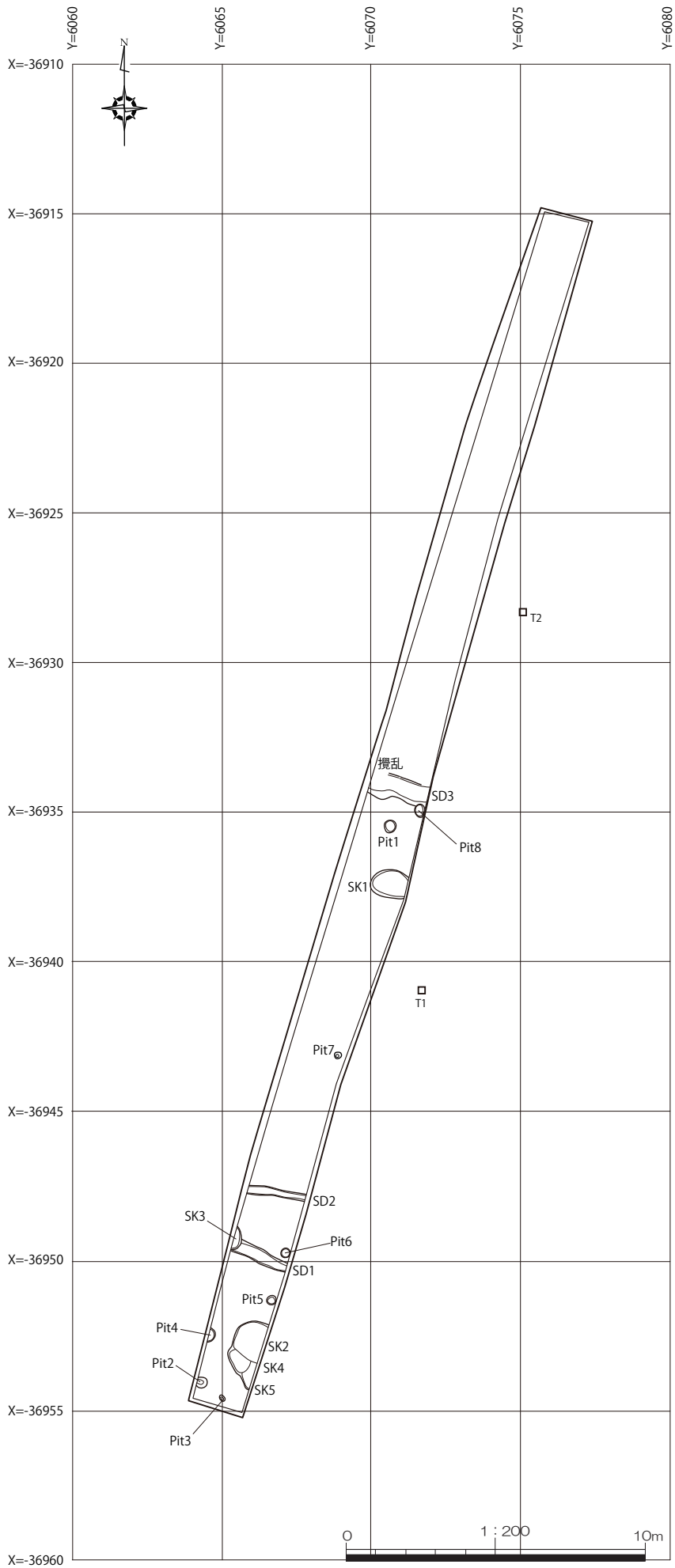


- 1. 表土
- 2. 礫層
- 3. 礫層
- 4. 砂層
- ここまで攪乱層
- 5. 10YR2/2 黒褐 粘性強く、締まりやや弱い。
- 6. 10YR4/3 にぶい黄褐 粘性やや強く、締まり強い。

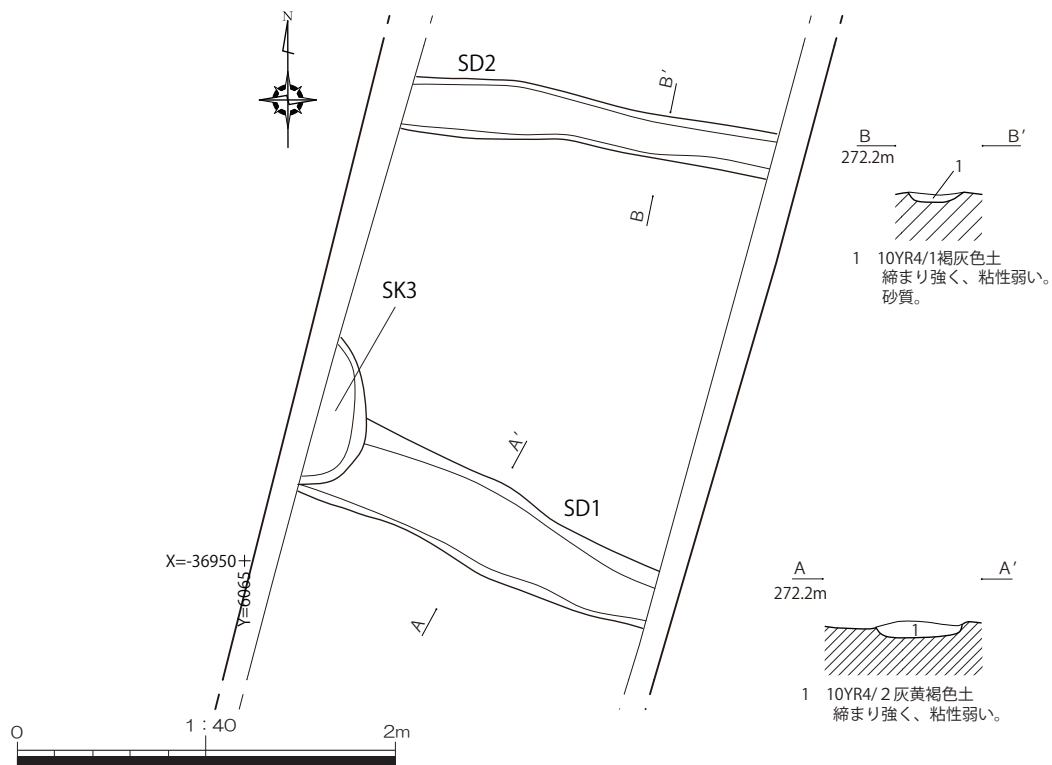
SK2,4,5 N-S/SK2 E-W セクション

- ①10YR4/2 灰黄褐 粘性・締まり共にやや強い。
- ②10YR4/1 褐灰 粘性強く、締まりやや強い。粘土層。地山ブロック含む。攪乱層
- ③10YR4/2 灰黄褐 粘性・締まり共にやや強い。地山の礫含む。攪乱層。
- ④10YR3/2 黒褐 粘性強く、締まりやや弱い。地山ブロック、炭化物含む。瓦出土。
- ⑤10YR3/1 黒褐 粘性強く、締まりやや弱い。地山の黄褐色土、炭化物含む。遺物出土。
- ⑥10YR4/1 褐灰 粘性強く、締まりやや弱い。礫含む。
- ⑦10YR4/1 褐灰 地山

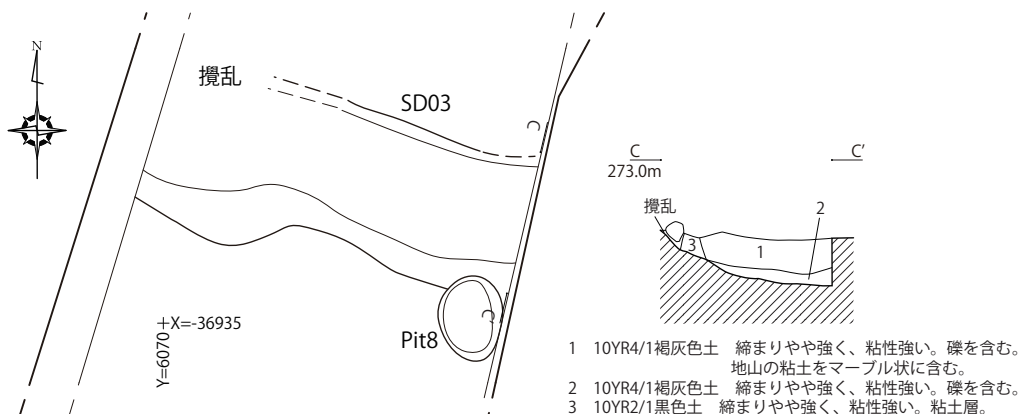
第 27 図 土層断面図



第 28 図 遺構全体図



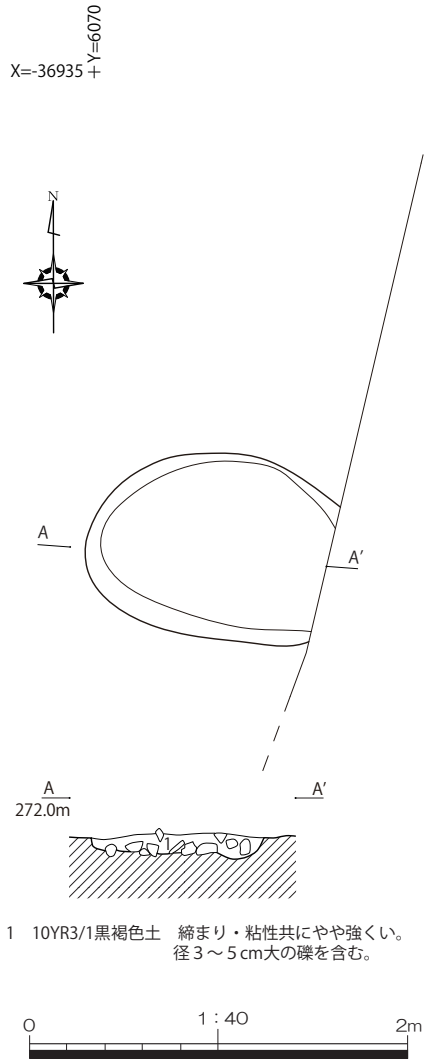
第 29 図 1・2号溝状遺構



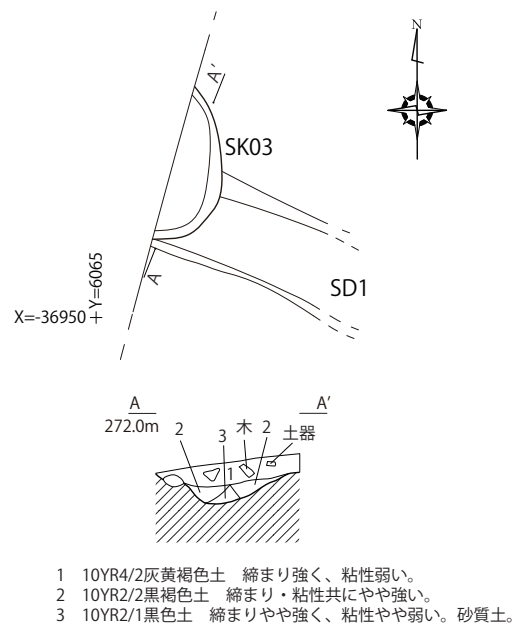
第 30 図 3号溝状遺構

表 9 溝状遺構計測表

遺構名	規模 m ※ (現存値)			主軸方向	切りあい	備考
	長軸	短軸	深さ			
SD1	(1.99)	0.3 ~ 0.5	0.09	N-66° -W	SK3>SD1	
SD2	(1.97)	0.2 ~ 0.3	0.04	N-80° -W		
SD3	(1.99)	0.8	0.25	N-75° -W	Pit8>SD3	



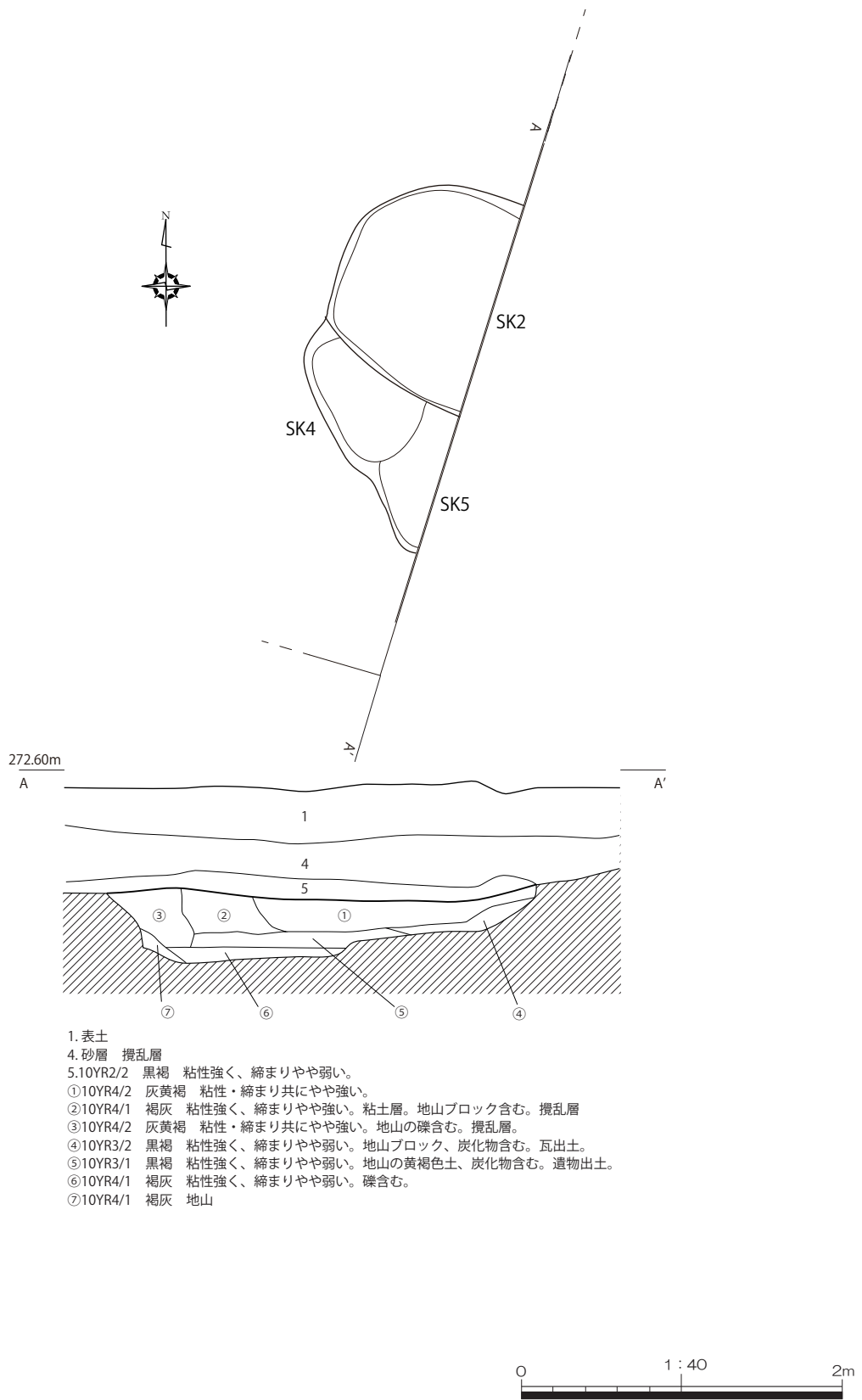
第31図 1号土坑



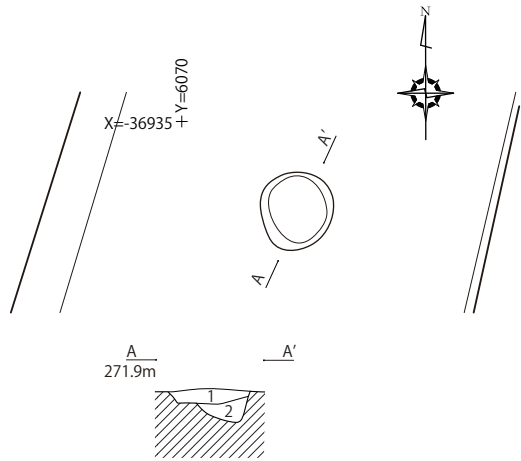
第32図 3号土坑

表10 土坑計測表

遺構名	平面形	規模 cm ※ (現存値)			切りあい	備考
		長軸	短軸	深さ		
SK1	不整形	(122)	93	6		
SK2	不整形	136	(99)	45	SK2>SK4	
SK3	不整形	(80)	(27)	21	SD1>SK3	
SK4	不整形	(91)	(58)	-	SK4>SK5	
SK5	不整形	(90)	(41)	20	SK5<SK4	

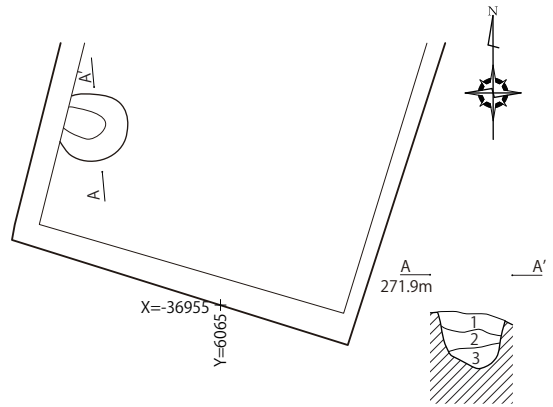


第 33 図 2・4・5号土坑



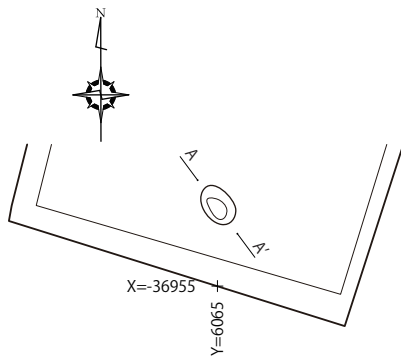
- 1 10YR3/1黒褐色土 締まり・粘性共に強い。地山の砂岩質の礫の破片を含む。
- 2 7.5Y4/1灰色土 締まり強く、粘性やや弱い。砂質。1層をマープル状に含む。

Pit1



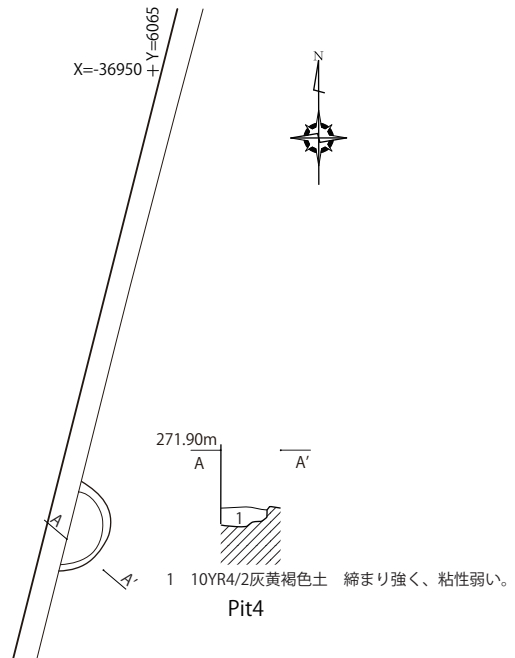
- 1 10YR4/2灰黄褐色土 締まり・粘性やや弱い。焼土を含む。
- 2 10YR4/2灰黄褐色土 締まり・粘性共に強い。礫径1~3cm大を含む。
- 3 10YR4/2灰黄褐色土 締まりやや強く、粘性強い。礫径1cm大を含む。

Pit2



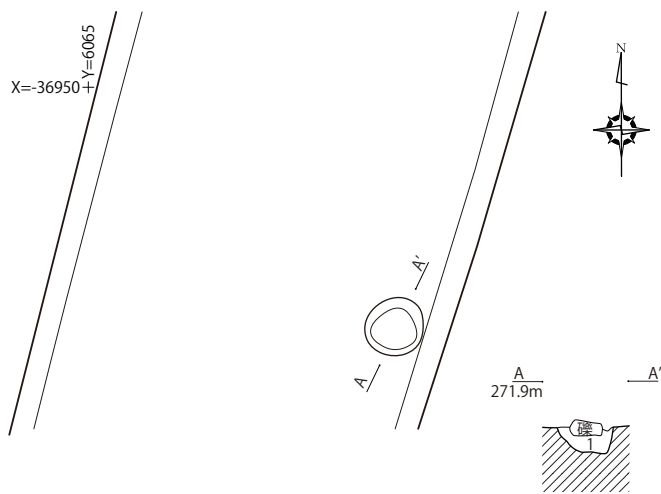
- 1 10YR4/2灰黄褐色土 締まり強く、粘性弱い。染付片含む。焼土含む。

Pit3



- 1 10YR4/2灰黄褐色土 締まり強く、粘性弱い。

Pit4

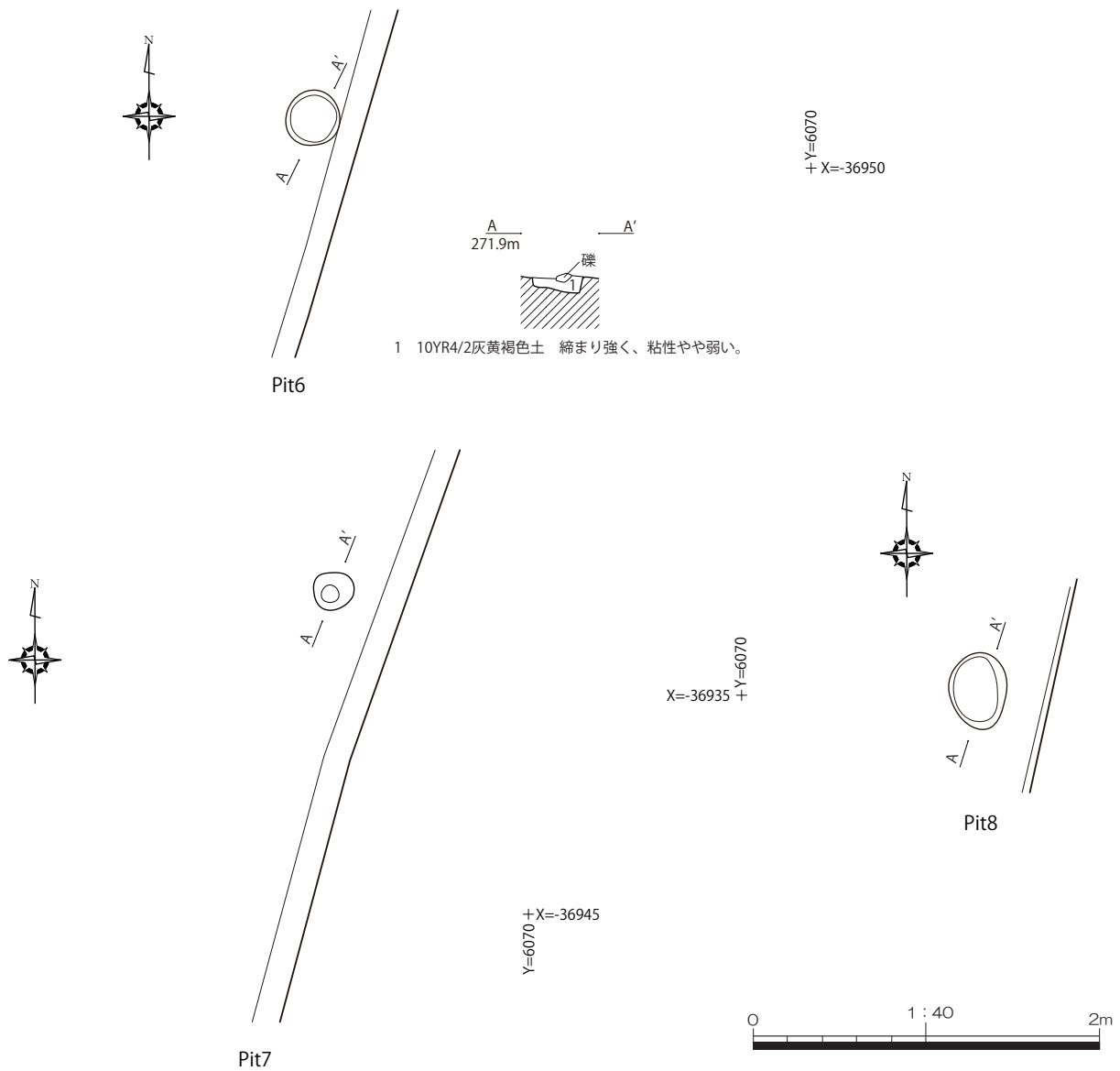


- 1 10YR4/2灰黄褐色土 締まり強く、粘性やや弱い。

Pit5



第34図 ピット(1)

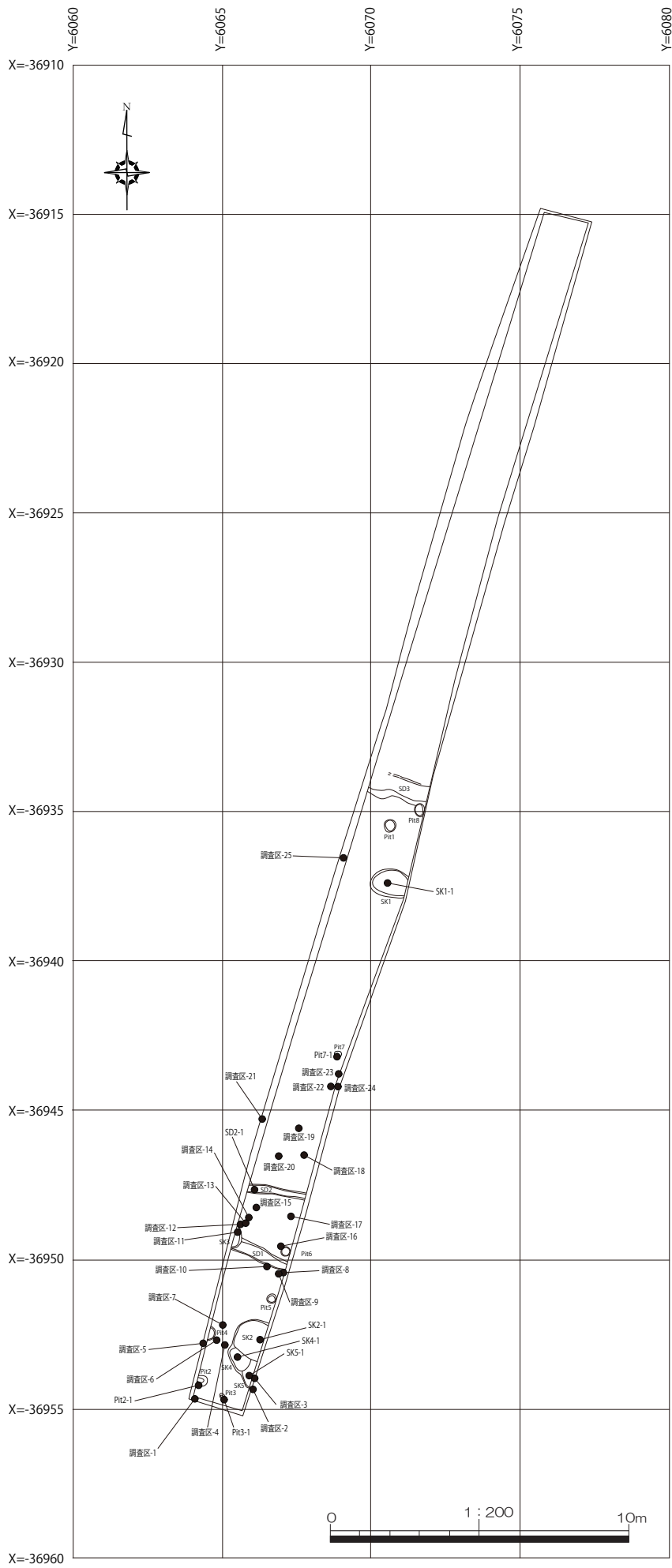


1 10YR4/2灰黄褐色土 締まり強く、粘性やや弱い。

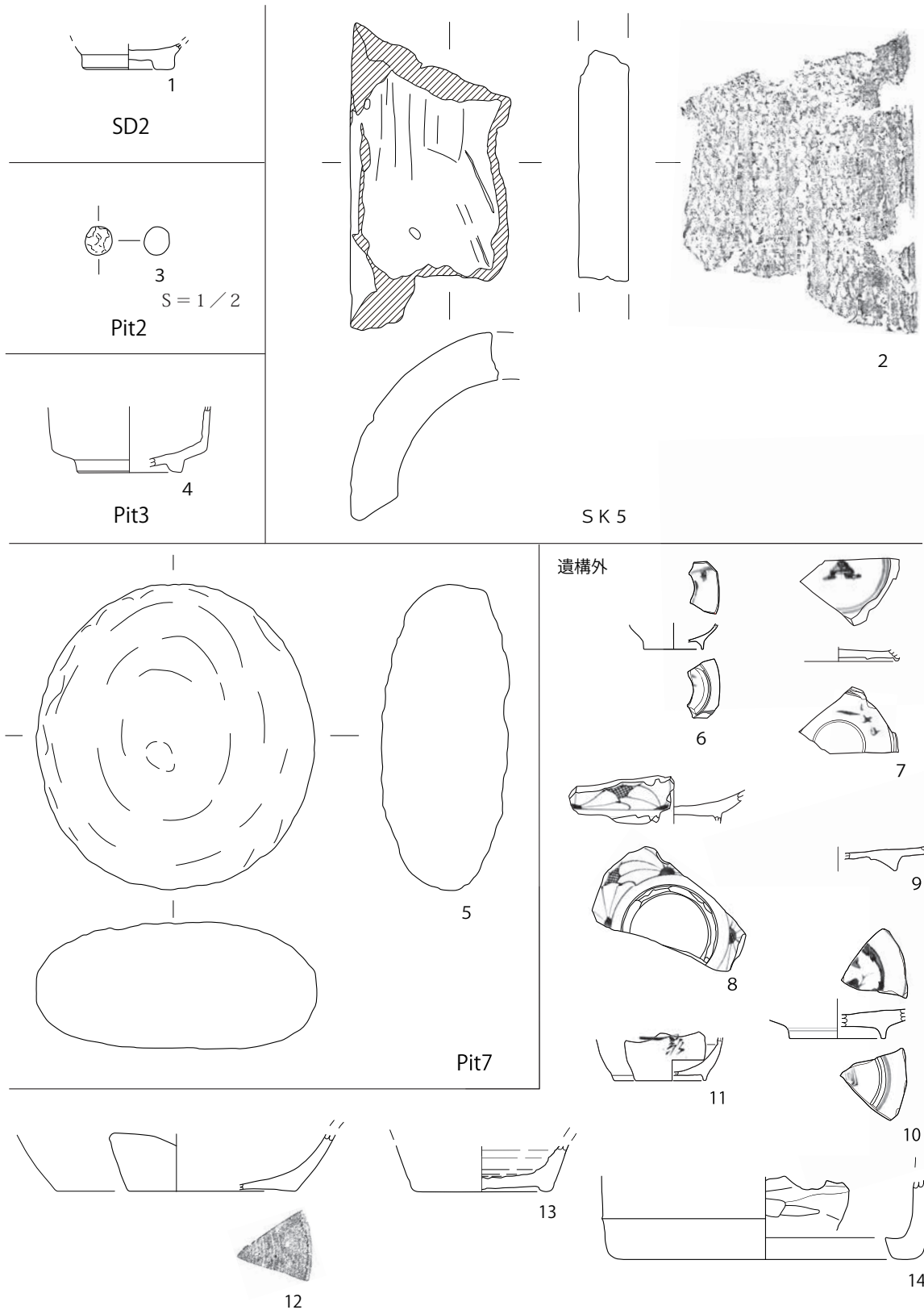
第 35 図 ピット (2)

表 11 ピット計測表

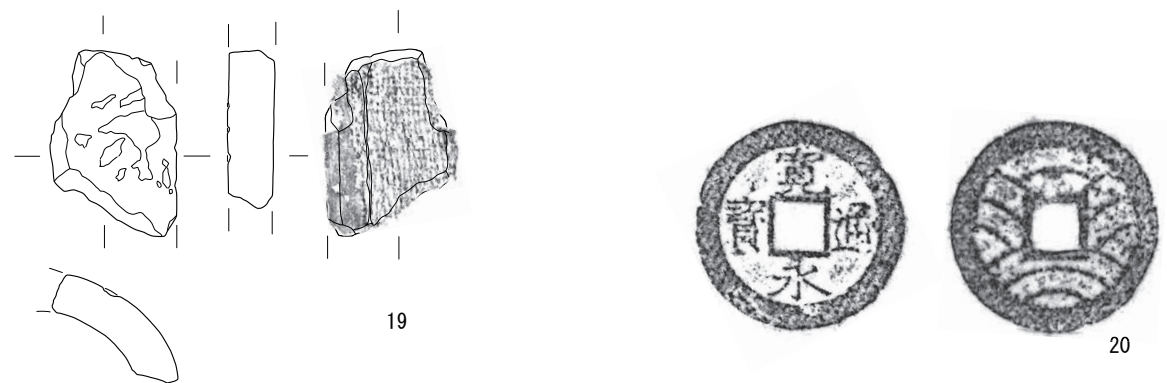
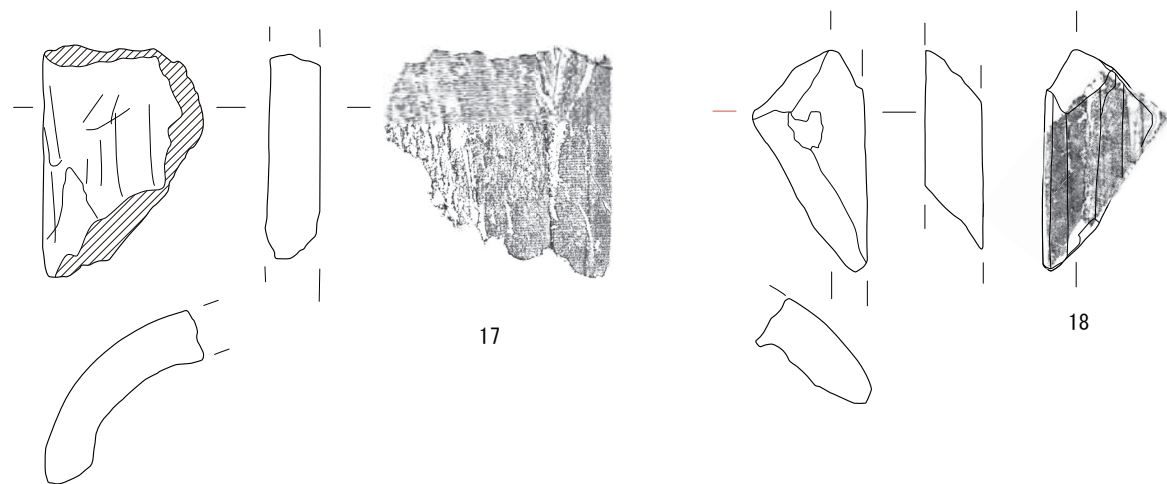
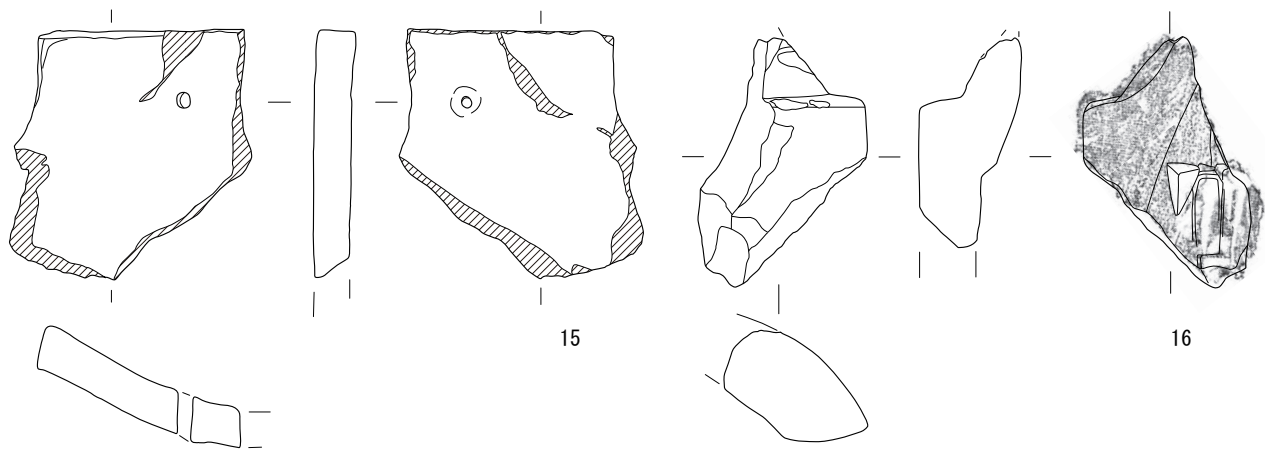
遺構名	平面形	規模 cm ※ (現存値)			備考
		長軸	短軸	深さ	
Pit1	不整形	42	40	18	
Pit2	—	35	(34)	30	
Pit3	長楕円形	23	16	17	
Pit4	—	50	(21)	11	
Pit5	不整形	32	31	13	
Pit6	楕円形	32	31	10	
Pit7	不整形	23	23	—	
Pit8	楕円形	43	34	—	



第 36 図 遺物出土分布図



第 37 図 遺物実測図 (1)



第 38 图 遺物実測図 (2)

表 12 遺物観察表

挿図 番号	出土地点		取り上 げ NO.	種別	器種	法量 (cm)、() は復 元値、< > は現存値			部位	器形・調整の特徴		色調		胎土	焼成	備考
	位置	層位				口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
1	SD2	覆土	1	磁器		—	(4.6)	<1.4>	底部	ロクロ、ケズリ、兜金?	透明釉、砂粒			密	良好	
2	SK5	覆土	1	瓦	丸瓦	(15.5)	(7.5)	2.4			布目	N4/ 灰		密	良好	
3	Pit2	覆土	1	土製品	土鈴の 中の玉	0.95	0.9	0.85	玉				5YR6/4 にぶ い橙	密	良好	
4	Pit3	覆土	1	磁器	碗	—	(5.2)	<>	体部～底部	風景	胴部に白釉			密	良好	
5	Pit7	覆土	1	石製品	磨石	10.2	9.4	4.3				2.5Y6/2 灰黄				
6	調査区		17	染付	猪口	—	(3.0)	<1.5>	体部～底部	薄手。金継。底部に緑 色の文字?	草花			密	良好	
7	調査区		23	磁器	—	—	(6.0)	<>	底部					密	良好	
8	調査区		3	磁器	碗	—	(4.6)	<>	体部～底部					密	良好	
9	調査区		一括	磁器	—	—	(7.0)	<>	底部					密	良好	
10	調査区		一括	染付	碗	—	(4.8)	<1.5>	体部～底部	蛇の目高台	梅花			密	良好	
11	調査区		17	陶器	碗	—	(4.6)	<>	体部～底部	底部に二重団の角				密	良好	
12	調査区		一括	陶器		—	(12.0)	<3.3>	体部～底部	ロクロ、ケズリ、底部 一回転糸り切り痕、ス ス付着、体部中より施 釉?	鉄釉	10YR6/2 灰 黄褐		密	良好	
13	調査区		一括	陶器	徳利	—	(7.0)	<2.5>	体部～底部	ロクロ、高台はケズリ 出し、透明釉。	未調整、透明釉。	2.5Y7/1 灰白		密	良好	
14	調査区		一括	陶質土器	焙烙	—	(16.0)	<4.4>	体部～底部	ケズリ	ケズリ	5YR6/6 橙		密	良好	密 石英・長石・金 雲母・赤色粒
15	調査区		24	瓦	平瓦	(9.9)	(9.4)	1.6				N4/ 灰		密	良好	
16	調査区		21	瓦	丸瓦	(9.9)	(6.7)	4.1		布目				密	良好	
17	調査区		一括	瓦	丸瓦	(9.3)	(6.4)	2.0		布目	布目	N5/ 灰		密	良好	
18	調査区		一括	瓦	丸瓦	8.7	4.5	2.3		布目		N2/0 黒		密	良好	
19	調査区		一括	瓦	丸瓦	7.3	5.4	1.8		布目		N2/0 黒		密	良好	

瓦・石製品の法量は長さ、幅、厚さ

挿図 番号	出土地点		取り上げ NO.	種別	器種	法量 (cm)、() は復元値、< > は現 存値			部位	備考
	位置	層位				長さ	幅	厚さ		
20	調査区		一括	銅	銭	28	28	0.2	完形	「寛永通宝」十一背

第5章 まとめ

丸の内2丁目地点・1丁目地点に関しては、区域は連続していないが、調査範囲が狭い事もあり単独の検出状況だけでは検出された遺構の性格を判断することは出来ない。従ってここでは、甲府城下町遺跡という大きな括りの中、2地点に関してまとめてみる。

武田城下町（古府中）と甲府城下町（新府中）は、今回の調査地点付近で重複していると言われている。町割の軸線の方位が古府中は武田城下町の南北方向の町割軸であるN-20°-E、新府中は条里型地割を基礎としたと見られるN-14°-Eである。したがって今回の調査地点付近で武田城下町南端と甲府城下町の2つの時期の遺構が検出される可能性が考えられた。

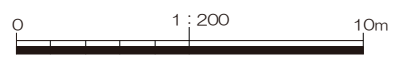
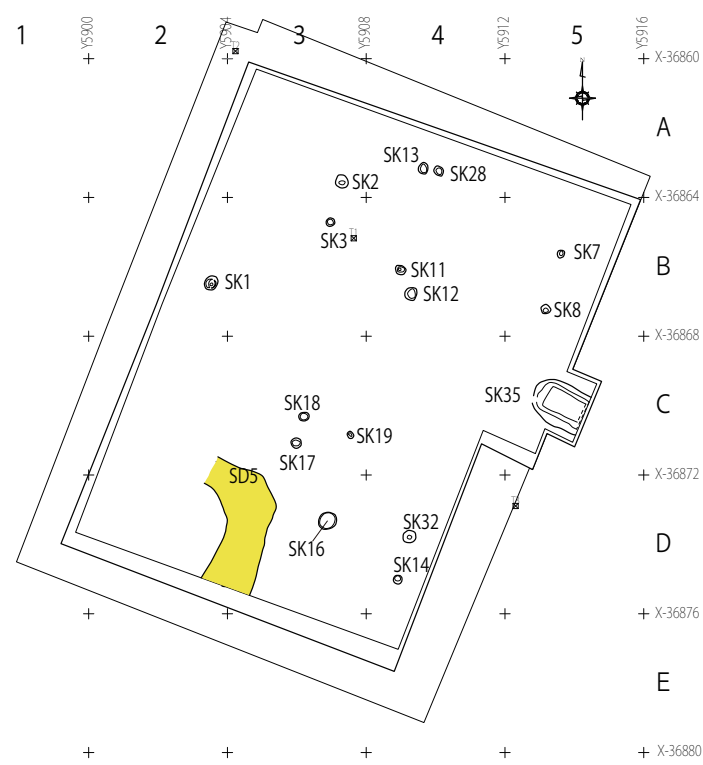
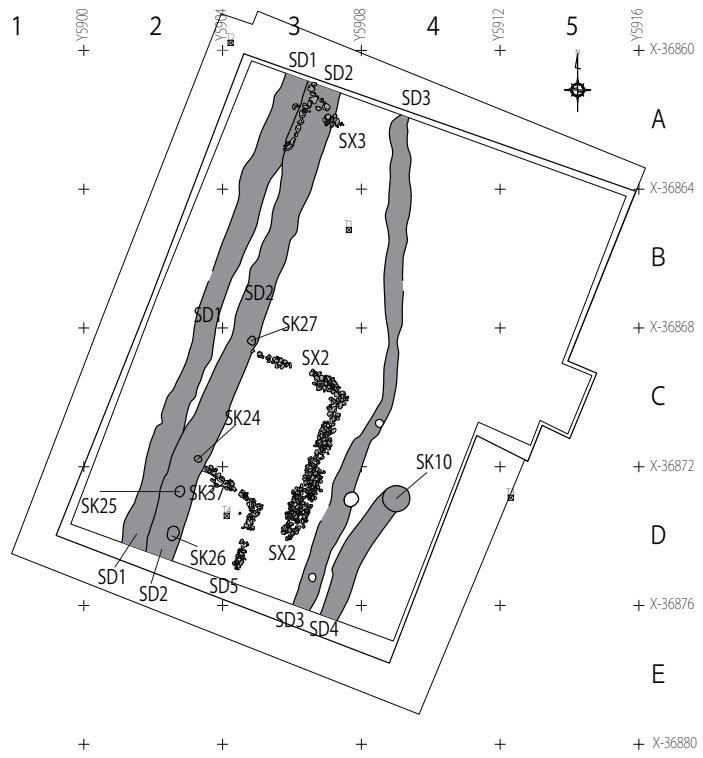
1丁目地点では、溝状遺構3条、土坑5基、ピット8基が検出された。遺物は、近世の陶磁器を中心に瓦、縄文時代と思われる石製品が出土している。2丁目地点では、溝状遺構5条、石列(SX)3基、土坑38基、杭が検出された。遺物は、陶磁器、土師器、瓦、銭、獣骨、石臼や火出鉢の破片といった石製品が出土し、SK10の底面には桶の底板が残存していた。

検出された遺構を検討してみると、

- ①丸の内2丁目目で検出されたSD1からSD4は、途中で方向が変わっている溝もあるが、一方の主軸の方位がN-19°-E～N-21°-Eを示している。これは、武田城下町の区割りの方位と一致している。
- ②丸の内2丁目目で検出されたSD5は途中で方向が変わっているが、一方の主軸の方位がN-14°-Eを指している。これは、甲府城下町の区割りの方位と一致している。
- ③丸の内1丁目目で検出された溝状遺構は上記①②の方位には属せずN-66°-WからN-80°-W（北西方向）を指している。SD1に関しては、丸の内1丁目地点の西に隣接する地点の調査報告書（『甲府城下町遺跡-甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財報告書』）（山梨県教育委員会 2004）で報告されている溝状遺構の中で主軸の方位、幅が「48溝」と一致している。報告の中で48溝の性格は「…切り合い関係から見ても、南北集中域によって武家屋敷地が区画される時期を遡るものであり、近世初頭あるいは中世段階に構築されたものである可能性がある…」（註「南北溝集中域」=近世に帰属し、甲府城下町の町割り（街路区画）と方向性を一にしている…）とされる。
- ④2丁目目で検出された石列の主軸の方位は（検出された石列中で全体的に礫の長軸が向いている方向を主軸の方位とした）溝状遺構と同様途中で方位が変動しているが、検出された3基共に一方の主軸の方位がN-19°-E～N-20.5°-Eを指している。これも武田城下町の区割りと一致している。
- ⑤SX1はSD5と重なっているが主軸の方位が異なっており別の時期と考える事もできるが、切り合い関係で見ると、切られていると思われる溝の主軸の方位が新しい甲府城下町の方位を指している。

土坑は、単独で使用された土坑、柱穴もしくは今回検出された遺構と関わる可能性のある土坑が考えられる。

- ⑥SK10は、SD4の北端で検出された。SD4の関連施設と思われ、底面から桶の底板のみが出土している。
 - ⑦遺物に注目してみると、2丁目地点から北宋銭と思われる銭が出土している。前述した『甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区』地点でも北宋銭が出土している。
 - ⑧土器類と行った遺物は周辺の調査でも出土している陶磁器類が主である。
- このようにしてみると、今回検出された遺構は、遺構の主軸の方位や出土した遺物から武田城下町と



第 39 図 丸の内 2 丁目地点 時期別遺構図

甲府城下町の2時期が混在して検出されたと言って良いと考える。

今回検出された遺構の性格については、武田城下町の遺構は不明であるものの甲府城下町については、絵図や記録類の検討から、勤番衆の居住地に関わる遺構が含まれる可能性は十分に考えられよう。

甲府城下町に関しては、絵図・古文書等良好な史料が多く残されている。今回、多くの絵図・古文書の所在を知る事ができ、甲府城下町の武家屋敷や町屋に住む人々の生活に触れる事が出来た。それらすべてをここに紹介する事は出来なかったが、甲府城下町がより身近な存在に感じられるようになった。

今後は周辺で行われた調査結果を組み立て、武田城下町と甲府城下町の土地利用の変遷がより詳細に検討され明らかになってくると思われる。

参考文献

- 甲府市役所 1918『甲府略史』
- 甲斐志料刊行会 1932「裏見寒夜」『甲斐志料集成2』
- 甲斐志料刊行会 1932「稻久山一蓮寺及甲府城舊記」『甲斐志料集成7』
- 甲斐叢書刊行会 1934「甲陽柳秘録」・「柳澤家秘藏實記」・「柳澤一代記」・「甲州道中記」・「享保9年甲府城明渡記録」
『甲斐叢書 第3巻』
- 甲斐叢書刊行会 1934「甲斐廻手振」『甲斐叢書 第7巻』
- 外山秀一 2004「甲府盆地の地形環境の変化と人間の活動」『山梨県史研究 第12号』
- 西海真紀 2012「柳沢家筆頭家老柳沢権太夫保格の墓所について」『研究紀要28』山梨県埋蔵文化財センター
- 甲府市教育委員会 2001『甲府城下町遺跡Ⅰ』(甲府市文化財調査報告15)
- 甲府市教育委員会 2002『甲府城下町遺跡Ⅱ』(甲府市文化財調査報告19)
- 甲府市教育委員会 2006『甲府城下町遺跡Ⅲ』(甲府市文化財調査報告33)
- 甲府市教育委員会 2007『甲府城下町遺跡Ⅳ』(甲府市文化財調査報告39)
- 甲府市教育委員会 2009d『甲府城下町遺跡Ⅴ』(甲府市文化財調査報告52)
- 甲府市教育委員会 2013『甲府城下町遺跡Ⅸ』(甲府市文化財調査報告64)
- 甲府市教育委員会 2013『甲府城下町遺跡Ⅹ』(甲府市文化財調査報告66)
- 甲府市教育委員会 2014『甲府城下町遺跡Ⅺ』(甲府市文化財調査報告69)
- 甲府市教育委員会 2001b『秋山氏館跡』(甲府市文化財調査報告16)
- 甲府市教育委員会 2004『塩部遺跡Ⅰ』(甲府市文化財調査報告24)
- 甲府市教育委員会 2005『塩部遺跡Ⅱ』(甲府市文化財調査報告30)
- 甲府市教育委員会 2004『甲府市内遺跡Ⅰー昭和61年度～平成5年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告26)
- 甲府市教育委員会 2005『甲府市内遺跡Ⅱー平成6年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告29)
- 甲府市教育委員会 2006『甲府市内遺跡Ⅲー平成7・8年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告31)
- 甲府市教育委員会 2007『甲府市内遺跡Ⅳー平成9～10年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告35)
- 甲府市教育委員会 2008『甲府市内遺跡Ⅴー平成11～12年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告38)
- 甲府市教育委員会 2009『甲府市内遺跡Ⅵー平成13～14年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告41)
- 甲府市教育委員会 2010『甲府市内遺跡Ⅶー平成15～16年度市内遺跡試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告49)
- 甲府市教育委員会 2011『甲府市内遺跡Ⅷー平成17～18年度試掘調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告59)
- 甲府市教育委員会 2013『甲府市内遺跡Ⅸー平成19～20年度試掘確認調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告63)
- 甲府市教育委員会 2014『甲府市内遺跡Ⅹー平成21・22年度試掘確認調査報告書ー』(甲府市文化財調査報告68)
- 甲府市史 1987『甲府市史 資料編 第2巻 近世Ⅰ』

- 甲府市史 1987『甲府市史 通史編 第3巻 近代』
- 山梨県教育委員会 1995『甲府城下町遺跡』
- 山梨県教育委員会 2004a『甲府城下町遺跡—甲府駅周辺土地区画整理事業地内 43 街区埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡（日向町遺跡第2地点）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第220集）
- 山梨県教育委員会 2005『県指定史跡甲府城（上巻）（下巻）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第222集）
- 山梨県教育委員会 2008『甲府城下町遺跡（北口県有地）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第258集）
- 山梨県教育委員会 2009b『県指定史跡甲府城』
- 財団法人山梨文化財研究所 2011『甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）』
- 山梨県 1996『山梨県史 資料編9 近世2 甲府町方』
- 山梨県 1998『山梨県史 資料編8 近世1 領主』
- 江戸遺跡研究会 [編] 2001『図説江戸考古学研究事典』
- 林英夫監修 根岸茂夫・佐藤孝之・安池尋幸編 1993『新編 古文書解読字典』(柏書房)

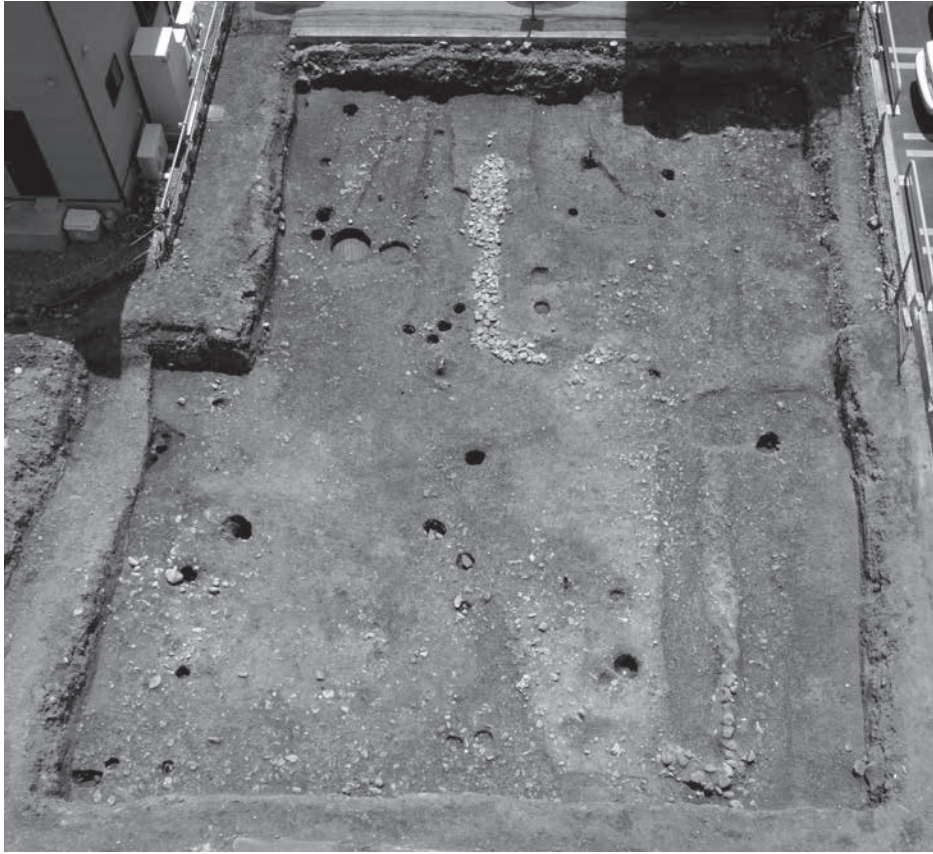
丸の内二丁目 145-2 地点
写真図版



1. 調査前風景



2. 調査区 (真上から)



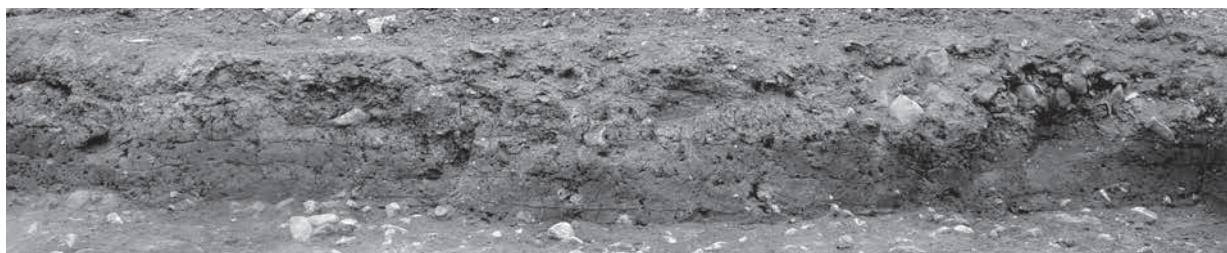
3. 調査区 (北から)



4. 調査区 (北東から)



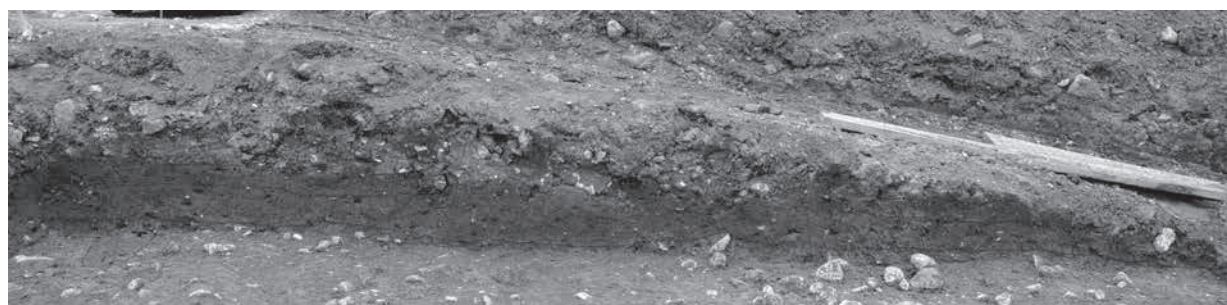
5. 調査区周辺（北から）



6. 調査区北壁東側



7. 調査区北壁西側



8. 調査区東壁



9. 調査区西壁北側



10. 調査区西壁南側



11. 調査区南壁



12. SD 1・2 (北東から)



13. SD 1・2土層断面（南から）



14. SD 2南側焼土検出1（南から）



15. SD 2北側焼土検出2（南から）



16. SD 2土層断面（南から）



17. SD 2 獣骨出土状況（南から）



18. SD 3（北から）



19. SD 3・SK 12土層断面（南から）



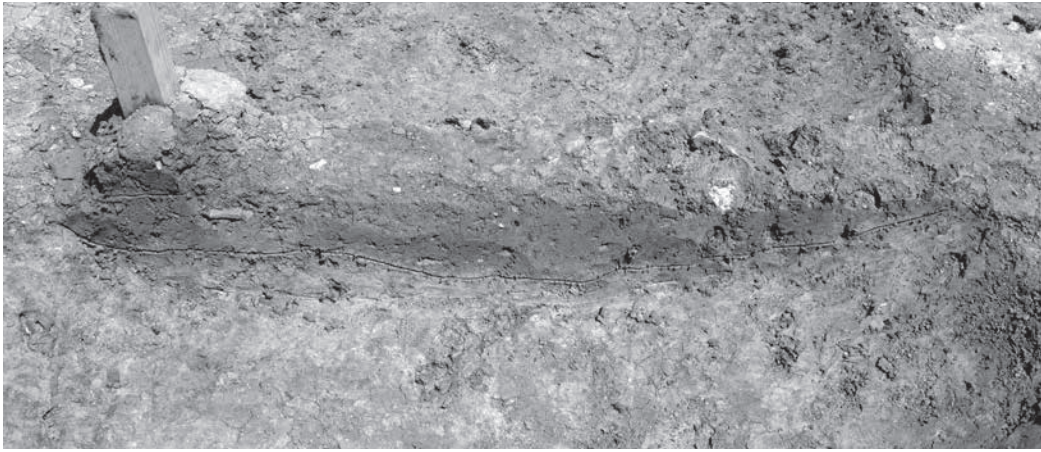
20. SD 3 遺物出土状況（南から）



21. SD 4 (南から)



22. SD 5 (南から)



23. SD 4 土層断面 (南から)



24. SD 5 土層断面 (南から)



25. SX 1 (南西から)



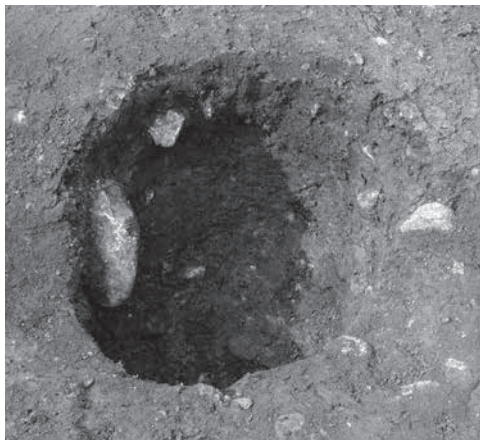
26. SX 2 (南から)



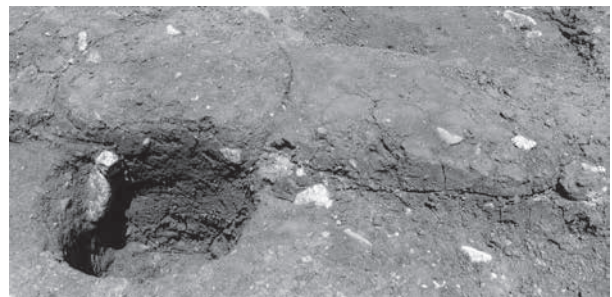
27. SX 2 礫除去 (南から)



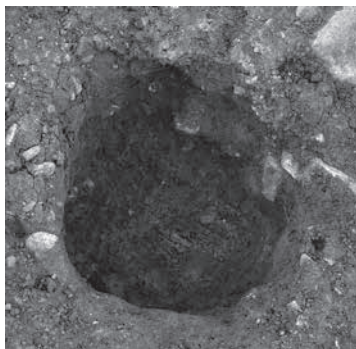
28. SX 3 (南から)



29. SK 1 (南から)



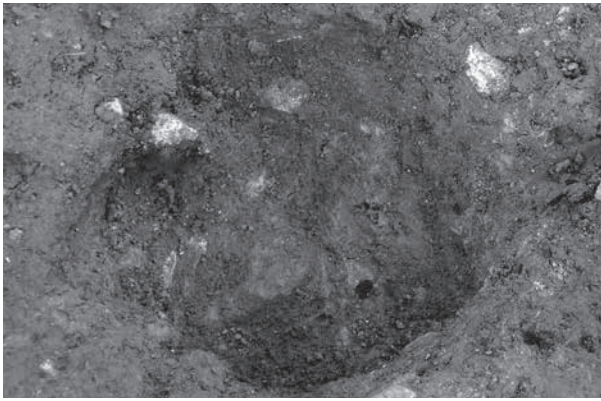
30. SK 1・SD 1土層断面 (南から)



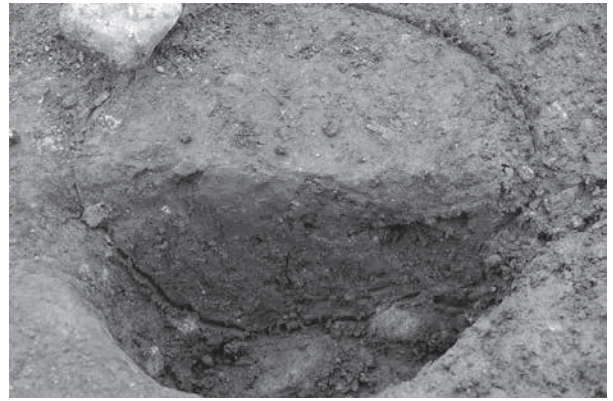
31. SK 2 (南から)



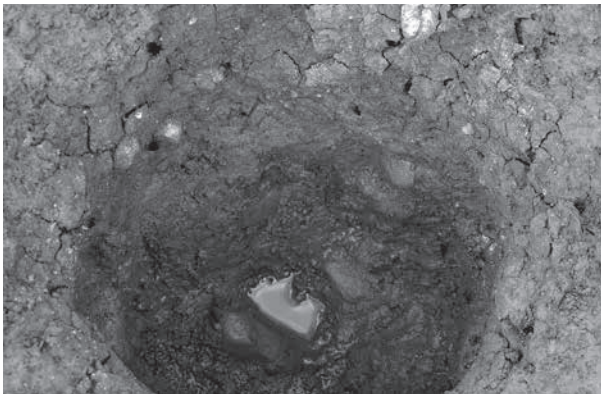
32. SK 2土層断面 (南から)



33. SK 3 (南から)



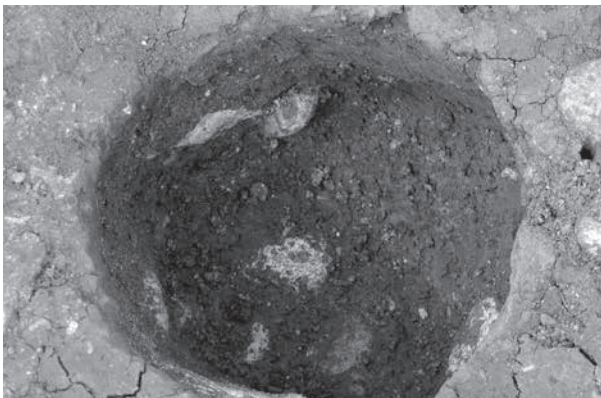
34. SK 3 土層断面 (南から)



35. SK 4 (南から)



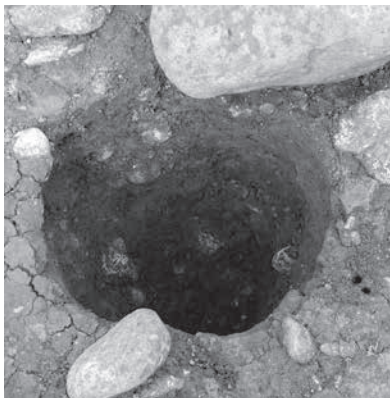
36. SK 4 土層断面 (南から)



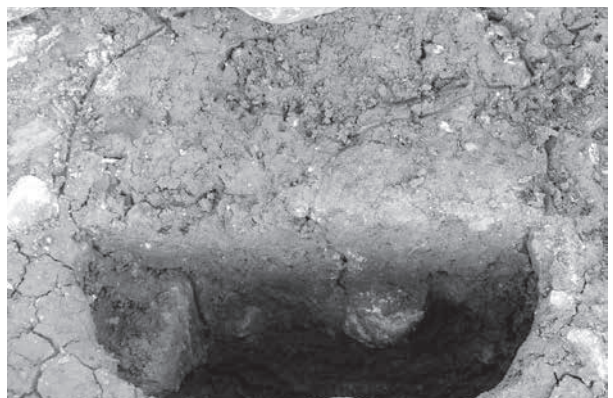
37. SK 7 (南から)



38. SK 7 土層断面 (南から)



39. SK 8 (南西から)



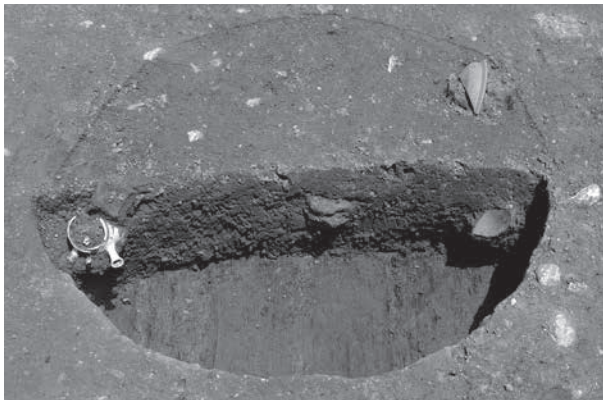
40. SK 8 土層断面 (南西から)



41. S K 10 検出状況 (北から)



42. S K 10 上面出土状況 (北から)



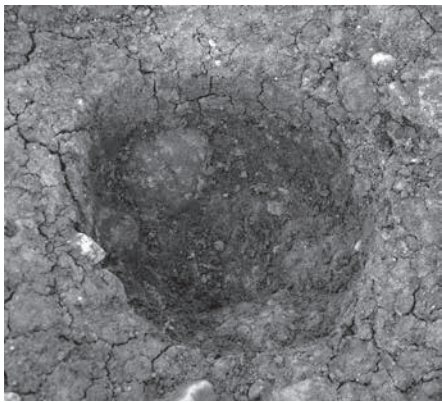
43. S K 10 土層断面 (南から)



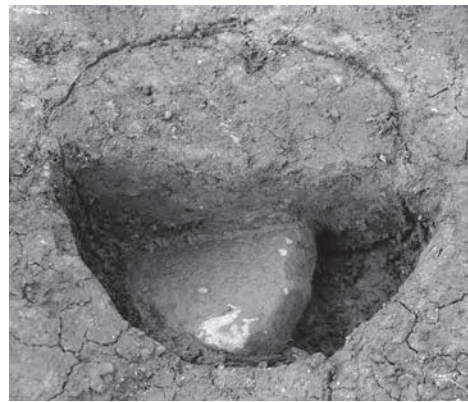
44. S K 10 底板 (南から)



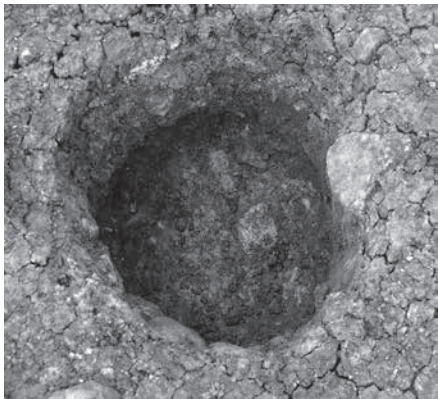
45. SK 10 断割り (南から)



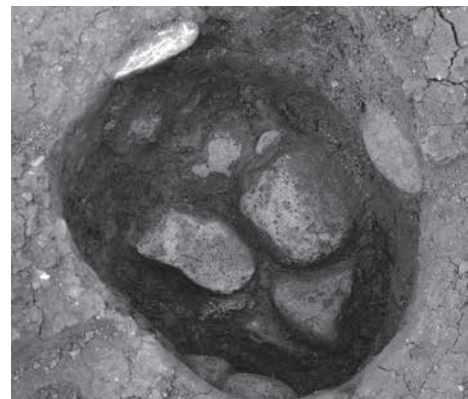
46. SK 11 (南から)



47. SK 11 土層断面 (南から)



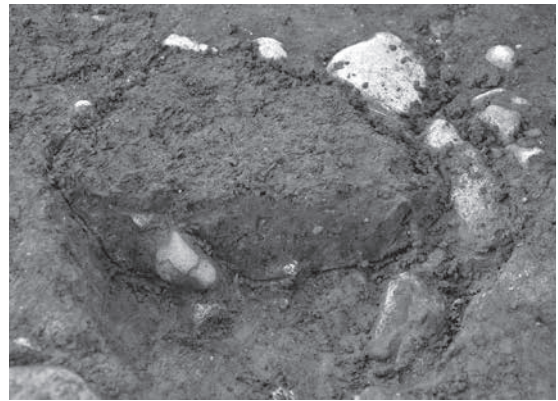
48. SK 12 (南から)



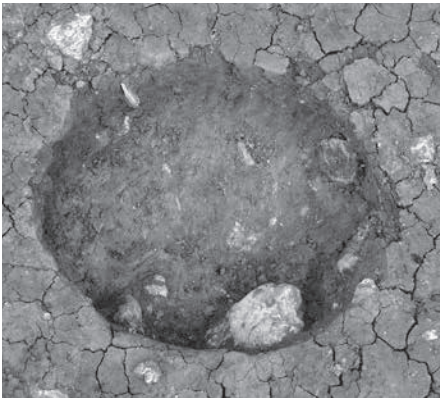
49. SK 12 根固石 (南から)



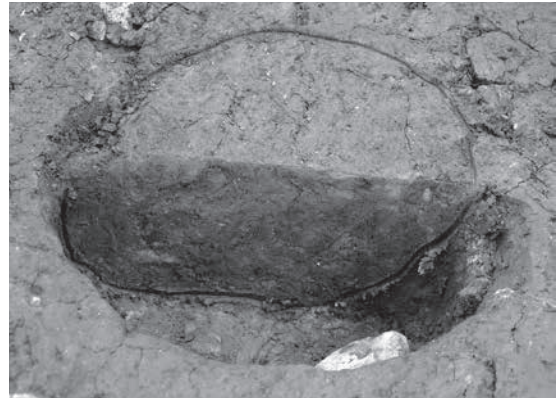
50. SK 13 (南から)



51. SK 13 土層断面 (南から)



52. SK 14 (西から)



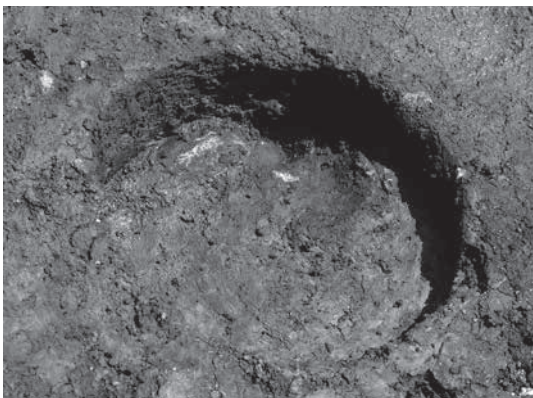
53. SK 14 土層断面 (西から)



54. SK 17 (南から)



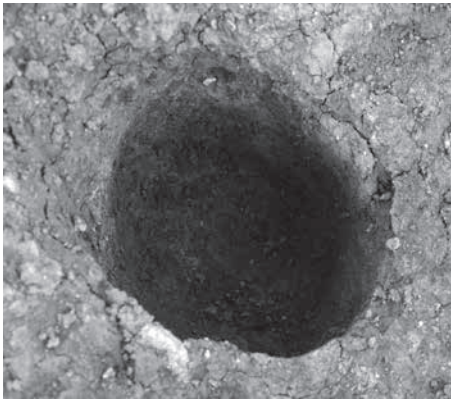
55. SK 17 土層断面 (南から)



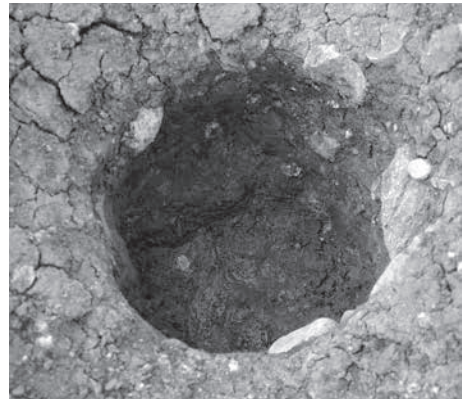
56. SK 18 (南から)



57. SK 18 土層断面 (南西から)



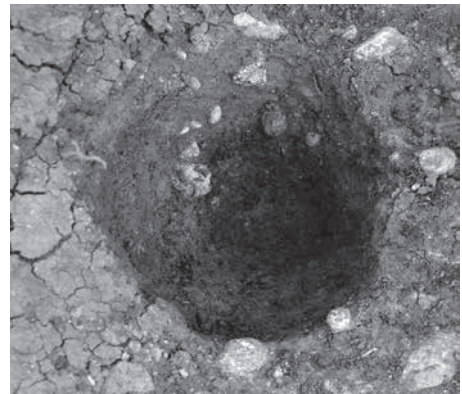
58. S K 24 (南から)



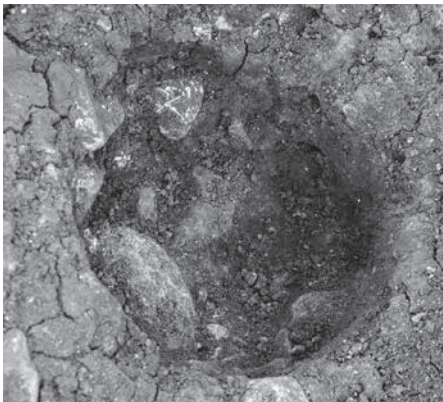
59. S K 25 (南から)



60. S K 25 土層断面 (南から)



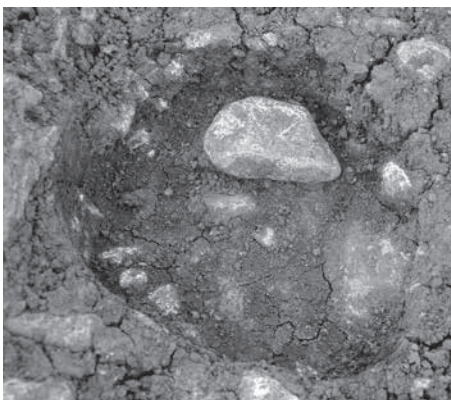
61. S K 26 (北から)



62. S K 27 (北から)



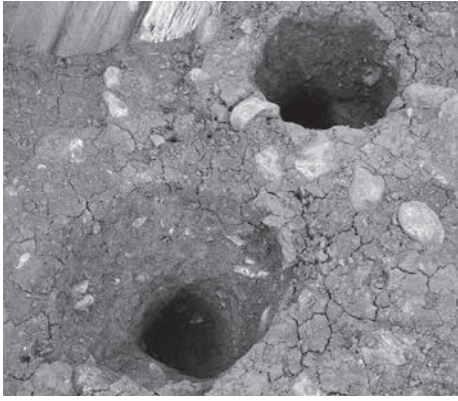
63. S K 27 土層断面 (南から)



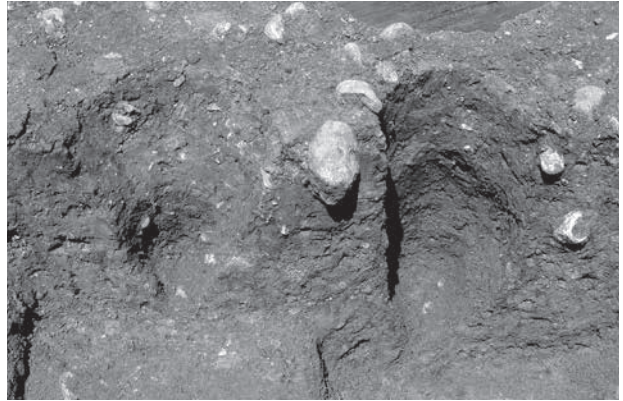
64. S K 28 (南から)



65. S K 28 土層断面 (北東から)



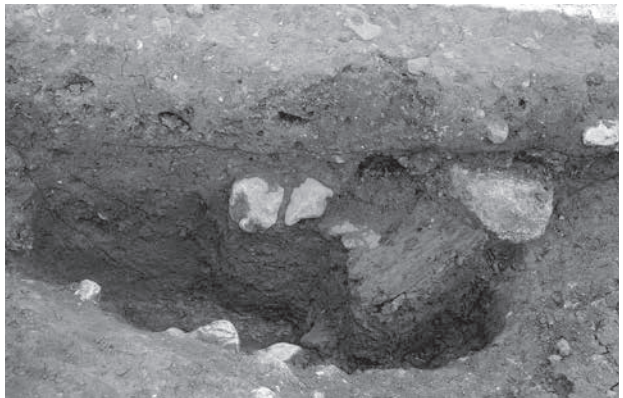
66. S K 32・33 (南から)



67. S K 32・33 断割り (東から)



68. S K 35 (北から)



69. S K 35 土層断面 (西から)



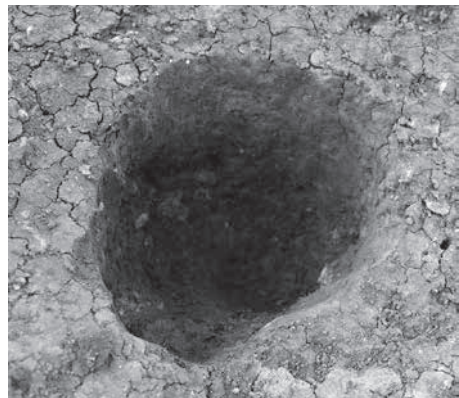
70. S K 35 東西土層断面 (北から)



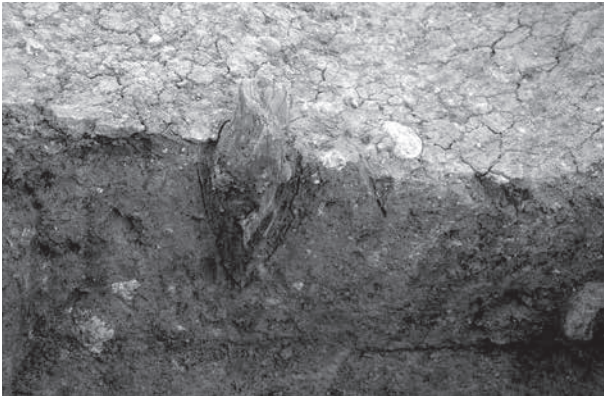
71. S K 35 遺物出土状況1 (北から)



72. S K 35 遺物出土状況2 (東から)



73. S K 37 (南から)



74. 杭1断割り (北から)



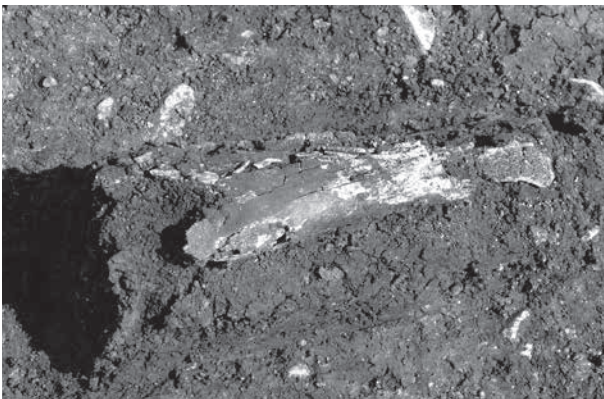
75. 杭2断割り (西から)



76. S D 4 周辺遺構検出状況 (北東から)



77. B 4 グリッド遺物出土状況 (北東から)



78. C 4 グリッド獣骨出土状況 (西から)



79. D 3 グリッド遺物出土状況 (北から)

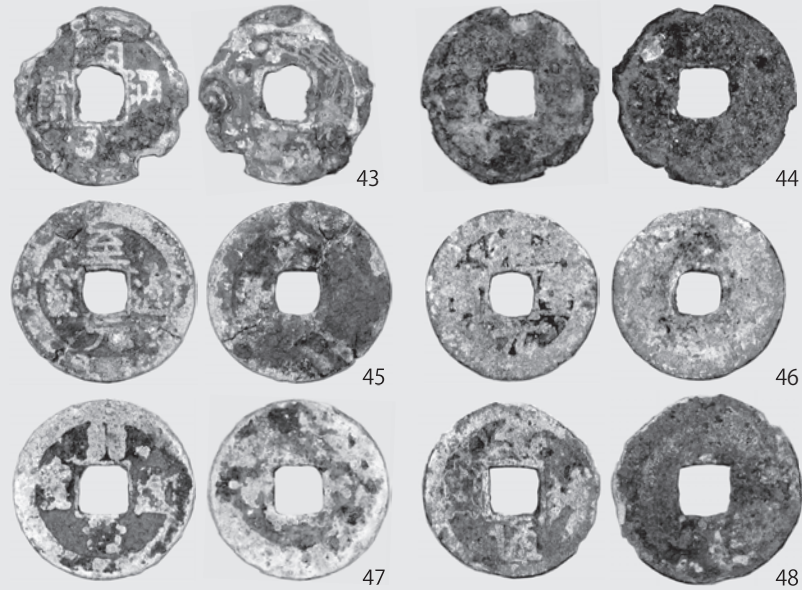
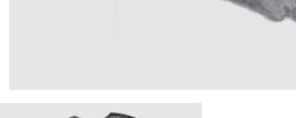
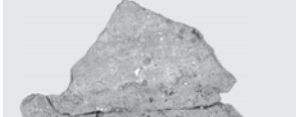
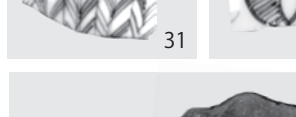
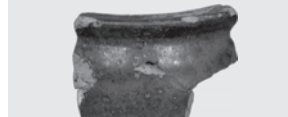
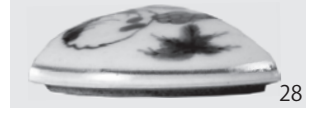
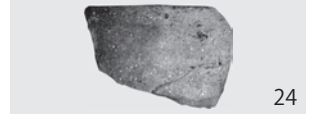


80. 作業風景



81. 実測風景





丸の内一丁目 12-10 地点
写真図版



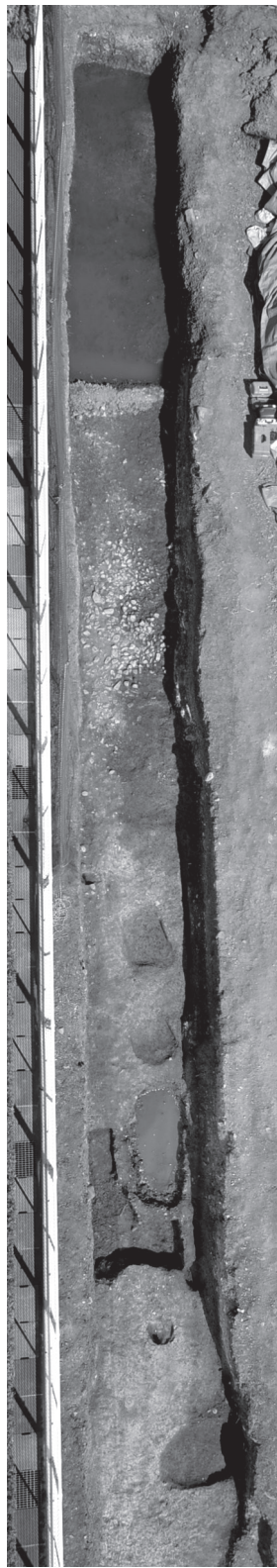
1. 調査前風景1 (南から)



2. 調査前風景2 (南から)



全景



北側



南側

写真図版2



南側

3. 調査区



4. 調査区北側地山礫層（南から）



5. 調査区南側遺構検出状況（北から）



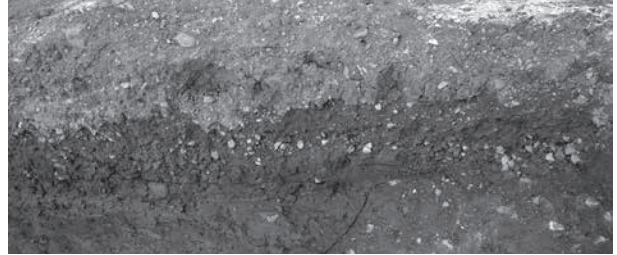
6. 調査区北壁土層断面



7. 調査区東壁土層断面1 (南西から)



8. 調査区東壁土層断面2



9. 調査区東壁土層断面3



10. 調査区南壁土層断面



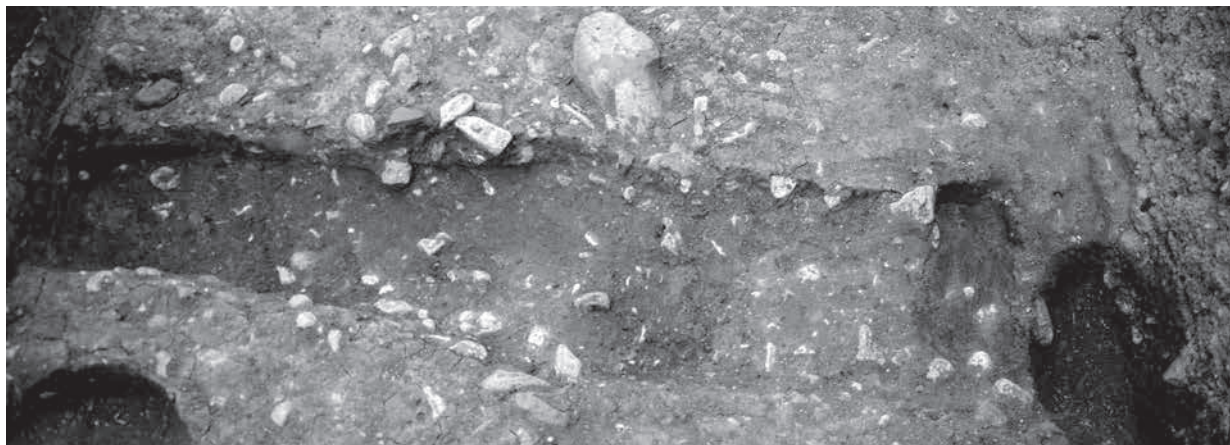
11. 調査区西壁土層断面1 (南東から)



12. 調査区西壁土層断面2 (北東から)



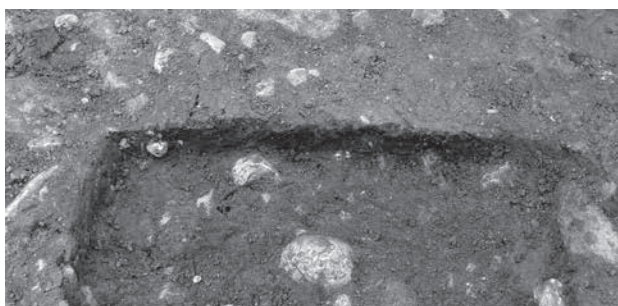
13. 調査区西壁土層断面3 (北東から)



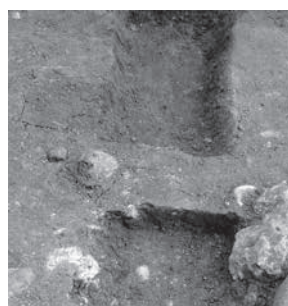
14. SD 1 (北西から)



15. SD 2 (北西から)



16. SD 1 土層断面 (東から)



17. SD 2 土層断面 (西から)



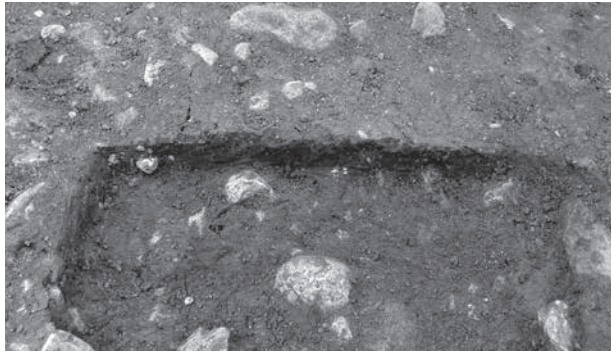
18. SD 3 (南東から)



19. SD 3 東壁土層断面



20. SK 1 (東から)



21. SK 1 土層断面 (東から)



22. SK 2・4・5 (東から)



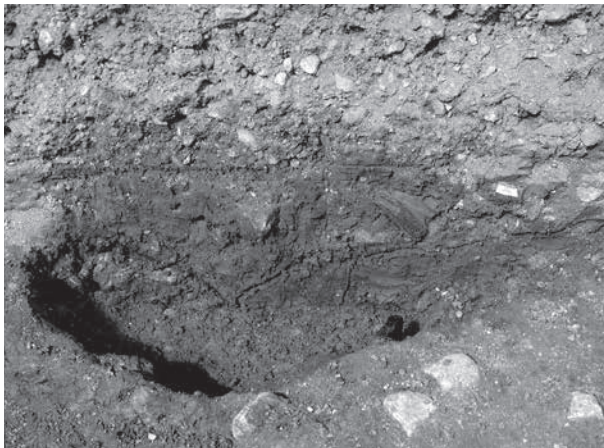
23. SK 2・4・5 (北西から)



24. SK 2・4・5 東壁土層断面



25. SK 2・4・5 北壁土層断面



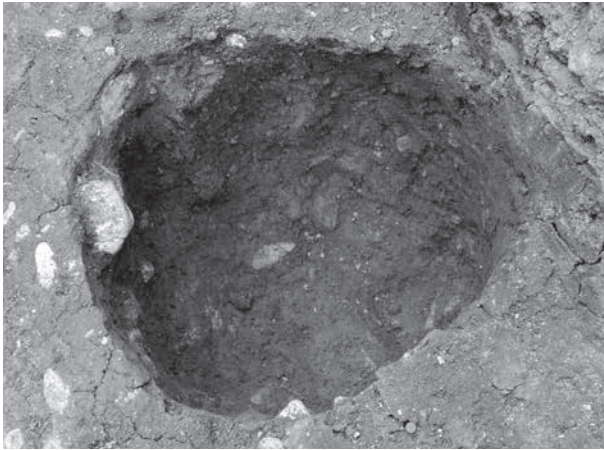
26. SK 3 (東から)



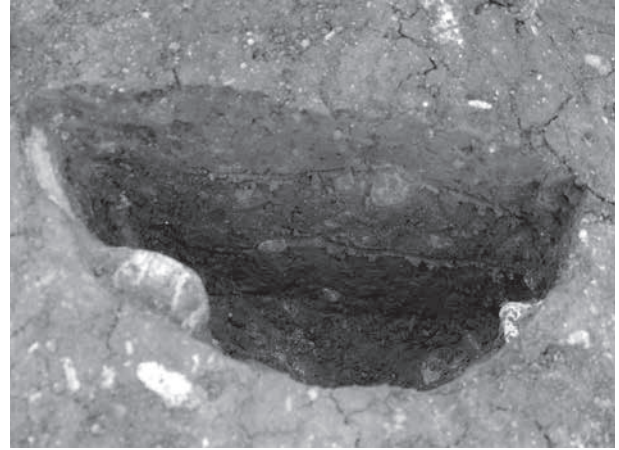
27. Pit 1 (東から)



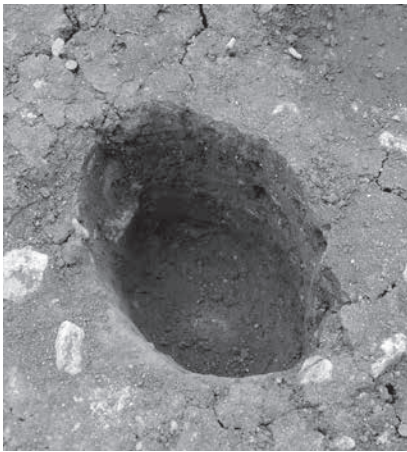
28. Pit 1 土層断面 (東から)



29. Pit 2 (東から)



30. Pit 2 土層断面 (東から)



31. Pit 3 (東から)



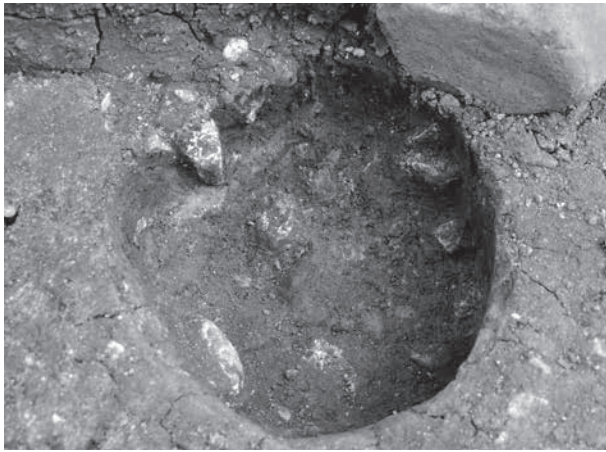
32. Pit 3 土層断面 (東から)



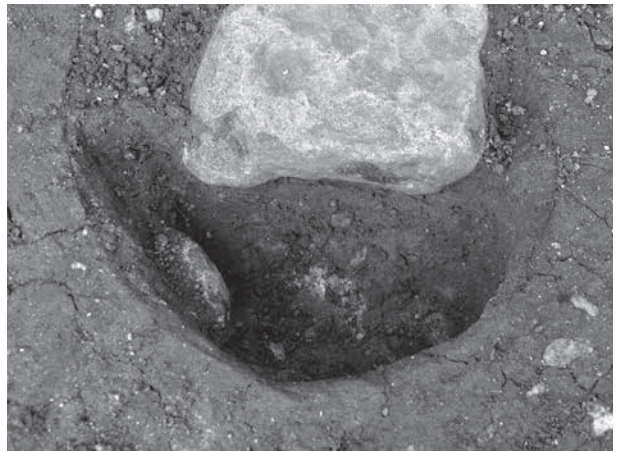
33. Pit 4 (東から)



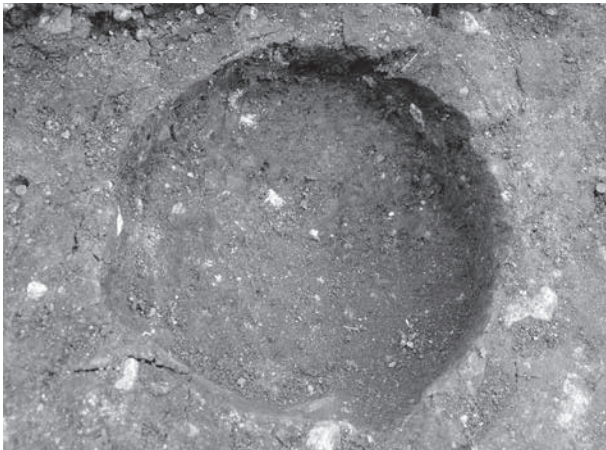
34. Pit 4 土層断面



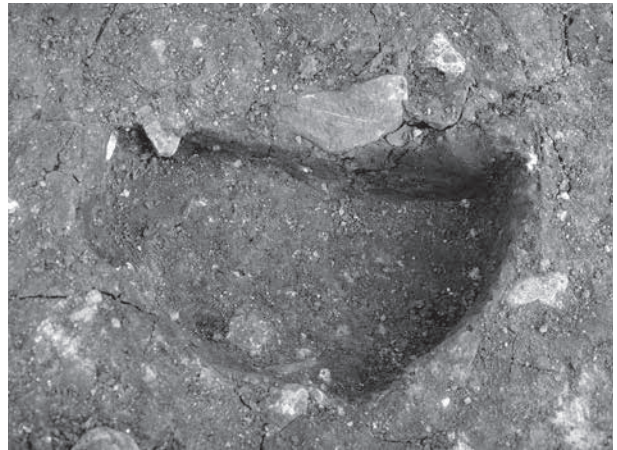
35. Pit 5 (北西から)



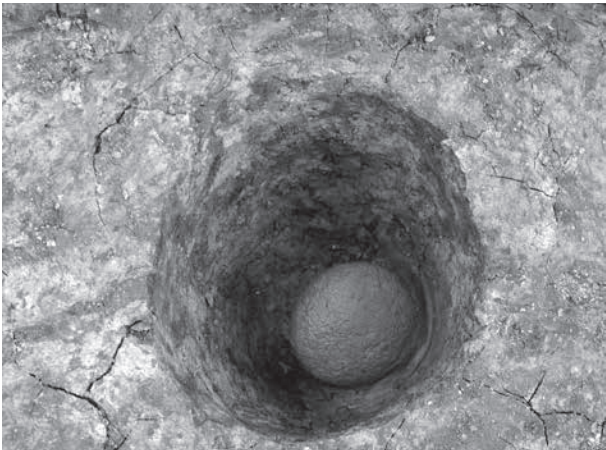
36. Pit 5 土層断面 (西から)



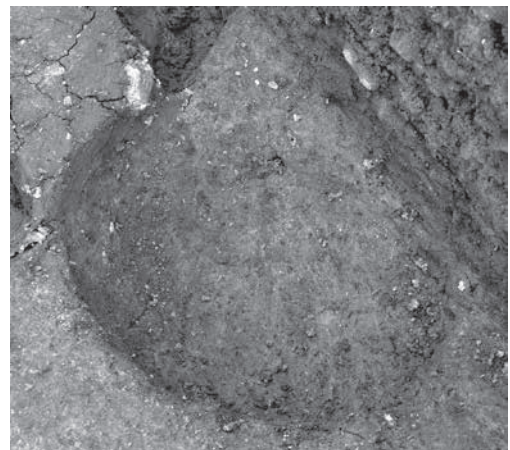
37. Pit 6 (西から)



38. Pit 6 土層断面 (西から)



39. Pit 7 (北西から)



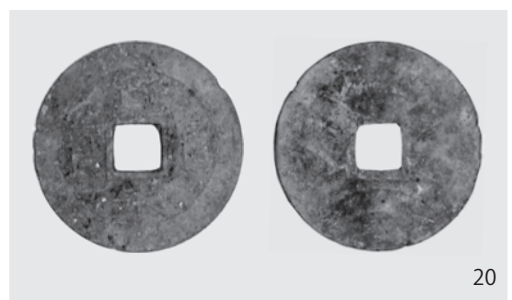
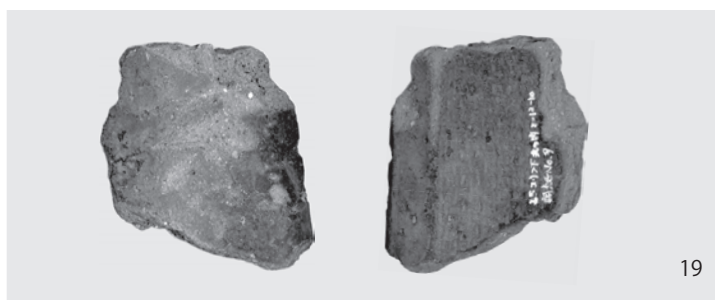
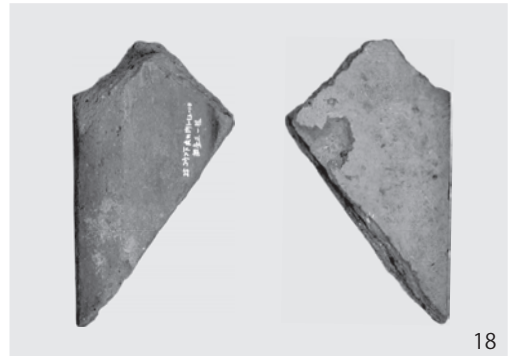
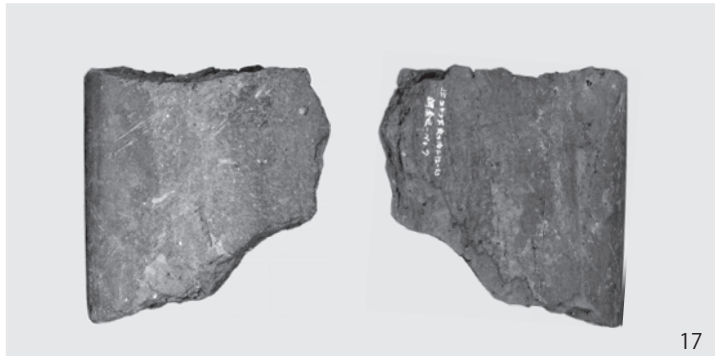
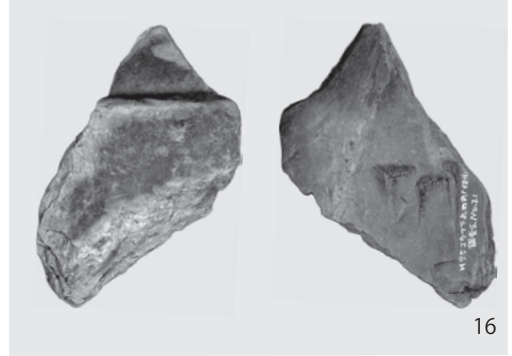
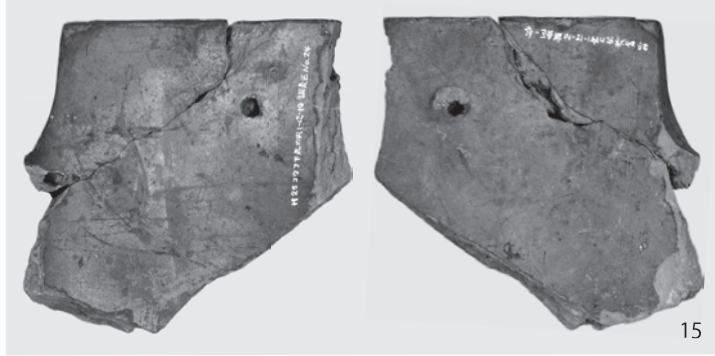
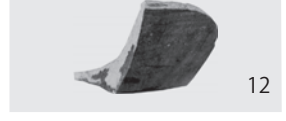
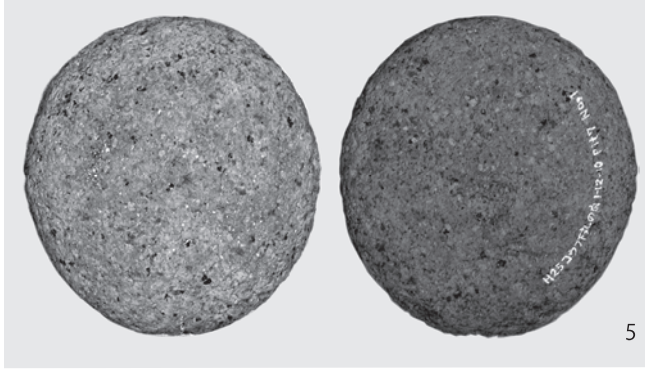
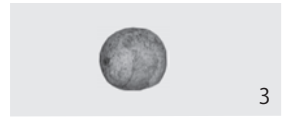
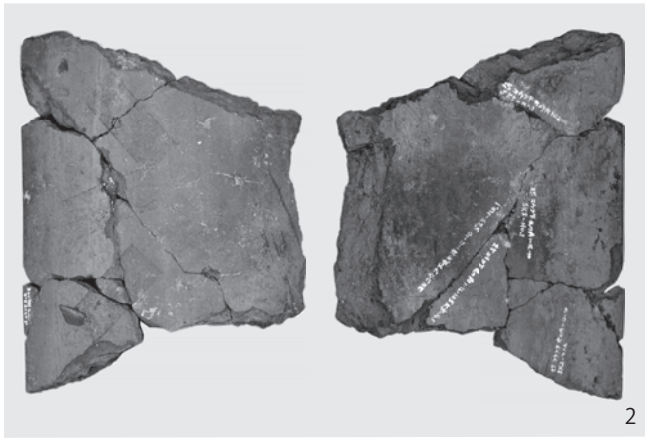
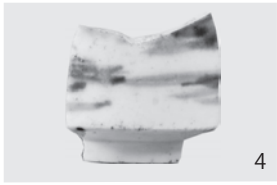
40. Pit 8 (南西から)



41. 作業風景 (北東から)



42. 実測作業風景 (南から)



報告書抄録

フリガナ	コウフジョウカマチイセキXV(マルノウチ2チョウメ145-2チテン・マルノウチ1チョウメ12-10チテン)							
書名	甲府城下町遺跡XV(丸の内2丁目145-2地点・丸の内1丁目12-10地点)							
副書名	一宅地造成・区画整理に伴う発掘調査報告書一							
編著者名	平塚洋一(甲府市教育委員会)・小谷亮二(昭和測量株式会社)							
編集機関	昭和測量株式会社							
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3-11-27 TEL 055-235-4448							
発行年月日	西暦2015(平成27)年3月13日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
コウフジョウカマチイセキ 甲府城下町遺跡 マルノウチ2チョウメ 丸の内2丁目 145-2チテン 145-2地点	ヤマナシケン 山梨県	19201	253	35°	138°	20110711～20110831	220	宅地造成
	コウフシマルノウチ 甲府市丸の内			40′	33′			
	2丁目145-2			54″	54″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
甲府城下町遺跡 丸の内2丁目 145-2地点	城館跡	中世	溝状遺構、石列、 土坑	銭、土器		武田城下町		
		近世	溝状遺構、石列、 土坑	陶磁器・瓦		甲府城下町		
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
コウフジョウカマチイセキ 甲府城下町遺跡 マルノウチ1チョウメ 丸の内1丁目 12-10チテン 12-10地点	ヤマナシケン 山梨県	19201	253	35°	138°	20130826～20131011	90	区画整理
	コウフシマルノウチ 甲府市丸の内			40′	34′			
	1丁目12-10			01″	00″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
甲府城下町遺跡 丸の内1丁目 12-10地点	散布地	縄文時代		磨石		遺物は縄文時代に属するが根固め石として使用した時期は近世か。		
	城館跡	中世	溝状遺構			武田城下町(SD1は西に隣接する調査区で検出された48溝と合流する。)		
		近世	溝状遺構、土坑	陶磁器・瓦・銭		甲府城下町		

甲府市文化財調査報告書 第76集

甲府城下町遺跡XV
(丸の内2-145-2地点・丸の内1-12-10地点)
一宅地造成・区画整理に伴う発掘調査一

発行日 平成27年3月13日発行

編集・発行

甲府市

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 TEL 055-237-1161

甲府市教育委員会教育部 生涯学習室文化課

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内1丁目18番1号(本庁舎9階)

TEL 055-223-7324

昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3-11-27 TEL 055-235-4448

印刷・製本 株式会社 内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央2-10-18 TEL 055-233-0188
